

天使たちは気づかれずに

スワミ・ヴィヴェーカーナンダ

一

人生の重荷に圧され俯いて

暗い淋しい小路を辿ってゆく

その人生の意味するものは喜びではない、

つらい厳しい苦しみだった。

その人間には

束の間の気休めほどの光さえ、

頭脳からも心臓からも

閃いては来なかった。

そのあげく快樂と苦痛とのあいだ

生と死とのあいだ、

悪しきものと善とのあいだに

一線を画するしるしさえ、ほとんど

視野から掻き消されてしまった。

ところがある夜、幸いにも

かすかながら美しい一条の光明が

さしてくるのを見た。

それが何であるか、

どこからきて来たのか、

皆目わからなかったけれど、

それを神と呼んで礼拝した。

まったく思いがけなかった希望

というものがやって来て

彼の全身全霊に満ちわたった。

そして人生は彼にとって

かつて夢みることのできた以上のものを意味し

彼の知っていた一切を覆うた。

いや、彼の世界を越えたところまで

覗きこんだのだった。

賢い人々は目くぼせして微笑した、

そしてそれを「迷信」と呼んだ。

しかし彼はその力と平和とを

じかに感じていたので、

おとなしく言い返した。

「おお幸いなるかな迷信よ！」

## 二

富と権力という美酒に酔いしれ、

それを享樂しうる健康に恵まれた男が

おのが狂乱のコースを驀進した。

ついには、この大地は自分のために

作られた彼の快樂の庭園であつて

他人は彼に娛樂をもつてくるために

作られた這いまわる虫けらだと

考えるようになった。

ついには快樂で燃やされた喜びの

千万の灯が、彼の目の前で

不断に変幻する色彩いろどをなして

昼も夜もチラチラ閃きらいていたのが、

彼の視力を曇らし始めて、彼の官能が飽満してきた。

ついには、利己心が固い腫瘍のように

彼の心臓一面にひろがった。

そして快樂は感じがなくなり、

彼にとって苦痛しか意味しなくなった。

前にはあれほど喜ばしく

貴重であつた官能の耽溺生活が

彼の両腕にかかえられて腐敗した死体と化した。

それを投げ出したい気持はいっぱいだが

投げ出そうとすればするほど

それがしがみついてくる。

そして狂つた頭脳で、

無数の死の形式を乞い求めた。

しかし例の魔力のまえに怯むのみだった。

それから悲哀がやって来た。

富と権力が行ってしまった。

それが苦悶と涙に沈む一切の人類と

彼を血縁にしてくれた。

友人たちは嘲笑うのだったが、

彼の唇は感謝にみちた調子で

こう語るのだったの

「おお幸いなるかな困窮よ！」

### 三

健康な肉体には生れついたが

深い強い情欲に抵抗するとか

猛烈な力に溢れる衝動を投げ棄てるとか

そんなことができる意思には

恵まれていない男、

ちようど善良で親切な人としてとおる人物、

彼は他の人老が湧きかえる怒濤に向って

無駄な長い悪戦苦闘をしている間は

自分だけ安全だということを認めていた。

ついには彼の精神が病的になって

まるで腐敗した部分を求める蠅のように

悪いものを見ることが

できるようになった。

それが彼の目を永久にあけさせて

新しい発見をさせた――

石・や・木・は・決・し・て・法・則・を・破・る・こ・と・が・な・い・、

し・か・し・、・い・つ・ま・で・も・石・や・木・の・ま・ま・だ・、

ただ人間だけが束縛や法則を乗り越え

運命と戦ってこれに打ち克つ力を

恵まれているということの発見だった。

彼から消極的な性質が消え失せ、

人生が広い、新しいものとして現れた。

それがより広い、より新しい

ものになっていった。

しまいには

前途に光がパツとさし始めた。

そして永遠の平和が宿るところのもの

——ただし苦闘の海をかちわたって  
初めてそこに達することができる  
のだったが——その閃ひらめきが  
勇気を鼓舞するように現れて来た。  
そのとき、これまで彼を木や石と  
同類たらしめていた一切のものを  
ふりかえって見た、そしてこれまで  
世界が彼から遮断していたもの、  
それが何であるかを見た。  
それは彼の墮落だった。  
彼はその墮落を祝福した。  
そこで喜びにハートをふるわせ、  
「幸いなるかな罪よ！」と宣言した。

(二八九八年十一月に書かれた)

看よ、威圧してくる

力でない力、

闇のなかにある光、

眩い光のなかの陰影。

それは口をきいたことのない喜び、

そして感ぜられたことのない深い悲哀、

生活されたことのない不滅の生、

悼まれたことのない永遠の死。

それは喜びでもなければ悲しみでもない、

しかしその中間にあるもの。

それは夜でもなければ朝でもない、

だが二つを結び合わせたもの。

それは音楽における快い休止、

聖なる芸術における間<sup>ま</sup>だ。

情熱の発作のなかに挟まれて

それは心<sup>こゝろ</sup>の静けさだ。

それは目に見えない美しさだ。

ただひとり立っている愛だ。

それは謳われずに生きている歌、

決して知られたことのない知識だ。

それは二つの生命のあいだの死、

嵐の合間に現れる風、

創造がそこから起って、そして

そこへ帰ってゆくところの虚無だ。

涙のしずくがそこへ滴り落ちて

やがて微笑の姿をひろげるところの

それは生の目標であって、

平和こそ、その唯一の住家なれ。

(一八九九年ニューヨークのリジレイ・マナーにて作る)

ヴェーダーンタ哲学とは何か

今日一般にヴェーダーンタ哲学と呼ばれているものは、実際には現在インドに存在するいろいろ違った宗派のすべてを含んでいる。そんなわけで、いろいろ違った解釈が行なわれてきた。私の考えるところでは、彼らは二元論すなわちドヴァイタ (Dvaita) から始まり、非二元論すなわちアドヴァイタ (Advaita) に終る発展的過程をとっている。ヴェーダーンタという言葉は字義的には「ヴェーダの終り」を意味する。『ヴェーダ』はヒンズー族の經典である。——『ヴェーダ』といえば、西洋では往々にして『ヴェーダ』の讃歌と儀式だけを意味する。しかし現在は、これらの部分は役にたたなくなっている。インドではヴェーダという言葉は普通にヴェーダーンタ哲学のことを意味する。すべてのわが註解者たちはこの經典から文章を引用しようと思うとき、原則としてヴェーダーンタから引用する。ヴェーダーンタは註解者たちの間では別にシュルuteィス (Shruti 啓示)<sup>2</sup> という術語的名称がある。きてヴェーダーンタという名称で知られたすべての書物は必ずしも『ヴェーダ』の儀式的部分に従って書かれたものではなかった。例えば、その一つ——イーシャ・ウパニシャッド——は『ヤジュル・ヴェーダ』の第四十章を形成していて、『ヴェーダ』の一番古い部分の一つである。他の『ウパニシャッド』<sup>3</sup> で『ブラーマナ』(梵書) すなわち儀式的書物の部分をなしているものがある。『ウパニシャッド』のその余の部分は独立している。『ブラーマナ』のいずれかの部分にも『ヴェーダ』の他の部分にも含まれていない。しかし彼らが完全に他の部分から独立していたと仮定する理由はない。なぜなら、われわれがよく知っているとおりに、これらの多くは全然散佚してしまい、『ブラーマナ』の多くは絶滅しているからである。そこで、独立した『ウパニシャッド』は時の経過につれて廃棄された『ブラーマナ』のある部分に属していたのが、『ウパニシャッド』として残存したことも全く有り得ることだ。これらの『ウパニシャッド』はまた『森林の書』すなわち『アラニヤカ』(Aranyaka) と呼ばれている。

1 『ヴェーダ』は主として二つの部分に分けられる。「カルマ・カーンダ」(Karma-kānda) とジュナーナ・カーンダ」(Jñāna-kānda) ——働きの部分と知恵の部分——である。『ブラーマナ』(Brahma 梵書) の有名な讃歌と祭礼は「カルマ・カーンダ」に属している。儀式関係から離れて精神的な事柄を取扱った書物は『ウパニシャッド』(Upanishad 奥義書) と呼ばれている。『ウパニシャッド』は「ジュナーナ・カーンダ」すなわち「知恵の部分」に属している。すべての『ウパニシャッド』が、『ヴェーダ』から抄出した部分として構成されているのではない。いくつかは祭礼篇のなかに散らばっている。少なくとも一つは「サムヒター」(Samhitā) すなわち讃歌篇のなかにある。時おりウパニシャッドという語が『ヴェーダ』に含まれていない書物——例えば『ギーター』にも適用される。しかし原則として、『ヴェーダ』のなかに散在する哲学的論文に適用される。これらの論文は集められて、『ヴェーダーンタ』と呼ばれている。(原註)

2 シュルuteィ (Shruti) という語は「聞かれた事柄」を意味し『ヴェーダ』文獻の全部を包含しているけれども、註解者たちによって主として『ウパニシャッド』に適用されている。(原註) 従来邦訳ではシュルuteィを「啓示」としている(訳者)。

3 『ウパニシャッド』は百八巻であると言われている。それらの成立年代は正確に決定することはできない。——ただ、それが仏教の運動が発生したときより以前のものであることだけは確かである。

『小ウパニシャッド』の若干篇には、その後の日付を暗示するような兆候があるけれども、それは、その論文成立の時代の新しいことを証明するものではない。サンスクリット文学の多くの場合のように、ある本の実体が非常に古いものでありながら、宗派の徒の手にかかって彼らの特別の宗派を勿体づけるために、後世の出来事で、いわば上塗りされていることがある。(原註)

それでヴェーダーンタが実践的にはヒンズー族の經典をかたちづくっている。そして正統派に属するすべての哲学体系は、これを彼らの根底にしなければならぬ。仏教徒やジャイナ教徒といえども、彼らの目的に合致するときには、ヴェーダーンタから文章を引用して權威づけるであらう。

インドにおける哲学の学派はすべて『ヴェーダ』に基づいていると称するけれども彼らの体系に対してはそれぞれ違った名まえをつけた。最後の学派であるヴィヤーサ (Vyasa) の体系はそれ以前の諸体系よりもより多くヴェーダの教説を自己の拠り所とした。そしてサンクヤ (数論派) やニヤーヤ (尼夜耶派) のような先行する各種の哲学をヴェーダーンタの教説と調和する企てをなした。そこで、それが特にヴェーダーンタ哲学と呼ばれている。そしてヴィヤーサーの सूत्र (Sūtras) すなわち『箴言集』は近代インドにおいてヴェーダーンタ哲学の基礎である。またこれらのヴィヤーサーの सूत्र は違う註解者たちによっていろいろ違って説明されてきた。概して今インドでは三種の註解者がいる。彼らの解から三つの哲学体系と宗派が生じている。一つは二元論すなわちドヴァイタ (Dvaita) である。その二は修正派非二元論すなわちヴィシシュタードヴァイタ (Viśiṣṭā-dvaita) である。そして三番目が非二元論すなわちアドヴァイタ (Advaita) である。このなかで、二元論と修正派非二元論がインド人民の最大部分を占めている。非二元論者は比較的少数である。さて、私はあなたがたの前にこれら三つの宗派のすべてに含まれている觀念をごらんに入れようと思う。しかし、それに入ってゆく前に、私は一つの注意をしたい——これら異なったヴェーダーンタ体系は一つの共通な心理学をもっているということだ。それはサンクヤ体系の心理学であるということだ。サンクヤ心理学はニヤーヤ体系やヴァイシエシカ (Vaiśeṣika 勝論派) の体系と非常によく似たもので、ただ小さい特殊部分が違っているにすぎない。

- 1 ヴィヤーサーは伝説的な学者で、ヴェーダの編纂者とされている。『生きる秘訣』(日本教文社刊) 一〇六—一〇八ページを見よ。(訳者註)
- 2 註解書にはパーシユヤ (Bhāṣya) 、ティカー (Tīkā) 、ティッパニ (Tippaṇi) 、チュールニ (Churni) などのようにいろいろ違った種類がある。そのなかで、パーシユヤを除けば、すべてテキストの説明やテキストのなかの難語の説明である。パーシユヤは元來、註解書ではない。テキストからの哲学体系の究明であって、その目的は言葉の説明ではなく、哲学を引き出すことである。そうやってパーシユヤの著者は彼自身の体系を繰りひろげ、テキストを彼の体系の權威づけに用いている。

ヴェーダーンタにはいろいろ違った註解が生じている。その教説はヴィヤーサーの哲学的箴言集に究極の表現を見出した。この論文はウツタラ・ミマムサー (Uttara Mīmāṃsā) と呼ばれ、ヴェーダーンティズムの標準的權威である。いや、ヒンズー經典のなかで最も權威のある表現である。一番敵対している宗派もヴィヤーサーのテキストをとりあげて、それを自分の哲学と調和させるように、いわば強制されたかたちであった。極めて古い時代においても、ヴェーダーンタ哲学の註解者たちは二元論者、修正派非二元論者及び非二元論者というヒンズー

族の三つの有名な宗派をかたちづくった。古代の註解書は恐らく失われたろう。しかし、それらはシャンカラ (Shankara)、ラーマヌジャ (Ramanuja)、マドヴァ (Madhva) という仏教以後の註解者によって後世に復活せしめられた。シャンカラは非二元論的形式を復活させ、ラーマヌジャは古代の註解者ボドハーヤナ (Bodhayana) の修正派非二元論的形式を、そしてマドヴァは二元論的形式を復活させた、インドでは宗派の相違は主として彼らの哲学の相違による。祭式儀礼における相違は僅少であって、彼らの哲学及び宗教の基礎が同じである。

すべてのヴェーダーンティストが三つの点で合意する。彼らは神を信ずる。啓示されたものとしてヴェーダを信ずる。そして万有循環を信ずる。われわれは、すでにヴェーダを考察してきた。万有循環に関する信仰は次のとおりである。宇宙にみちわたるすべての物質はアーカーシャ (Akasha) という一つの原始的物質のあらわれである。そしてすべての勢力、万有引力だろうと牽引力だろうと斥力だろうと生命だろうと、すべてプラーナ (Prana) という一つの原始的勢力のあらわれである。プラーナはアーカーシャに働きかけて宇宙を創造<sup>1</sup>または建設しつつある。循環の始まりに当って、アーカーシャは動かず、顕現されていない。そのときプラーナが次第次第に活動を始め、アーカーシャから次第次第に粗大な形状を作り出す——植物、動物、人間、天体などなど。莫大な量の時間の後、この進化が停止して退化が始まる。あらゆるものが次第次第に微細な形状になってゆき、原始的なアーカーシャとプラーナに解体してしまったとき更に新しい循環が起ってくる。きてアーカーシャとプラーナを超越したあるものがある。両者はマハト (Mahat) ——宇宙意識——という第二の物に解体せしめられる。この宇宙意識はアーカーシャとプラーナを創造するのではない。自己を両者に変化させるのである。

<sup>1</sup> 英語の「創造」(creation) に当るものはサンスクリットでは正確には「建設」(projection) である。なぜかという、西洋で考えられているような創造<sup>1</sup>あるものが無から出てくることを信ずる宗派はインドには存在しないからだ。われわれが創造という意味は既に存在したものから建設することである。

われわれは今、意識と靈魂と神に関する信念をとりあげよう。一般に採用されているサンクヤ心理学に従えば、知覚においては——例えば、視覚の場合——まず第一に、視覚の道具、口がある。道具——目——の背後に視覚の機関すなわちインドリヤ (Indriya 根) ——視神経とその中枢——がある。これは外面的な道具ではないが、これがなければ目は見ることができない。まだこれ以上のものが知覚には必要だ。意識すなわちマナスが来てその機関に接着しなければならぬ。そしてこれに加うるに、感覚が知性すなわちブディ (Buddhi) ——意識の決定的反応の状態——に伝えられなければならない。反応がブディからくるとき、それとともに外部世界と利己主義<sup>エゴイズム</sup>が閃き出る。それからここに意思が出る。しかし、あらゆるものは完全ではない。あたかも、あらゆる絵画が光の継起的な衝撃から構成されて一つの全体をかたちづくるために固定したあるものの上に統一されなければならないように、意識内のあらゆる

る観念は固定したあるものの上に集められ、設計されなければならない。固定したとは意識及び身体に比較してであって、すなわち靈魂またはプルシャ (Purusha) またはアートマン (Atman) と呼ばれるものことである。

サンクヤ哲学に従えば、ブディすなわち知性とと呼ばれる意識の反応、状態はマハトすなわち宇宙意識の所産であり変化であり一定の顕現である。マハトは顛える思想に変えられる。それが一部分は機関に変えられ、一部分は物質の微粒子に変えられる。すべてこれらの結合から全宇宙が作り出される。更にマハトの背後にサンクヤ哲学はアヴィヤクタ (Avyakta) すなわち未顕現と呼ばれる一定の状態を考えている。そこには意識の顕現すら存在せず、ただその原因だけが存在する。それはプラクリティ (Prakriti 自然) とも呼ばれる。プラクリティを越えて、それとは永遠に区別されて、プルシャがある。サンクヤ哲学の魂であってなら属性を有せず、宇宙に遍在するものである。プルシャは作為者ではなく目撃者である。水晶のたとえばプルシャの説明に用いられる。プルシャはなんの色もない水晶のようだと言われる。その前に違った色が置かれると、その色に染められたように見える。しかし実際には色はついていないのだ。ヴェーダーンティストたちはサンクヤ流の魂と自然という観念を斥ける。二つの観念のあいだには橋渡しをしなければならぬ大きな深淵が横たわっていると彼らは非難する。一方においてサンクヤの体系は自然のところにやってくる。それから直ちに反対側に一足跳びして自然とは全然分離している魂のところへやってくる。サンクヤの言う、これらの違った色がどうして性質上色のない魂に働きかけることができるか。そこでヴェーダーンティストたちは、そもその最初から、この魂とこの自然とは一つであると主張する！。二元論派に属するヴェーダーンティストたちでも、アートマンまたは神がこの宇宙の作用因であるばかりでなく、質料因でもあることを許している。しかし彼らは実に多くの言葉でそう言っているだけである。実際にそういう意味はなかった。なぜなら彼らは次のような仕方、彼らの結論から逃れようと試みた。この宇宙には三つの存在があると彼らは言う。神と魂と自然である。自然と魂は、いわば神の身体であって、この意味では神と全宇宙とは一つであると言ってもよい。しかしこの自然とすべてこれらのいろいろ違った塊は一切の永遠を通じて互いに違つたままである。ただ循環の始まりに当ってハッキリ現れる。そして循環が終るとき、彼らは微細になり、微細な状態にとどまる。アドヴァイタ・ヴェーダーンティストたち——一元論者たち——は、こういう魂の理論を斥ける。そして『ウパニシャッド』のほとんど全巻を味方につけて全くその上に彼らの哲学を打ち

立てる。『ウパニシャッド』に含まれているすべての書物は、彼らの前には一つの題目、一つの仕事を有している。それは次のテーマを証明することである。「あたかも一塊の粘土の知識によって宇宙における一切の粘土の知識を有するように、われわれがそれを知れば宇宙におけるあらゆるものが知れるようなものは何か。」アドヴァイティストの観念は全宇宙を一つに概括すること——実際にこの宇宙の全体であるようなあるものに概括すること——である。そして、この全宇宙は一つである、それはすべてこれらの違った形式で自己を顕現する一つの存在であると彼らは説く。彼らはサンクヤが自然と呼ぶものが存在することを認める。しかし自然は神だと言う。この存在、サット (Sat 有) がすべてのもの——宇宙、人間、霊爽、その他ありとしあらゆるもの——に変身したのだ。意識とマハトは、この一つのサットの顕現にすぎない。しかし、それではこれが汎神論になる難点が生ずる。不変的であるようなサットがどうして出て来たか。(絶対的なものは不変的だから)それが変化的な滅亡可能なものに変ずることを許している以上、それがどうして出て来たか。アドヴァイティストたちはここで、彼らがヴィヴァルタ・ヴァーダ (Vivarta Vada) すなわち現象的顕現と呼ぶところの理論をもつ。二元論者やサンクヤ派に従えば、この宇宙の全体は原始的自然の進化である。アドヴァイティストのあるものや二元論者のあるものに従えば、この宇宙の全体は神から進化して出たものである。そして本来のアドヴァイティストたちやシャンカラチャーリヤ (Shankara-charya) の追隨者たちに従えば、全宇宙は神の現象的進化である。神はこの宇宙の質料因である。しかし実在的ではなく、ただ現象的のである。ここで用いられた有名な譬喩は繩と蛇のそれである。繩が蛇であるように見えたが、実は蛇ではなかった。繩が実際に蛇に変わったのではない。同様に、この全宇宙は、それが存在するがままにかの存在 (神) なのだ。それは変つてはいない。われわれがそこに見る一切の変化は、ただ現象的 (見えるだけ) である。これらの変化はデシャとカーラとニミッタ (Dasha空間、Kala時間、Nimita因果) によって引き起される。あるいは、一層高度の心理学的概括に従えば、ナーマとルーパ (Nāma名称、Rupa形式) によって引き起される。一つのものが他のものと相違するのは名称と形式による。名称と形式だけが相違を引き起す。実在としては、それらは同一である。また、一方に現象 (感性体) としてのあるものがあり、片方に理性体としてのあるものがあるのではない、とヴェーダーンティストたちは言う。繩はただ現象的に (見せかけだけ) 蛇に変化したにすぎない。妄想がやむとき、蛇は消え失せる。人が無知なときは現象を見て神を見ない。人が神を見るととき、この全宇宙は彼にとって全然消え失せる。無知または、いわゆるマ

「マヤーがこの現象一切の原因である——絶対者、不変者をばこの顕現された宇宙として受けとること。このマヤーは絶対的零でもなければ非存在でもない。それは存在でも非存在でもないものと定義される。それは存在ではない。なんとすれば、存在はただ絶対者、不変者についての言われるからである。この意味ではマヤーは非存在である。また、それは非存在だとも言われない。なんとすれば、いわばそれは決して現象を産出することができなかったからである。そこで、それは何でもないあるものである。そしてヴェーダーンタ哲学ではアニルヴァチャニヤ (Anirvachaniya) すなわち言明し難きものと呼ばれている。それでマヤーは、この宇宙の實在的原因である。マヤーはブラーフマン (梵) すなわち神が材料を与えるものに対して名称と形式を与える。すると、それがこのすべてに変形せしめられたように見える。そこでアドヴァイティストたちは、個人の魂に対する場所を有しない。個人の魂はマヤーによって創造されると彼らは言っている。實在としては彼らは存在することができない。もし、どこまでもただ一つの存在があったとすれば、どうして、私が一人、あなたが一人というぐあいにそれぞれあるということが有りうるのか。われわれはすべて一人である。そして悪の原因は二元性の知覚である。私がこの宇宙から分離していると感じ始めるや否や、初めて恐怖が生じ、それから不幸が生ずる。「人が他人を聞き、他人を見る場合、それは小さい。人が他人を見ず、他人を聞かない場合、それは最大である。それは神である。その最大の中に完全な幸福がある。小さいものの中には幸福はない。」

1 ヴェーダーンタ哲学とサンクヤ哲学は互いに反対する点は極めて少ない。ヴェーダーンタの神はサンクヤのブルシャから発展して来た。すべての体系がサンクヤの心理学を採用している。ヴェーダーンタもサンクヤも両方とも魂を信じている。ただサンクヤは多数の魂があることを信ずる。サンクヤに従えば、この宇宙はなら外部からの説明を必要としない。ヴェーダーンタはただ一つの魂があつて、それが多数のものとして現れると信じている。そしてわれわれはサンクヤの分析の上に建設をする。

さてアドヴァイタ哲学に従えば、この物質の分化、これらの現象は、いわば暫定的なもので、人間の實在的性質を隠蔽している。しかし人間の實在的性質は実は少しも変つてはいないのだ。最低の虫けらのなかにも最高の人間のなかと同様に、同じ神聖な性質が現在している。虫けらの形式は神性がマヤーのために、より多く曇らされている、より低い形式である。曇らされること一番少ないものが最高の形式である。あらゆるものの背後に同じ神聖が存在している。ここから道德の基礎が出てくる。他人を害するなかれ。あらゆるものを、あなた自身のように愛せよ。なぜなら、全宇宙は一つであるからだ。他人を害することによって、私は自分を害しつつあるのだ。他人を愛することによって、私は自分を愛しつつあるのだ。ここからまたアドヴァイタ道德の原理が出てくる。それは次の一言に要約されている

——曰く、自己放棄。アドヴァイティストはこのちっぽけな人格化された自己が一切の私の不幸の原因である——と言う。私をすべての他のものと相違せしめるところの、この個別化された自己が憎悪と嫉妬と不幸と苦悶と、その他すべての諸悪をもつてくる。そしてこの観念が脱却されてしまったとき、一切の苦悶が終止し、一切の不幸が消え失せるであろう。それで、これは放棄しなければならない。われわれは最低の生物のためにも常にわれわれの生命を投げ出す覚悟をしていなければならない。人間が小さい昆虫のために自分の生命を放棄する覚悟を固めているとき、その人はアドヴァイティストが得んと欲する完成の域に到達しているわけである。そして人がこのような覚悟を固めた瞬間、無知の面纱ヴェールが彼の目からすべり落ちる。そして彼は彼自身の本性を感得するであろう。この生においても、彼は自分で宇宙と一つであることを感ずるであろう。いわば暫しの間この現象的世界の全体が彼にとって消滅するであろう。そして彼は自己本来の面目を実現するであろう。しかしこの身体のカルマが残っているかぎり、彼は生きなければならないだろう。この状態はすなわち面纱ヴェールが消え失せてしまつて、しかもまだ一定期間身体が残存するとき、ヴェーダンティストたちがジヴァンムクティ (Jivanmukti)、生きている自由と呼ぶところのものである。もし人間がある時間、蜃気楼に欺かれていて、ある日その蜃気楼が消滅すると——もしそれが翌日またはある将来に再び戻つて来ても、彼は欺かれまいだろう。蜃気楼がまだ崩れなかった以前には、その人は実在と惑わしとを区別することができなかった。しかし一度崩れ去つた後では、彼は目と神経が働いているかぎり、その姿を見るであろうが、もはや欺かれはしないだろう。現実の世界と蜃気楼との微妙な区別を彼はつかまえたのだ。蜃気楼はもはや彼を欺くことはできない。そこでヴェーダンティストは彼自身の性質を実現したとき、全世界は彼にとって消え失せてしまつている。それは再び戻つてくるだろう。だがもはや同じ不幸の世界ではない。不幸の牢獄がサット、チット、アーナンダ (Sat, Chit, Ananda) ——絶対的存在、絶対的知恵、絶対的福祉——に変えられてしまふ。そしてこの境地の獲得がアドヴァイタ哲学の目標である。

(右の講演は一八九六年三月二十五日、ハーヴァード大学の大学院哲学会の席上でなされた。)

## 実在的人間と現象的人間

ここにわれわれは立っている。そしてわれわれの目は時おり数マイルも先を見る。人間は考えることを始めて以来そういうことをしてきた。人間はいつも前方に目をむけてずっと先を眺めつつある。肉体が崩れたあと、どこへ行くのか、彼は知りたがっている。種々の理論が提出され、説明をつけるために、あとからあとからいろいろな体系がもたらされた。あるものは否認され、あるものは採用された。かようにして、ここに人間がいるかぎり、人間がものを考えるかぎり、この事態は続くことだろう。これらの体系にはそれぞれある真理が含まれている。これらのすべてに真理でないものが相当含まれている。この点について、これまでインドにおいて行なわれた研究の分量と実質と結果を諸君の前に並べてみたいと思う。この問題に関してそれぞれの時代におけるインドの哲学者たちのあいだに現れた種々の思想を調和することを試みるであろう。私は心理学者たちと形而上学者たちを調和させることを試みるであろう。そしてできれば、それらを近代の科学的思想家たちとも調和させることを試みるであろう。

ヴェーダーンタ哲学の唯一の課題は一元性に対する探究である。ヒンズー族の精神は特殊なものを顧慮しない。それは常に一般者、否、普遍者に向っている。「それを知ることによってその他のあらゆるものが知れるようなものは何か。」これが唯一の課題である。「一塊の粘土の知識によって一切の粘土のそれが知れるのと同様に、それを知れば全宇宙それ自身が知れるようなものは何か。」これが唯一の探究である。この宇宙全体はインドの哲学者たちに従えば、彼らがアーカーシャ (Akasha) と呼ぶところの一つの質料に解消される。われわれが周囲に見るところのもの、手が触れ舌が味わうところのもの一切が単にこのアーカーシャの種々様々な顕現にほかならない。それは万物に滲透している微妙なものである。われわれが個体、液体または気体と呼ぶもの、数量、形状または物体と呼ぶもの、地球、太陽、月、そして星と呼ぶもの——あらゆるものがこのアーカーシャからできている。

このアーカーシャに働きかけて、それからこの宇宙を作りあげるものは、どんな力であろうか。アーカーシャと並んで普遍的な力が存在する。宇宙における力なるものは、勢力または牽引力として顕現し、いや思想としてすら顕現するが、これはインド人がプラーナと呼ぶところの唯一の力の種々異なった顕現にほかならない。このプラーナはアーカーシャに働きかけて、この宇宙全体を創造しつつある。循環の始まりに当って、このプラーナは、いわば、アーカーシャの無限の大海の中に眠っている。最初、それは静寂不動のまま存在した。それからプラーナの働きによってアーカーシャの大海に運動が起り、プ

ラーナが動き出し、振動し始めるにつれて、この大海から種々の天体が生じ、無数の太陽、月、星、地球、人類、動物、植物、そしてあらゆる種類の勢力や現象の顕現が出てくる。ここで、あらゆる力の顕現は、彼らに従えば、このプラーナである。あらゆる質料的顕形はアーカーシャである。この循環が終るだろうときは、われわれが個体と呼ぶところのものは、次の現式、次の一層微妙な、すなわち液体の形式に溶解するであろう。それが気体の形式にとけてゆくであろう。そしてそれがより微妙な、より斉一的な熱振動に移ってゆき、一切は原始アーカーシャに戻ってゆくであろう。そしてわれわれが今、牽引、反撥、運動と呼ぶものは、ゆるゆると分解して原始的なプラーナに戻ってゆく。それから、このプラーナは一定期間眠っていて、再び出現して、これら一切の形式を放出すると言われている。そしてこの期間が終ると、一切の事物が再び退却してゆく。かようにして、この創造の過程は下ってゆくかと思えば、また昇って来て、あるいは前方へ、あるいは後方へと振子のように振動している。近代科学の言葉でいえば、それはある時期には静的スタチクになってゆき、次の時期には動的ダイナミクになってゆく。ある時は、それが潜在的となり、次には、それが活動的となる。この交替変化は永遠を通じて進行をつづける。

けれども、この分析はただ部分的なものである。これだけのことは近代の自然科学にとっても知られている。それ以上のことになると、近代自然科学の探究の手は届き得ない。しかし研究は推理の歩みを停止しない。それがわかれば、他のあらゆるものがわかるようなあるものを、われわれはまだ発見していない。われわれは全宇宙を二つの要素、物質とエネルギーと呼ばれるもの、または古代のインド哲学者がアーカーシャとプラーナと呼んでいるものに分解した。次の段階は、このアーカーシャとプラーナを更にその根源に還元することである。両者は更に一層高い実有すなわち意識と呼ばれるものに還元せしめられる。この二つのものが産出されたのは意識、すなわちマハト、普遍的に存在する思惟力からである。思惟はアーカーシャやプラーナのどれよりも一層微妙な存在の顕現である。思惟がこれら二者に分裂したのだ。宇宙普遍的な思惟が最初に存在し、それが顕現し、変化し、この二者、アーカーシャとプラーナになって展開した。そしてこの二者の結合によって全宇宙が産出されたのだ。

われわれは次に心理学について話そう。私はあなたがたを視ている。外界の感覚が目を通じて私にもたらされている。それが神経を通じて脳髄に伝達せられる。目は視覚の器官ではない。口は外部の道具にすぎない。なぜなら、背後にあつて感覚を脳髄に伝達する真の器官が破壊されたなら、私がたとい二十の目をもつていても、私はあなたがたを見ることはできない。網膜の上の映像がどんなに完全であつ

ても、私にはあなたが見えないだろう。だから、器官はその道具とは別物である。だから、目という道具の背後にその器官がなければならぬ。このことは一切の感覚について言える。鼻は嗅覚の器官ではない。それは道具にすぎない。その背後に器官がある。われわれの有するあらゆる感覚についてまず身体における外部の道具がある。その背後に、同じ身体の中にその器官がある。だが、これだけでは十分でない。私があるがたに話しかけていて、熱心な注意をかたむけて私の話を聴いていられると仮定せよ。なにか事が起る、例えばベルが鳴るとせよ。たぶんあなたがたはベルの鳴るのが聞えないだろう。音響の振動は、あなたがたの耳に達して鼓膜を打っている。印象は神経によって脳髄に伝えられている。全過程が刺激を脳髄にはこぶに欠陥がないとすれば、なぜあなたがたはそれが聞えないのだろう。何か別のものが欠けているのだ。意識がその器官に密着していないのだ。意識が器官から外れているとき、器官が何かの報道をもたらしても意識はそれを受けとろうとはしない。意識がその器官に密着したとき、そのときに限って、その報道を受けとることが意識にとって可能になる。けれども、これもまだ十分ではない。道具が外界から感覚をもたらし、器官がそれを内面に伝え、意識がその器官に密着していても、まだその知覚は完全ではないだろう。もう一つの要因が必要である。内部における反応がなければならぬ。この反応とともに知識が生ずる。外面にあるものがいわば報道の流れを私の脳髄に送りこむ。私の意識がそれを取りあげて知性にわたす。知性はこれまで受けとった印象へそれを繰りいれて反応の流れを送り出す。この反応によって認識が生ずる。そのとき、ここに意思が働く。反応するところの意識の状態をブディ (Buddhi)、知性という。けれども、これでもまだ全部済んだわけではない。もう一步進める必要がある。ここにカメラがあつて、そこに布製のスクリーンがあると仮定せよ。そして私はスクリーンの上に映像を写そうと試みるということにする。私は何をしたらいいか。私は種々の光線を経由して導き、それをスクリーンの上に集中させることにする。そこに像を結びさせるにはじつとして動かないあるものが需要である。動いているものの上に像を結ばせることはできない。そのあるものは静止していなければならない。なぜなら、私がそこに投射しようとしている光線は動いている。この動いている光線はその静止しているある物の上に集められ、統一され、調整されて完成されなければならない。これはわれわれの器官がもろもろの感覚を内部に持ちこんで意識に提示し、それを意識が今度は知性に提示する作用とよく似たケースである。その背景に映像がいわば形成され、そこで一切の異なった印象を統一するための、ある永続的なものがあるのでなければ、この過程は完成し

ないであろう。われわれの存在の変転きわまりない全体に統一を与えるものは何か。刻々と運動しつつける事物の同一性を保持するものは何か。われわれの種種雑多な印象のすべてが一つにつき合わせられる土台は何か。知覚がいわば寄り集って定住し統一的全体を構成する土台は何か。われわれはこの役割を果たすために、あるものがなければならないことを発見した。そしてそのあるものは意識や身体に比して動かないものでなければならないことがわかる。カメラが映像を投げる布製スクリーンは光線に比して動かないものである。そうでなければ、そこに映像を結ばないであろう。それはつまり、認識者は個人でなければならぬということだ。意識がこれらすべての映像を描き出すこのあるもの、われわれの感覚が精神と知性によって運ばれてそこに置かれ集められ、統一体に構成せられるこのあるもの、は人間の魂と呼ばれる。

われわれは宇宙普遍的な意識がアーカーシャとプラーナとに分裂すると述べた。そして意識の背後に魂を発見した。宇宙には普遍的な意識の背後に実存する一つの魂がある。それが神と呼ばれている。個人においては、それは人間の魂である。ちょうど普遍一元的な意識がアーカーシャとプラーナになって展開するように、それと同様に、この宇宙、大千世界において、宇宙的な魂そのものが意識として展開していることが発見されよう。個々の人間にとっても実際そのとおりではあるまいか。彼の意識が彼の身体、彼の魂の創造者であり、彼の魂が彼の意識の創造者ではないだろうか。ということは、彼の身体、彼の意識、彼の魂は三つの異なった存在物であるのか、それとも、この三つは一つであるのか、すなわち同一の実体の三つの存在のしかたであるのか、ということになる。われわれはそのうち順次にこの問題に対する解答を見つけようと試みるであろう。われわれが今手に入れている第一歩はこうである。ここに外部的な身体がある。この外部的な身体、この背後に器官があり意識があり知性がある。そしてその背後に魂がある。第一歩としてわれわれが発見したことは、いわば、魂が身体と分離しているし、意識自身からも分離しているということである。この点で、宗教界における意見は分裂している。その起りはこうである。一般に二元論という名称で通っている宗教的見解によれば、この魂は種々の性質から成っており、喜びや快楽や苦痛の感じがすべて本当に魂に属しているとして魂を性質的に限定する。非二元論者は、魂がこのようないろいろの性質を有するということを否認する。魂を性質的に限定されないものだと言うのだ。

まず二元論者の説をとりあげてみよう。そして魂ならびにその運命について彼らの立場を諸君に紹介

することにしよう。そして最後に、非二元論がわれわれにもたらす調和を見出すことを試みようではないか。この人間の魂は意識とも身体とも区別されているし、アーカーシャとプラーナでできていないから、不滅でなければならない。何故？ 死滅とは何を意味するか。分解だ。構成された結果生じた事物にとつてのみ滅亡が可能である。二つまたは三つの成分からできているものは何でも分解されないわけにはゆかない。構成された結果でないものだけは決して分解することができない。従つて死のことができない。それは不滅である。それは永遠を通じて存在してきたのである。それは創造されたものではない。創造の一コマ一コマは単に構成である。創造が無から生ずるといふことは何人も見たことがない。われわれが創造について知っていることのすべては、既存の事物をより新しい形式で結合することである。そうだとすれば、この人間の魂は単純なものであつて、永久に存在してきたに相違ない。そして永久に存在しつづけるであろう。この身体が倒れるとき、魂は生きつづける。ヴェーダンティストたちに従えば、この身体が崩れるとき、人間の生命力はその意識に帰つてゆき、そして精神が崩壊していわばプラーナに帰り、そのプラーナが人間の魂に入つてゆく。そして彼らのいわゆる細身<sup>1</sup>、意識的身体または霊的身体など何とでも好きなように呼んでよろしいが、いわばそういうものにつつまれて人間の魂が出てくる。この身体には、その人間のサムスカラ<sup>2</sup>がある。サムスカラとは何か。この意識は湖水のようなものだ。そしてあらゆる思想はその湖水のうへの波である。あたかも湖水の波が起つてはよろけて消えるように、これらの思想の波も意識の質料のなかで絶えず起きあがり、それから消えてゆく。だが、永久に消え去るといふことはない。それは次第次第に微妙に繊細になつてゆく。しかしそれらはいつもそこにあつて次の時期に起ちあがるように呼び出されるのを待つて再び出発する用意をしている。記憶は、ただそういう微妙な存在状態に移つていった思想のあるものを波の状態のなかに呼び返すにすぎない。かようにして、われわれが考えたあらゆること、われわれがなしたあらゆる行動が意識のなかに定住せしめられる。すべて微妙な形状でそこにあり、人間が死ぬとき、これらの印象の総量が意識の中にある。意識はまた媒体としての細かい微妙な物質に働きかける。魂はいわばこれらの印象と細身につつまれて過ぎてゆく。そして魂の運命は異なつた印象で代表される一切の異なつた力の合成によつて導かれる。われわれの考えるところでは、魂にとつて三つの異なつた目的地がある。

1 細身 (Sukshma satria) われわれの普通の身体が粗身 (Shula sria) であるのに対して、その奥にあつて、これをささえる微妙な機能と考えられた。(訳者註)

2 サムスカラ (Samskara) 内面的傾向、『生きる秘訣』四六ページを見よ。(日本教文社刊)(訳者註)

非常に霊的な人々は死ぬと、太陽光線に従つて太陽界というところに到達する。そこを通過して月界

というところに到達する。そこを過ぎると、電光界と呼ばれるところに到達する。そこで彼らはすでに祝福された他の魂と出逢う。それが新来者を案内して一切の境界の最高なるものブラーマロカ (Brahmaloka)、ブラーマ界と呼ばれるところへつれてゆく。そこでこれらの魂は全知全能を得て、ほとんど神自身と同様に力強く一切智となる。彼らは、二元論者に従えば、そこに永久に定住するのであるが、非二元論者に従えば、この循環の終局に普遍者と一つになる。第二級の人物、すなわち利己的動機から善行をしたものは、彼らの善行の結果に導かれて、死ぬときは月界と呼ばれるところに運ばれる。そこには種々様々の天界があつて、そこで細身すなわち神々の身体を獲得する。彼らは神々となつて、そこに住み、永い期間、天の祝福を受ける、そしてその期間を終えると、古い業が再び彼らの上に働いてくる。そこで彼らは再び地上にあともどりする。空気と雲の圈を通過し、これらあらゆる境界を経て、しまいに雨のしずくによって大地に到達する。そこで地上に落ちて、ある穀物に付着する。それが新しい身体をこしらえる材料を供給するに適したある人間に偶然に食われるというわけである。

最後の階級すなわち悪人のそれは死ぬと幽霊とか悪魔とかになる。そして月界とこの大地とのあいだのどこか宙に棲息する。あるものは人類を攪乱しようと試みる。あるものは人類に友好的である。そこで暫く暮らしてから、今度は地上に落ちて来て動物となる。暫くの間、動物の身体で暮らしてから解放される。そして戻つて来て再び人間になる。かようにして救済をかせぎとる機会がもう一度与えられる。それで不浄分子が極めてわずかしか残っていないような、ほとんど完成に達した人々は太陽光線を通じてブラーマロカへ赴くということがわかる。天上に行きたいと考えて、この世で善行をなしたような中程度の人々は月界の諸天に赴き、そこで神々の身体を得る。しかし彼らは再び人間になつて、そこでもう一度完全になる機会をつかまねばならぬ。非常に悪い人々は幽霊や悪魔になる。それから動物にならなければならないかもしれない。そのあとで、再び人間になつて、もう一度自己を完成する機会が与えられる。この大地はカルマ・ブミ (Karma-Bhumi)、業界と呼ばれる。ここでのみ人間はその善業や悪業をする。人間は天国に行きたくてそのために善行をなすとき、神となる。そしてそのかぎり悪いカルマを積むということはない。まぎしく彼は地上でなした善行の結果を享受する。そしてこの善い業が尽きたとき彼が前世において生活中に積みかさねた一切の悪いカルマの合成力が彼の上に働きかかる、それが彼をこの地上に引きおろすのだ。同じ仕方では幽霊になつた連中はこの状態でとどまり、新しいカルマをひき起すことはないが、彼らの過去の悪業の悪果を受けて苦しむ、それが次の段階で、一定時間動物

の身体に宿り、新しいカルマを引き起すことなしにすごす。その期間が終ると、また再び人間になる。善業、悪業に応じた褒賞と処罰の状態は新しいカルマを生ずる力を欠いている。それはただ享樂するか苦悶するかだけである。もし特別に善いカルマとか特別に悪いカルマがあるとすれば、その果実はすみやかに実ってくる、例えば、もしある人が生涯悪いことばかりやっていて、たった一つ善い行為をしたとする、そうすると、その善行の結果はすぐ現れてくるだろう。しかしその結果が済んでしまうと、すべての悪行がその結果を引き出さずにはいない。ある善い偉大な行為をなした人々でありながら、生活の一般的調子が正確でないような人々はすべて神々になるであろう。一定時間神々の身体をして暮らし、神々の権力を享樂した後、再び人間に戻らなければならないだろう。善行の力がこうして終ったとき、古い悪行が働きを現してくるのだ。特別に悪い行為をした人間は幽霊や悪魔の身体をつけなければならぬ。これらの悪い行為の結果が尽きたとき、それらとつながって残っていた小さい善行が働いて彼らを再び人間にしてくれる。墮落とか後戻りとかがないブラーマロカへの道は、デヴァヤーナ (Devayāna) すなわち神への道と呼ばれる。天国への道はピトリヤーナ (Pitriyāna) すなわち父祖への道と呼ばれる。

だから人間は、ヴェーダーンタ哲学に従えば、宇宙における最も偉大なる存在である。そしてこの働きをするこの世界は、最善の場所である。なぜかといえば、ここでこそ人間が完全になるための最大最善の機会が存するからである。天使たちとか神々とか、何と呼んでもいいが、彼らはもし完全になりたいたと思えば、すべて人間にならなければならない。この人生——これこそ最も偉大なる中心であり、不思議な状態であり不思議な機縁である。

われわれは次にこの哲学の別の一面について語ろう。私がちょうど今述べてきた靈魂に関する理論の一切を否認する仏教徒たちがいる。「あるものをこの身体と意識の基体として背景として仮定するような、魂の必要があるのか」と仏教徒たちは言う。「なぜ思想の走るがままにさせてはならないのか。なぜ意識と身体からできているこの有機体の背後に第三の実体、魂というような第三の実体を認めなければならぬのか。何の必要があるのか。この有機体だけでは自らを説明するのに十分でないのか。なぜ、ことさら第三のあるものをとりあげるのか。」

これらの論証はなかなか有力なものである。この推理は非常に鋭い。外面的な探究に関するかぎり、この有機体は自らを十分に説明する。すくなくとも、われわれの多くは、そういう光で、それを見ていく。じゃあ、なぜ、基体としての魂、すなわち意識でも身体でもなくて、意識と身体的背景になっ

るようなあるものを必要とするのか。そこに意識と身体だけがあるとせよ。身体は絶えず変化する物質の流れに対する名称である。意識は絶えず変化する意識または思想の流れに対する名称である。何がこの二つのあいだにある見かけ上の統一を生ぜしめているか。この統一は実際には存在していない、と言うことにしよう。例えば、点火したたいまつを手にとつて、あなたがたのまえに急にぐるぐる振りまわすとせよ。あなたがたは火の輪を見る。その輪は実際には存在しない。しかし、たいまつは絶えず動いているから、一つの輪の外観を与えるのだ。そこで、その生命に統一はない。それは絶えず崩壊しつつある物質のかたまりである。この物質の全体を一つの統一と呼んでもいい。しかし、それだけにすぎない。意識についても同様である。あらゆる思想は他の思想とは別物である。統一という幻覚の背後に残るものは突進する流れにすぎない。第三の実体の必要はない。身体と意識という一般的現象は実際にあるものである。その背後にあるものを置かなくていい。この仏教徒の考え方が近代におけるある宗教や学派によつて採用されていることをあなたがたは発見するであろう。そして彼らはみなそれを新説だ、自分らの発明だと宣言している。すなわち、この世界がそれ自身で充足的なものであり、それになんらの背景をも考える必要がない、すべて存在するものはこの感覺的宇宙である、なんのためにこの宇宙の支えとしてのあるものを考える必要があるのかというこの見解が多くくの仏教哲学の中心觀念になつてゐる。あらゆるものはいろいろの性質の集合体である。それらの従属すべき仮説的実体が何故なければならぬのか。実体の觀念は諸性質の迅速な交替変化から来ている。それらの背後に存在する変化するものから来ているのではない。これらの論証のあるものがどんなに素晴らしいものであるかがわかる。そして彼らは容易に、人間の日常経験に訴える。——実に、現象以外の何かを考えることができるものは百万人のなかで一人もないくらいだ。最大多数の人々にとっては、自然はただ変転し渦巻き、結合し、混同しつつある変化のかたまりとしか見えない。われわれのうちでその背後にある静かな海を瞥見したものは、極めて少ないのだ。それは常に波のなかに叩きこまれている。この宇宙はわれわれにとつてただ湧きたつ波浪の山として現れる。そんなふうには、われわれは、これら二つの意見を発見する。一つは、身体と意識という二つのものの背後にあるものがある、それは変化しない動かない実体だといふ見解である。もう一つは、宇宙には不変不動といったようなものはない、それは一切変化であつて変化でない何物も存在しないといふ見解である。この相違の解決は次の段階の思想すなわち非二元論のそれに待つ。

二元論者たちが万有の背後に変化しない背景としてのあるものを見出したことは正しいとそれは説明する。われわれはある変化しないものがなければ変化を考えることはできない。変化しにくいあるものを知ることによってのみ変化する何かを考えることができる。その変化しにくいものも、他の一層変化しにくいものに比較すれば、より変化的なものに見えてこないわけにはゆかない。こうしてゆくと、しまいには、全然変化しないあるものがなければならぬということ許さざるを得なくなる。この顕現の全体は非顕現の状態にあつたのでなければならぬ。それは静かに沈黙したもので、なんの力も働かなかつたとき、いわば、相当する力の平均状態にあつた。なぜなら力は平均の攪乱が起つたときに働くからである、この宇宙は、その平均状態に復帰するために急いでいる。もしわれわれが何かの事実を確かめたとすれば、この事実こそ確かである。もし二元論者たちが変化しないあるものがあると主張するならば、彼らはまったく正しい。しかし身体でも意識でもなくてその底に横たわるあるもの、両者から切り離されたあるものであるという彼らの分析は誤っている。仏教徒たちが全宇宙は変化のかたまりだと言いかぎり、彼らはまったく正しい。私が宇宙から切り離されているかぎり、私が一步退いて私の前にあるものを眺めるかぎり、そこに二つの物があるかぎり——眺める人と眺められる物——常に宇宙は、始終絶えず変転する変化の宇宙であるように見えるであろう。しかし実相をいえば、この宇宙には変化と不変と両方がある。靈魂と意識と身体が三つの分離した存在物だというわけではない。これら三つのものからできている有機体は実際は一つだからである。それは身体として、意識として、そしてまた意識及び身体の背後のものとして現れるところの同一物である。しかし同時にそれらすべてであるわけでない。身体を見ているものは意識を見てはいない。意識を見ているものは魂というものを見ていない。そして魂を見ているものには身体と意識は消え失せている。運動だけを見ているものは絶対の安静を見ていない。そして絶対の安静を見ているものには運動は消え失せている。一本の縄が蛇と間違えられる。なわを蛇と見ているものには、なわは消え失せている。そして間違いがわかって、なわを直視したとき、蛇は消え失せている。

そこで、ただ一つの一切を包括する存在があつて、その一つが多くの姿で現れるのだ。この自我または魂または実体は宇宙に存在するすべてである。その自我または実体または魂は、非二元論の用語でいえば、ブラーフマン（梵）である。名称と形式の介入によつて多数のものとして現れるのだ。海の波を看よ。一つの波は実際に海と違ったものではない。だが、何が波を見かけ上違ったものとしているのか。

名称と形式だ。波の形式と、われわれがそれに付与した「波」という名称だ。これがそれを海と違ったものになっているのだ。名称と形式がなくなったとき、やはり同じ海である。誰か波と海とのあいだに何か真実の差別をつけることができるか。そこで、この全宇宙はその唯一単位の存在であって、名称と形式がこれらの種々様々の区別のすべてを作りあげた。あたかも太陽が何百万という水球のうえに輝くとき、小さい粒の一つ一つに太陽の極めて完全な再現が見られるように、一つの魂、一つの自我、宇宙の唯一の存在が名称と形式を異にするこれら無数の小球のすべてに反射され、種々異なって現れる。しかし、ほんとうは、ただ一つのものである。「私」もなければ「あなた」もない。一切ただ一つである。それはすべて「私」であるか、すべて「あなた」である。この二重性、二つという観念は全然虚偽である。われわれが通常に知っているところの全宇宙はこの虚偽の知識の結果である。識別力が働いて、そこには二ではなく一しかないことを発見したとき、その人は自分がこの宇宙であることを発見する。

「今存在するがままの宇宙、不断の変化のかたまりこそ私である。一切の変化を越え、一切の性質を越え、永遠に完全なる、永遠に祝福されたものこそ私である。」

それゆえ、ただ一つのアートマン、一つの自我がある。永遠に純粹なる、永遠に完全なる、変化し得ない、変化しなかったものだ。それは決して変化しなかった。そして宇宙におけるこれら種々雑多な変化はすべて、その一つの自我における現象にすぎない。

そのうえに名称と形式がこれらすべての夢を描き出した。波を海と違って見えしめるものは形式である。波が静まったと仮定せよ。形式は残るだろうか。否、それは、消え失せるだろう。波の存在は海の存在に全然依存している。しかし海の存在は断じて波の存在に依存してはいない。波が残っているかぎりその形式も残っている。しかし波がなくなるや否や、それは消え失せる。残ることはできない。この名称と形式はマヤー（Maya）と呼ばれるものの所産である。個人というものを作りあげて各人各様に違つて現れさせているのがこのマヤーである。だが、それは存在をもたない。マヤーは存在するということはできない。形式は存在するということはできない。なんとすれば、それは他のものの存在に依存しているからである。すべてこういう差別を作っていることを見れば、それが存在しているということはできない。そこで、アドヴァイタ哲学に従えば、このマヤーもしくは無知——または名称と形式、またはヨーロッパで呼ばれているように「時間、空間、因果関係」——は、宇宙の多種多様性をわれわれに示すところの、この唯一無限の存在から出てきている。実体において、この宇宙は一つであ

る。誰かが二つの究極実在があると思うかぎり、その人は誤っている。ただ一つの実在しかないと知ったとき、彼は正しい。これは身体の方面でも、意識の方面でも、また魂の方面でも、毎日われわれに証明されつつある事柄である。あなたがたと私、太陽や月や星が同じ物質の大海における違った場所の違った名称にすぎず、この物質がその結構において絶えず変化しつつあるということは今日証明済みである。数カ月前太陽の中にあつたエネルギーの微粒子は今、人間の体内にあるかもしれない。明日それは動物のなかにあるかもしれないし、明後日それは植物のなかにあるかもしれない。それは常に行ったり来たりしている。それはすべて不滅不壊ふえで無限なる一つの物質集団であつて、ただ名称と形式によって差別されたものである。一つの点は太陽と呼ばれる。他のそれは月、更に他のそれは星、他のそれは人間、他のそれは動物、他のそれは植物と以下同様である。そしてすべてこれらの名称は仮構であつて実在性をもたない。なんとなれば、全体は絶えず変転するところの物質集団だからである。この同じ宇宙が別の立場からすれば思想の大海であつて、そのなかでわれわれの各自は個別的意識と呼ばれる一つの点である。あなたは一つの意識である。私は一つの意識である。あらゆる人がそれぞれ意識である、そして同じ宇宙は知恵の立場から眺めると、目から錯覚を拭い去つたとき、意識が純粹になりきつたとき、至上純粹なる不変にして不滅なる、金剛不壊の絶対的有として現れる。

それでは、あの二元論者の三界遍歴の終末論はどうなるか。すなわち人間は死ぬと天国へ行くとか、またあっちこっちの世界へ行くとか、そして、悪人は幽霊になって、それから動物になるなどというあれは？ 誰ひとり来るものもないし、行くものもないと非二元論者は言っている。あなたはどのように行つたり来たりできるか。あなたは無限である。あなたの行くべき場所はどこだ。

ある学校で、子供が集まって試験を受けていた。試験官は愚かにもあらゆる種類の難問を小さい子供に訊いていた。そのなかにこんな問題があつた。「なぜ地球は落ちないのだろう。」彼のつもりでは、これらの子供から引力の観念を引き出すか、または他の複雑な科学的真理を引き出そうとしていた。多くの子供は問題の意味を理解することができなかった。それであらゆる種類の間違つた返答をした。ところが一人の頭の好い少女は、別の質問でそれに答えた。「どこへ落ちたらいいでしょう。」これに対すると、そもそも試験官の出した問題が無意味なものだった。宇宙には上も下もない。その観念はただ相対的なものだ。それは魂に関しても同様である。その誕生及び死に関する問題は全く無意味なものである。誰が行くのだ、そして誰が来るのだ。どこにあなたは行かないのだ。あなたがすでに居らない天国は

いつたどこにあるのだ。人間の自我は遍在的である。それがどこへ行くべきなのか。それがどこへゆくべきでないのか。それはあらゆる場所に存在する。そこで生だとか死だとか、諸天や最高天だとか下界だとか、この子供らしい夢や幼稚な幻覚は完全な人間にとっては一切直ちに消え失せる。完全に近い人間にとっては、ブラーマロカに至るいくつかの光景を示された後になってそれが消え失せる。無知なものにとっては、それは続くのである。

世間がすべて天国へ行くとか死んだり生れたりすると信じているのは、どうしたわけか。私が一冊の本を勉強している。一ページずつ読まれてページがめくられてゆく。次のページが来て、すむとまためくられる。誰が変化するのだ。誰が来たり行ったりするのだ。私ではない。本だ。この全自然界は魂の前では一冊の本だ。一章一章と読まれて反きれてゆく。そしてそのときに光景が展開する。それは読まれて、めくられてゆく。新しい光景がやってくる。しかし魂は常に同じ——永遠である。変化しているのは自然であって、人間の魂ではない。魂は決して変化することはない。誕生と死は自然のなかにある。あなたのなかにはない。けれども無知な人々は欺かれている。ちょうど、太陽が動いていて、大地は動かないとわれわれが間違つて考えず、いるようなものだ。まったく同じわけで、われわれが死んでゆくので、自然は死なないと考えている。だが、これらはすべて幻覚である。野原が動いていて汽車が動かないように思うとき、それが錯覚であるのと全く同じことである。誕生と死という幻覚も実に寸分たがわず同じ仕方だといえる。人間は一定の意識のワクに嵌められると、この存在を太陽、月、星として眺める。同じ意識状態におかれている人々はすべて同じ事物を見る。あなたがたと私とのあいだには存在の水準を異にする無慮幾百万の生物がいるかもしれない。彼らは決してわれわれを見ないだろうし、われわれも彼らを見ることはない。われわれは自分らと同じ意識状態にあり、同じ水準にあるものだけを見る。いわば同じ振動の譜調にある楽器だけが共鳴するのだ。われわれが「人間振動」と呼ぶところの振動状態が万一変更せしめられたなら、もはやここに人々は見られないであろう。「人間宇宙」全体は消え失せ、そのかわりに違った光景がわれわれの前に現れるであろう。たぶん、神々と神宇宙か、または悪人にとっては悪魔、群と魔的世界が現れるであろう。しかし、すべて唯一の宇宙の違った眺めにすぎないであろう。それは人間の水準から見て大地、太陽、月、星、その他これに類する一切として見られるのが、この宇宙である。それがとりもなおさず邪悪の水準から見れば罰の場所として現れるのだ。この宇宙こそ、それを天国として見ることを欲する人々には天国として見られるのだ。玉座に坐し

たまう一人の神のところへ行き、そこで生涯、神をたたえつづけるということを夢みている人々は、死ぬときには彼らが心中に抱いてきたことを幻まぼろしに見るであろう。すなわち単にこの宇宙そのものがさながら翼の生えたあらゆる種類の天使たちが飛びまわり、一人の神が玉座の上に坐したまうところの広大な天国に変わるであろう。これらの天国は人間自身が作ったものの一切である。そこで二元論者が言う事柄は真実だが、しかし一切合財ただ彼自身が作ったものだ、とアドヴァイタ派（非二元論者）は言う。もろもろの境界や悪魔や神々や復活や輪廻はすべて神話である。その人間生活もやはり同様である。人間が犯す最大のあやまちは、この人生だけは真実だと思ふことである。彼らは、これ以外の事柄が神話だと呼ばれるとき、それを十分理解する。しかし、同じことを彼ら自身の立場について許容することは決してしたくないのだ。現れるままの一切の事物が単なる神話である。そして一切の虚偽のなかの最大の虚偽は、われわれが身体だということである。われわれは決して身体であつたこともなければ、決してそれになり得ないのだ。われわれが単に人間にすぎないということは最大の虚偽である。われわれは宇宙の神である。神を礼拝するということは、常にわれわれ自身の隠れた自我を礼拝するということであつた。あなたが自分に言いかけた最悪の虚言うそはあなたが罪人または悪人として生れてきたということである。他人の中に罪人を認める人間だけが罪人である。ここに赤ん坊がいると仮定せよ。そしてそこにあなたが黄金の入った鞆をテーブルの上に置いたと仮定せよ。一人の泥棒が入って来て、湯、の黄金を持ってゆくと仮定せよ。赤ん坊にとって、それはすべて同じことである。内心に泥棒がないから、外部にも泥棒はいない。罪人や悪漢にとつては、悪が外部に存在する。だが善人にとつてはそんなものは存在しない。そういうわけで悪い人々はこの宇宙を地獄と見る。そして部分的に善い人々はウてれを天国と見る。これに反して完全な人物はそれを神自身として描き出す。そのとき初めて面紗ツェールが目から落ちる。そしてその人間は純化され浄化されて自分の全視野が一変するのを発見する。数百万年も人間を悩ましつづけてきた悪夢がすべて消え失せる。自分を、あるいは人間として、あるいは神として、あるいは悪魔として考えていた人、自分が低い場所や高い場所に住んでいるとか天上または地上に住んでいるなどと考えていた人が、実は自分が遍在であること、一切の時間が自分の中にあるので自分が時間の中にいるのではないということ、一切の天界が自分の中にあるので、自分がどの天国にもいるのではないということ、そして人間がかつて礼拝した神々はすべて自分の中にあるので、それらの神々の一人の中に自分がいるのではないということを見出す。彼は神々と悪魔、人々と植物、動物、岩石の製作者

であった。そして人間の眞の性質こそ今や天国よりも高いもの、このわれわれの宇宙よりも完全なもの、無限の時間よりも無限なもの、遍在するエーテルよりも遍在的なものとして彼の目の前に展開する。これでやっと人間は恐怖なきものとなり、自由なものとなる。そのとき一切の妄想が停止、一切のみじめさが消え失せ、一切の恐怖に永久に終止符が打たれる。誕生がなくなり、それとともに死もなくなる。苦痛が飛び去り、それとともに快樂も飛び去る。大地が消え、それとともに天国も消える。身体が消え、それとともに意識も消える。その人間にとっては、いわば全宇宙が消え失せる。この探求し運動しつつある不断の力の争闘が永久に停止する。そして勢力と物質として、自然界の闘争として、自然それ自身として、天界と地上、植物と動物、人間と天使として自己を顕現しつつあったものがすべて、一つの不変不滅の無限なる実在に変形され、それを認識するところの人間はその実在と一つであることを発見する。

「さまざまの色の雲が空に現れて一瞬間そこにたゆとうて、やがて消えてゆくように」、この翼には、大地とか天国とか、月とか神々とか、快樂とか苦痛とかいう一切の幻影が現れてくる。だが、いつも変らぬ無限の青空を一つ残して過ぎてゆく。青空は決して変ることがない。変るのは雲である。われわれが不純であるとか、われわれが制限されているとか、バラバラだとか考えることは誤りである。実在的人間は唯一の存在單元である。

二つの問題がここで起ってくる。第一はこうだ。「これを実現することは可能であるか。そこまでは教理であり哲学である。しかし、それを実現することは可能であるか。」可能である。その妄想が永久に消滅した人々はまだこの世に生きている。このような実現の後、人々は直ちに死ぬであろうか。われわれの考えるほど急ではない。一つの心棒で合わされた二つの車輪はいっしょに走ってゆく。もし私がその車輪の一つをつかまえて斧でその心棒を二つに切断したなら、私がつかまえている車輪は停止する。しかし、もう一つの車輪には運動力の情性が残っている。そこで、頭てれは少々走ってから、倒れる。純粹完全なもの、魂は一つの車輪である。この身体と意識という外面的な幻影は働き、カルマという心棒で合わされた、もう一つの車輪である。知恵は二つのあいだの束縛を断ち切る斧である。そうすれば、魂という車輪は停止するであろう。それが来たり行ったりする、生きたり死んだりするなど考えることや、それが自然であつて欠乏や欲望をもっていると考えることを停止するであろう。それが完全であり欲望を脱却していることを発見するであろう。しかし、もう一つの車輪、身体と意識のそれには過去

の行為の運動量が残っているであろう。そこで過去の働きの運動量が尽きるまで、その運動量がい果たされるまでは暫時生きつづけるであろう。そのとき身体と意識が脱落して魂が自由になる。そうなれば、もはや天国へ行くとか、この世に戻つてくるとかいうことはない。ブラーマロカとか最高天国とかいうところへ行くなんてことすらありはしない。なぜなら、いったいどこから来て、どこへ行くのだ。この生涯にこの境地に達した人間、少なくとも一分間でもこの世の日常的幻影が一変して、実在の相がハッキリ露呈したのを見た人間は「自由に生きる人」と呼ばれる。これがヴェーダーンタ学徒の目標であつて、生きながら自由を得ることである。

私はかつて西インドで、インド洋岸の沙漠地方を旅行していた。幾日も幾日も沙漠を徒歩旅行するのが常だった。だが、私が驚いたことには毎日美しい湖水が見えたことだった。それらの湖水は樹木にとりかこまれ、水面に樹木の倒影が映つて、そこで顫えていた。「なんと素晴らしい絶景だろう、これを見んなは沙漠地方と呼んでいるのに」と私は自分にひとりごとを言った。ほとんど一カ月のあいだ私は、これらの素晴らしい湖水や樹木や草原を見ながら旅行した。ある日、私は非常に咽喉のどが乾いて水が飲みたくなった。そこで私はこれらの清浄な美しい湖水の一つに向つて歩き出した。そして私が近づいてゆくと、それが消え失せた。ハツとして気がついた。「これは蜃気楼だ、私が平生いつも読んできたことはこれだったな。」それと同時に、この一カ月毎日毎日蜃気楼を見ながら、それに気がつかなかつたという考えが浮かんだ。次の朝、私は更に旅行をつづけた。そこにまた湖水があつた。しかし同時にそれが蜃気楼であつてほんとうの湖水ではないという考えがきた。この宇宙についても同様である。われわれは、この世の蜃気楼のなかを毎日毎日、毎月毎月、毎年毎年旅行しつづけて、それが蜃気楼とは知らずにいる。ある日、それが消滅する。しかし再び戻つてくるだろう。身体は過去のカルマの力のもととどまらざるを得ない。そこで蜃気楼が戻つてくるだろう。この世は、われわれがカルマに束縛されているかぎり、われわれに戻つてくるだろう。男、女、動物、植物、われわれの係累や義務、すべてわれわれに戻つてくるだろう。しかし以前と同じ力をもつてではない。新しい知恵の影響下にあつてカルマの強さは打ち砕かれ、その毒素は失われるであろう。それは変形せしめられる。なぜなら、今われわれは知っているぞという観念、実在物と蜃気楼との鋭い区別が知られているぞという観念がそれに伴っているからだ。

そのとき、この世界は以前と同じ世界ではないだろう。とにかく、ここに一つの危険はある。われわれ

れは、どこの国でもこの哲学を採用してこういうことを言う連中を見ている。「私は一切の美德と悪徳を超越している。それで道徳上の法則には束縛されない。私の好きなことを何でもしてよい。」あなたがたは現在この国でも、「私は束縛されない。私は神自身だ。私に何でも好きなことをさせろ」と放言する沢山の愚者を発見するだろう。これは正しくない。魂があらゆる物理的、意識的または道徳的な法則を超越していることは、ほんとうだけれど。法則とともに束縛がある。法則を超越して自由がある。自由が魂の性質であり、その生得の権利であることも、ほんとうだ。魂の真実の自由は人間の見かけ上の自由という形式で物質の面紗ヴェールを透して輝き出る。あなたの生活の各瞬間に、あなたは自由だと感ずる。われわれは一瞬間といえども自由であると感じないでは、生きることも話すことも、いな呼吸することさえもできない。しかし同時に、ちよつと考えれば、われわれは機械みたいなもので自由ではないということが浮かんでくる。それでは何がほんとうか。この自由の観念は妄想なのか。ある派のものは自由の観念は妄想だと主張する。他の派のものは束縛の観念は妄想だと言う。どうしてこんなことになるか。人間は真実に自由であるよりほかはあり得ない。彼が束縛されてしまうのは、マーマーの世界、名称と形式のなかに這入りこんだときだ。自由意思とは命名の誤りである。意思は自由であることはできない。どうして自由であり得ようか。意思が存在に這入ってくるのは実在的人間が束縛されたときに限る。それ以前ではない。人間の意味は束縛されている。だが、意思の根底になっているものは永遠に自由である。そこでわれわれが地上における人生とか、天国における神の生活とか呼ぶところの、束縛の状態においても、われわれには神聖なる権利としてわれわれのものである自由の記憶が残っている。そこで意識的にか無意識的にか、われわれはすべてそれに向つて努力している。人間が自分の自由を獲得したとき、なにかの法則によつて、どうして束縛されることができよう。この宇宙におけるいかなる法則も彼を束縛することはできない。この宇宙それ自身が彼のものだからである。

彼は全宇宙である。彼が全宇宙であるのか、それとも彼にとって全然宇宙というものがないのか、どちらかだ。そうすれば、どうして彼は性だとか国だとかに関するすべてちっぽけな観念を有することができるか。私は男です、私は女です、私は子供ですなどと、どうして言うことができるのか。これらは虚言ウソではなからうか。彼はそんなことがウソだということを知っている。これこれは男の権利だ、これは女の権利だ、とどうして言うことができるのか。誰も権利を有してはいない。誰も分離して存在してはいない。男もなければ、女もない。霊、魂には性がなく永遠に純潔である。私が男だとか女だと

か言ったり、私がこの国に属するとかあの国に属するとか言ったりするのは一つの偽りである。全世界が私の国であり、全宇宙が私のものである。なぜなら、それで私自身をつつんで、私の身体としているからである。しかも、この世には進んでこれらの説を肯定しながら同時にわれわれが不潔と呼ぶべき事柄を遂行する連中がいるのを見ています。そこで、なぜそんなことをするのかと訊けば、彼らはそれは妄想だよ、間違ったことなどわれわれにはできないと口答えをするのだ。彼らを批判すべき標準は何であるか。その標準はこうである。

善といひ悪といひ二つながら靈魂の条件つきの表現だけでも、しかもなお悪は一番外側の外衣だが、善は実在的人間すなわち自我に一層近い衣服である。そして人間は悪の層を突破して抜けるのでなければ、善の層に達することができない。善と悪の二つの層を通過するのだから、自我に達することはできない。自我に徹した人に何がくつついて残るだろうか。小さいカルマ、過去生の運動量の一つのかけら、しかし、すべて善い運動量である悪の運動量は全く使い果たされて、過去の不純物がまったく焼けつくされるまでは、何人にとっても真理を見ることも実現することも不可能である。そんなわけで、自我に徹して真理を見た人間にくつついて残っているのは、過去の生活の善い印象、善い運動量である。彼が身体のなかに任んで絶えず働いているとしても、それはただ善事をするために働くのだ。彼の唇が動くのはただすべてのものに対する祝福を告げるためであり、彼の手が動くのはただ善き働きをなすためである。彼の意識はただ善い思想をいまくことができる。彼の存在は、どこへ行っても、一つの祝福となる。彼自身一つの生きた祝福である。このような人間はその存在によって最悪の人間をも聖者に変えるであろう。彼が何も語らなくても彼のいることが人類に対する祝福になるであろう。このような人々が何か悪をすることができようか。邪悪な行動をすることができようか。実現することと、単にその話をするのあいだに一つの極から他の極に至る一切の相違があるということ念頭に置かなければならない。愚人でも話すことはできる。鶉鷓でも話しはする。話すことは一つのことであり、実現することは別のことである。もろもろの哲学、もろもろの教理、もろもろの論証、もろもろの書物、もろもろの理論、もろもろの教会、もろもろの宗派、これらすべてのものは、各自の流儀において善である。しかしその実現となると、これらのものは崩れ落ちる。例えば地図は結構なものだ。だがあなたがその実際の土地を見てから、再びその地図を見たとき、なんと巨大な相違をあなたは発見するにせよ。そこで真理を実現した人々はその真理を理解するために論理の理窟づけや、その他の知性の

練磨など一切必要ではない。それは彼らにとっては彼らの生命中の生命であって、具体化されて、手で触れられる以上のものになっている。ヴェーダーンタ派の賢者が言っているようにそれは「あなたの手のなかの果実として」ある。あなたは立ちあがって、それはここにある、と言うこと、ができる。それで、真理を実現した人々は立ちあがって「ここに自我がある」と言うであろう。あなたは一年かかって彼らと議論してもいい。しかし彼らはあなたに微笑みかけるであろう。彼らはそれを子供の片言と思うだろう。子供に片言をしゃべりつづけさせるだろう。彼らは真理を実現して満ち足りている。あなたがある国を見物したことがある。そこへ他人がやってきてそんな国は決して存在しなかったと言ってあなたに議論を試みると仮定せよ。その入は際限なく議論をつづけるかもしれない。しかしあなたのその人に対する心の態度だけは、その人が精神病院行きだという見解をもつに相違ない。そのとおり実現の間は言うのだ。「この世界においてそのちっぽけな宗教に関する一切のお饒舌しやべりは片言にすぎない。実現は宗教の魂であり宗教の本質そのものである。」宗教は実現することができる。あなたは用意ができてるか。あなたはそれを欲しているか。あなたがそれを欲するなら、その実現を得るであろう。そのとき、あなたは真に宗教的になるだろう。あなたが実現に達しないかぎり、あなたと無神論者とのあいだにはなんの相違もない。無神論者は誠実である。だが宗教を信ずると口外しながら、それを実現しようと企てない人間は誠実ではない。

第二の問題は実現のあかつきに何が生ずるかを知ることだ。われわれが宇宙の唯一性を実現しわれわれがその唯一無限の存在であると仮定せよ。そしてこの自我が唯一の実在であり、これらすべての種々様々の現象的形式で顕現しつつある同一の自我であるということを実現したと仮定せよ。いったいそのあとでわれわれはどうなるのか。われわれは不活発になり、片隅の方へ行って、そこで死んでゆくのか。「それは世の中に何か善いことをするだろうか。」あの古い質問だ！ 第一に、なぜそれが世の中に善いことをしなければならぬのか。そうしなければならぬという何か理由があるか。「それが世の中に何か善いことをするだろうか」というような質問をする権利を誰がもっているだろう。いったい、それはどういう意味だ。赤ん坊はキャンデーが好きだ。あなたがある電気問題と関連した研究をしていると、赤ん坊があなたに訊いたと仮定せよ。「それでキャンデーを買ってくれるの。」「いいえ。」と、あなたが答える。「じゃ、それなんの役にたつの」と、赤ん坊が言う。

同様に人々は立ちあがって言うのだ。「それは世の中になんの役にたつのだ。それはわれわれに金を儲

けさせてくれるかね。」「いいえ。」「じゃあ、そこに、なんの善いことがあるんだ。」

これが世の中に善いことをするという意味である。でも宗教的実現は世界に一切の善をする人々はその境地に達したとき、そこに唯一者があると体得したとき、愛の源泉が乾あがってしまったて人生のあらゆる事柄が崩れてしまいいはしないか、いわば現世でも来世でも、あらゆる愛というものが消え失せてしまいいはしないかと恐れている。世人といえども自分自身の個人のことにも少しも顧慮を払わない人々がこの世界における最大の働き手であったという考えを止めたわけではない。それで愛の対象が低いちっぽけな穢土えんどのものでないことを発見したときこそ愛するのだ。その人は彼の愛の対象が一塊の土ではないということ、それが正真正銘の神自身であることを発見したときこそ愛するのだ。妻はその夫が神自身であると思うとき、それだけより多く夫を愛するであろう。夫は妻が神自身であることを知るとき、それだけより多く妻を愛するであろう。母親は子供たちが神自身であると思うとき、より多く子供たちを愛するであろう。最大の敵こそ神自身であると知った人間はその敵を愛するであろう。聖僧が神自身であると知った人間は、その聖僧を愛するであろう。そしてその人間は、最も神聖でない汚れた人々をもまた愛するであろう。なんとすれば最も神聖でない汚れた人々の背景も主たる神であることを知っているからだ。こういう人間は世界の母親となる。彼のちっぽけな自我が死に果てて、神がそのかわりになっているのだ。全宇宙はその人にとっては変化してしまっている。苦痛に満ちた惨めな事柄は一切消え失せるであろう。闘争は一切休止してしまいうだろう。毎日毎日一片のパンのために闘争し、たたかい、競争するところの牢獄であるかわりに、この宇宙はそのときわれわれにとって運動場になるであろう。そのときこの宇宙は美しいものになるではないか。そういう人こそ立ちあがって、こう言う権利がある。「この世界はなんと美しいことか！」そういう人だけが一切は善だと言う権利をもっている。これこそ世の中にとつても、かかる実現に基づくところの偉大なる善であろう。

一切の衝突不和をもつて進行するこの世界のかわりに、もし一切の人類が今日あの偉大なる真理のかけらだけでも実現したなら、全世界の面目は一新されるであろう。闘争と喧嘩にかわって平和の支配があるであろう。他人より一步先へ出ようとわれわれを駆りたてている不法な野獸的な焦燥は、そのとき世の中から消え失せるであろう。それと同時に一切の闘争が消え失せ、一切の憎悪が消え失せ、一切の嫉妬が消え失せ、そして一切の悪が永久に消え失せるだろう。そのとき神がこの地上に住みたまうであろう。そのとき、この大地が天国となるであろう。神々が神々とともに遊び、神々が神々とともに

働き、神々が神々を愛するとき、なんの悪というものがあり得ようぞ。これが神聖なる実現の偉大なる御利益である。あなたが社会で見ているあらゆる物事がそのとき一新され変形するであろう。あなたはもはや人間を邪悪とは思わないだろう。それが第一の大きい儲け物だ。あなたは貧乏な男女が何かあやまちをしたとき嘲笑の一瞥を投げつけるようなことは、もはやしないでだろう。淑女たちよ、夜、街頭に媚を売る貧乏な婦人に対して軽蔑をこめて見下すようなことは、もはやしないでだろう。なぜなら、あなたがたはそこにも神自身を見るだろうからである。もはやあなたがたは嫉妬や刑罰を考えないであろう。それらはすべて消え失せるだろう。そして愛——人類を正しく導いてゆくには、笞や縄など必要がなくなるほど、かの偉大なる愛の理想が力強いものになるであろう。

もし、この世界に住んでいる男女の百万分の一でも単純に突き坐って数分間次のように言ったならば世界は半時間のうちに一新されるだろう。

「あなたがたはすべて神です。おお、あなたがた人々よ、おお、あなたがた動物たちよ、そして、生きとし生けるものよ、あなたがたはみんなただ一人の生きていらっしやる神様の御化身でいらっしやいます。」

恐るべき憎悪の爆弾を到るところに投下するかわりに、嫉妬と悪意の流れを注ぎこむかわりに、あらゆる国々で人々は一切が彼（神）であると考えようになるだろう。彼（神）はあなたが見るところの、感ずるところの一切である。あなたの中に悪がないのに、どうして悪を見ることができよう。あなたの心の奥に坐っている泥棒がいなしければ、どうして泥棒を見ることができよう。あなた自身が人殺しでないとすれば、どうして人殺しを見ることができよう。善くあれ、そうすればあなたにとって悪は消え失せるだろう。全宇宙はかようにして変革せしめられる。これが社会にとって最大の利益である。これが人類有機体にとって大きな利益である。これらの思想は古代インドで多くの人物のあいだで考えぬかれ、吟味しつくされたものであった。祖師たちの秘密主義や外国の征服などいろいろの理由によって、これらの思想は普及することが許されなかった。けれども、これらは壮大な真理である。それらが働きをあらわしたところでは人間は神聖なものとなった。私の全生涯はこれらの神聖な人々の一人に触れたがために変革せしめられた。その人については次の日曜日にあなたがたにお話することにしよう。これらの思想が全世界にひろげられる時が来つつある。修道院に住むかわりに、学者だけが研究する哲学書類に閉じこめられるかわりに、宗派や少数の学者の専有物になるかわりに、全世界にふりまかれるであ

ろう。そのために聖者と罪人、男と女と子供、学者と無学者の共有財産になるように全世界にふりまかれるであろう。そうすれば世界の雰囲気に滲透するであろう。われわれの呼吸する空気そのものがその一つ一つの脈搏とともに「汝はそれだ」と言うであろう。幾千万の太陽や月をかかえた全宇宙はものを言うあらゆるものの口を通じて異口同音に「汝はそれだ」と言うであろう。

1 「汝はそれだ」、「Thou art That」チハーンドギヤ・ウパニシヤッド』(Chandogya Upanishad VI)に見えてゐるあの有名な言葉『Tat tvam asi』の訳である。『プリハトアーラヌヤカ・ウパニシヤッド』(Bṛhadāyaka Upanishad I)にある『Aham Brahma asmi』「われは梵である」とともに二つの大格言 (maha vākya) として数千年間インドの思想界を支配し、その哲学体系を端的に表現してきた。(訳者註)

私はヴェーダーンタ哲学の実践的立場について何か話すように頼まれている。私はあなたがたに申しあげたように、実際、理論は非常に立派である。しかし、どうしてこれを実践に移すべきか。もし絶対に実践不能なものだとすれば、理論など知性の練磨としてよりほかなんの価値もないことになる。それゆえ、ヴェーダーンタは一つの宗教として強度に実践的でなければならぬ。われわれの生活のあらゆる部分で、これを完遂できるのでなければならぬ。それだけではない。一つもの話になっている宗教と世間の生活との相違も解消しなければならぬ。ヴェーダーンタは唯一不二——徹頭徹尾一つの生活——を教えている。宗教の理想は生活の全野を掩わなければならない。すべてのわれわれの思想に這入りこんで、次第次第に実践に移ってゆかなければならない。私は話が進むにつれて次第次第に実践的方面に入ってゆくであろう。しかし、この一連の講演は基礎を明らかにすることを意図したもので、まず理論ととりくまなければならない。森林の洞穴から忙しい街道や都会へ向って、どうして作り出されたかを理解しなければならぬ。われわれに気がつく特異な様相は、これらの思想の多くが森林への隠遁からの産物ではなく、われわれが多忙極まる生活を指導するように期待するところの人物、統治する君主たちから出ていることである。

シュヴェータケートゥ (Shvetaketu) はアールニ (Ārūni) という賢者、たぶん隠者だったようだが、の息子であった。森で育てられたが、パンチャラス (Panchālas) の市へ赴いて、プラヴァーハナ・ジャイヴァリ (Pravāha Jaivali) という王の宮廷に現れた。王は彼に尋ねた。

「どうして生物は死んでこの世を去るか知っているか。」

「知りません。」

「どうして彼らはこの世に戻ってくるか知っているか。」

「知りません。」

「祖先たちの道や神々の道を知っているか。」

「知りません。」

それから王は他の質問を發した。

シュヴェータケートゥは返答することができなかった。そこで王は、お前は何も知らないね、と言った。その少年は父親のところへ帰って行った。すると父親は自分もそれらの質問は返答できないという

ことを認めた。少年に教えることが厭だったからではない。これらの事柄を知らなかったからだ。そこで父親は王のところへ行つて、これらの秘密を教えてくださいと願った。王は、これらの事柄は、これまで王者たちのあいだだけに知られていたもので、僧侶は決して一てれを知っていない、と言った。とにかく王は隠者が知りたいと望むことを教えつづけた。『ウパニシャッド』のあちらこちらで、われわれは、このヴェーダーンタ哲学がただ森の中の瞑想だけの産物ではないということ、その最も優れた部分は、人生の毎日の事件に没頭して多忙を極めている頭脳によって考えぬかれ、表白されたものということを発見する。われわれは、数百万の人民を支配する絶対的君主ほど多忙な人間を考えることはできない。しかもこれら支配者のあるものは深遠な思想家であった。

あらゆる点からして、この哲学が極めて実践的なものでなければならぬことがわかってくる。後になって、われわれが『バガヴァド・ギーター』について話すときに、——あなたがたの多くの方はたぶんもうお読みになっただろうが——それはわれわれがヴェーダーンタ哲学について有する最良の註解であるが——奇妙なことにはその光景が戦場に置かれていて、クリシュナがそこでアルジュナにこの哲学を教えることになっている。『ギーター』の各ページに輝かしく光り出ている教説は強力な活動性であり、しかもそのただなかの永遠の静けさである。これが働きの秘密である。これを得ることがヴェーダーンタの目標である。われわれが受動という意味に解している非活動は断じてその目標であることにはできない。もしそんなことが目標としたら、われわれのまわりの壁が一番知的だということになる。これらは非活動的だ。土のかたまり、木の株が世界の最大の賢者ということになる。これらは非活動的だ。非活動性は情熱と結びついても活動性にはならない。ヴェーダーンタの目標である真実の活動性は永遠の静けさと結びついている。乱すことのできない静けさ、何が起つても決してゆさぶられることのない心の平衡、と結びついている。そしてわれわれの人生経験からして、これが働きに対する最善の態度であることをみんな知っている。

われわれが働きに対して普通に感ずる情熱を、もし有していないとすれば、どうして働くことができるか、そういつてたびたび尋ねられたことがある。数年前には私もやはりそう思っていた。しかしだんだん年をとって経験をつむにつれて、それがほんとうでないということを発見した。情熱が少なければ少ないほど、それだけよい働きをする。われわれは静かであればあるほど、それだけ善く、それだけ多くの働きをすることができる。われわれの感情を逸走させたとき、われわれはそれだけエネルギーを消

耗し、われわれの神経を傷め、われわれの心をかきみだして、極めてわずかの働きしかできない。働きとして出てゆくはずのエネルギーがなんの役にもたない感じとして消費されるのだ。そのエネルギーの全量が善い働きをするために消費されるのは、精神が極めて冷静で集中しているときに限っている。そしてもしこの世が生んだ偉大なる働きの主かの伝記を読むならば、彼が驚くべきほど冷静な人間であったことを発見するであろう。いわば何ものも彼らの平衡を失わせることはできなかつたのだ。これこそ、怒った人間は決して大きな分量の働きをしないが、何ものも怒らすことができない人間は、それだけ多くをなしとげるといふ理由である。怒りや憎悪その他の情熱に負ける人間は働きをすることはできない。そういう人間はただ自分をめちやめちやに破壊して実践的なことは何一つできない。働きの最大量をなすのは、冷静で、人を赦し、むらのない、よく平均のとれた精神である。

ヴェーダーンタは理想を説く。理想というものはご承知のごとく、いつも現実的なもの、実際的なものと呼んでもいいが、より遙か前の方にあるものだ。人間の性質には二つの傾向がある。一つは理想を生活と調和させることであり、もう一つは、生活を理想にまで高めることである。これを理解することは大したことである。前者の傾向がわれわれの生活の誘惑になるからだ。私は一定の段階の働きだけをすることができると思う。その大多数は恐らく悪いことだ。その大多数は恐らくその背後に情熱という動力が作用している。怒りとか貪欲とか、利己心とかだ。さて誰かがやって来て私にある理想を説教し、それに向う第一歩は利己心を棄てること、自己享樂を棄てることだというなら、私はそれは非実践的だと思う。しかし、ある人間が私の利己心と妥協できる理想をもってくれば、私はただちに喜んでそれに跳びつく。それは私にとって理想である。正統（オーソドックス orthodox）という言葉が種々の形式で扱われてきたように、「実践的」(practical) という言葉も同様である。「私の信仰は正統で、あなたの信仰は異端だ。」実践性についても同様である。私が実践的だと考えることが私にとって世界における唯一の実践性である。もし私が商人であれば、商店を守ることが世界で唯一の実践的な仕事だと思う。もし私が泥棒であれば、実践的である唯一の最良手段は盗むことで、そのほかは実践的でないと思う。この実践的という言葉がわれわれの好む事柄、できる事柄について勝手にみなが使用することがわかつたわけだ。だから、私はヴェーダーンタが強度に実践的だけれども、それは常に理想という意味において実践的だということを理解してもらいたい。高いことはどんなに高くても、それは不可能な理想を説教しはしない。しかも一つの理想として十分に高いものである。一言にしていえば、この理想はあなたが

だが神聖であるということだ。「汝はそれだ」、これがヴェーダーンタの本質である。その一切の分派や知的練習にかかわらず、あなたがたは人間の靈魂が純粹で全知であることを知っている。誕生と死などという迷信が魂と関連して語られるとき全然無意味だということがわかる。魂はいまだかつて生れたことはないし、決して死ぬこともないだろう。われわれはどうせ死ぬ、死ぬのは恐ろしい、などという観念はすべて単なる迷信にすぎない。われわれがこれをする事ができるがそれをする事はできないなどという観念は、すべて迷信である。われわれは何事でもすることが出来る。ヴェーダーンタは人々に対してまず自分自身に信念をもつように教える。世界のある種の宗教は自分以外の外界の人格神を信じていない人間は無神論者だと言っている。ヴェーダーンタは、自分自身を信じない人間は無神論者だと言うのだ。われわれ自身の魂の光栄を信じないことはヴェーダーンタでは無神論と呼んでいる。多くの人々にとって、これは疑いもなく恐ろしい観念である。われわれの大多数は、この理想はとうてい到達し得ないものだと考えている。しかしヴェーダーンタは、これが誰にでも実現されうると主張している。男もなければ、女もないし、子供もない。人種や性の差別もない。この理想の実現の邪魔になるようなものは何ものもない。なぜならヴェーダーンタはそれがすでに実現されていること、すでにそこにあるということを示しているからである。

宇宙における一切の力は、すでにわれわれのものである。われわれの目を手でおおうて暗いといって泣き叫んでいるのは、われわれなんだ。われわれのまわりに闇などというものは存在しないということを知れ。手を目から放せ。そうすればそこに最初からあった光がそこにある。闇が存在したことはなかった。弱さなど存在したことはなかった。愚者であるわれわれは自分が弱いと叫んでいるのだ。愚者であるわれわれは自分が不純だと叫んでいるのだ。かまうにしてヴェーダーンタは理想が実践的だと主張するだけでなく、いつも実践的であることに変わりないというのだ。そしてこの理想、この実在はわれわれ自身の性質である。あなたがたが眺めているあらゆる他のものは、すべていつわりであってほんとうではない。あなたがたが「私はちっぽけな、どうせ死の運命のものだ」と言うや否や、ほんとうでないことを口走っているのだ。自分自身にウソをつきつつあるのだ。自分自身に催眠術をかけて下劣な、弱々しい、みじめなあるものにしつつあるのだ。

ヴェーダーンタは罪を認めない。過誤を認めるだけだ。最大の過誤は自分は弱いか、自分は罪人だ、みじめな動物だとか、また自分には力がない、これやそれやをすることができないなどと称することで

あるとヴェーダーンタは言う。そんなふうに考えるときは、いつでも、いわばあなたを縛っている鎖に  
もう一つ鎖の輪を加えることになる。あなた自身の魂にもうひとかわ催眠術を重ねることになる。だか  
ら、誰でも自分が弱いと考えることは間違っている。誰でも自分が不潔だと考えることは間違っていて、  
世界に悪い思想を吹きこんでいることになる。ヴェーダーンタでは、現在の生活——催眠術にかけられ  
た生活、われわれが仮想しているこの虚偽の生活——と理想とを妥協させる企てはないということ、こ  
れだけは常に念頭におかなければならない。この虚偽の生活をやめねばならぬ。そして常に存在してい  
る實在の生活が自己を顕現し、輝き出なければならぬ。どんな人でも次第次第に純潔になるのではな  
い。それは顕現がより大きくなるということである。面纱ヴェールが外れ落ちて、魂の自然の純潔が姿をあらわ  
し始める。あらゆるものが既にわれわれのものである——無限の純粋性、自由、愛、そして力が。

これが森林や洞穴の奥で実現されうるとは限らず、人生のありとあらゆる境遇にある人々によって実  
現しうる、ともヴェーダーンタは言う。これらの真理を発見した人々が洞穴や森林に住んでいたのでは  
なければ、この世の通常の職業に従事していたのでもなく、われわれがあらゆる点から信じてよい理由  
があるとおり、最も多忙な生活を送った人々、軍隊の指揮をとり玉座にすわり、何百万人の福祉を考慮  
しなければならなかった人々であった。そしてこれは絶対君主制時代の君主たちであった。王様が大局  
からみて飾り物であった時代の君主たちによったものではなかった。けれども彼らはこれらの思想を考  
え出し、これを実現し、これを人類に教えるだけの時間を見出すことができた。彼らの生活にくらべる  
と閑暇の生活を有するわれわれにとって、どれだけ多く実践的でなければならぬか。われわれがそれ  
らを実現し得ないということは、われわれがいつも比較的自由であって、しかもなすべきことが甚だ少  
ないという点から見て、われわれにとって一つの恥である。私の要るものは古代の絶対君主に比較する  
と無に等しい。私の必需品は、大軍を率いて、クルクシエトラの戦場にあったアルジュナの必需品にく  
らべると、無に等しい。けれども戦鬪の喧しい騒音の真最中、最高の哲学を説き、それを自分の生活に  
繰り入れる時間を見出すこともできたのだ。たしかにわれわれは、この比較的自由で簡易で安楽なわれ  
われの生活では、それくらいのことでは済むはずである。ここに在るわれわれの大多数は、もしわれわ  
れがほんとうに善のために使用したいならば、自分も持っていると思っっている以上の時間をもっている  
ものだ。われわれのもっている自由の分量で、もしわれわれが欲するならばこの一生に二百の理想に達  
することができる。しかし理想を現実はまだ引きさげてはならない。もっともおおへつらいに類する事柄

の一つが、われわれの過失の言いわけをしてくれ、すべてわれわれの愚かしい要求や愚かしい欲望に対して特別な許しを受けるしかたを教えてください。人物たちの姿を借りて現れる。そしてわれわれは彼らの理想こそわれわれが有する必要がある唯一の理想だと思ふことになる。しかし、そうではないのだ。ヴェーダーンタは、そんなことを教えはしない。現実が理想に調和せしめらるべきである。現在の生活が永遠の生活に合致せしめらるべきである。

なぜなら、あなたはヴェーダーンタの中心理想が唯一性だということを常に思い出さなければならぬ。何ものにも二ということはない。二つの生活ということはない。二つの世界のための二つの違った様式の生活などもないのだ。あなたは最初に、ヴェーダがもろもろの天界とかそのようなことについて語っているのを発見するだろう。しかし後になって、それらの哲学の最高の理想という個所にくると、これらの事柄の一切を抹消してしまった。唯一の生活、一つの世界、一つの実在があるにすぎない。あらゆるものは、かの「一」である。その差異は程度のそれであつて種類のそれではない。われわれの生活のあいだの差異は種類のそれではない。動物は人間と別物だ、彼らはわれわれの食物にされるため神が創造してくれたということをやヴェーダーンタは全面的に否定する。

ある人々は動物解剖反対協会を創立するほど、非常に親切であつた。私はその会員の一人に尋ねた。「食物にするために動物を殺すことは全く合法的で、科学実験のために一匹か二匹を殺すことは不法だとお考えになるのは何故ですか。」

その人は答えた、「生体解剖は最も恐ろしいことです。しかし動物は私どもに食物として与えられているのです。」

<sup>ワシネズ</sup>一者はすべての動物を包含している。もし人間の生命が不滅だとすれば、動物のそれも同様である。その差異は程度にすぎず種類のそれではない。アミーバと私とは同じことで、その差異は程度のそれにすぎない。最高生活の立場からみれば、これら一切の差異は消え失せる。人間は草と小さい木とのあいだに非常な相違を見るかもしれない。しかし、非常に高いところに登ってみれば、草と大木とは、まったく同じに見えるであろう。同様に、最高の理想の立場から見れば、最底の動物と最高の人間が同じことになる。もし、あなたが一人の神があることを信ずるならば、動物も万物の霊長も同じでなければならぬ。人間と名づけられるわが子たちを偏頗に愛して野獣と名づけられるわが子たちを残酷にあつかうような神は悪魔より悪い。こんな神を拝むよりは百度も死んだほうがいいと思う。私の全生涯はこん

な神との闘争となろう。しかし、そんな差別はないのだ。そんな差別があるという人々は、ものを知らない無情冷酷な無責任な人々だ。ここに実践的という言葉が間違った意味で使用された場合がある。私自身非常に厳格な肉食主義者ではないかもしれない。しかし私はその理想を理解している。私は肉を食べるとき、それが間違っていることを知っている。ある事情があつて、それを食うことを余儀なくされるときも、それが残酷だということを知っている。私は私の理想を現実までひきさげて、このような私の弱い行動を弁解してはならない。理想は肉を食わないこと、どの生物をも害しないことである。すべての動物は私の兄弟だからである。もしあなたがたが彼らをあなたがたの兄弟と考えることができるなら、人間の四海同胞は言わずもがな、一切の魂あるものの兄弟関係に向つて少し進んで行つたことになる。それは子供の遊びだ。あなたがたは普通に、これが多くのものにとってそう受け入れやすくないことを発見する。なぜなら、それは彼らに対して現実を放棄して理想に向つて一層高く進んでゆけと教えるからである。しかし、多くの人々の現在の行動と妥協するような理論をあなたがたがもつてくれば、彼らはそれを全然実践的だと考える。

人間の性質にはこういう強い保守的な傾向がある。われわれは一步前進することを好まない。私はあたかも雪に氷結された人々の話を読むのと同じように人類について考える。話によれば、そういう人々は、しきりに眠りたがるそうだ。もしあなたがたが彼らを引き起そうとすれば、彼らは言う、「眠らせてくれ。雪のなかで眠るのは実に美しいことだ。」そうして彼らは雪のなかで死ぬのだ。われわれの性質もそんなものだ。それこそわれわれが生涯なしつつあることだ。足から上の方へ凍えていって、しかも眠たがっているのだ。だからあなたがたは理想に向つて戦わなければならない。もしある人間がやつてきて、理想をあなたがたの水準にまでひきさげて、その最高の理想をかかげないような宗教を教えようとするならば、そんな人間に耳をかすな。私にとっては、それは非実践的な宗教である。しかし、もしある人間が最高の理想をあらわすような宗教を教えてください。私はその人間を待ちかまえる。もし誰かが官能的虚栄や官能的弱味の弁解をしようと試みるならば警戒せよ。もし誰かがわれわれにそういう仕方を説教しようと欲するならば、われわれはその教えに従うことによつて自分自身を官能にしばらく哀れな一塊の土にしてしまったので、われわれは決して進歩することはないだろう。私はこれらの事例を沢山見てきた。私は世の中の若干の経験をしてきた。そして私の国は宗教上の宗派が茸のように出てくる土地である。毎年、新しい宗派が発生する。しかし私が気づいた一事は、ただそれが進歩を特

徴づける真理の人間を肉の人間と妥協させようとは決して欲しない人々だということだ。もろもろの肉の虚栄を最高の理想と妥協させるとか、神を凡人の水準にまで引きおろすとかいった、こういう虚偽の観念がある場合には腐敗があらわれる。人間を俗世間の奴隷状態にまで墮落させてはならない。神にまで高めなければならぬ。

同時に問題の別の一面がある。われわれは軽蔑をこめて他人を見下すようなことをしてはならない。われわれはみんな同じ目標に向って進みつつある。弱さと強さとの差異は程度のそれである。美德と悪徳との差異は程度のそれである。天国と地獄との差異は程度のそれである。生と死との差異は程度のそれである。この世界におけるすべての差異は程度のそれであつて、種類のそれではない。なぜなら、唯一性があらゆるものの秘密だからである。一切は一である。それがあるいは思想として、あるいは生命として、あるいは靈魂として、あるいは身体として自己を、顕現する。そしてその差異は程度のそれにすぎない。そんなわけで、われわれは、正確に自分と同じ程度に発達していない人々に対して軽蔑の念をこめて見下すような権利を有していない。何ものをも非難するなかれ。もしあなたが救いの手をきしのべることができれば、そうせよ。もしそれができないならば、手を拱いてあなたがたの兄弟を祝福し、彼ら自身の道を行かしめよ。引きずりおろして非難することは働く道ではない。働きは決してそういう仕方ではなしとげられない。われわれは他人を非難することでエネルギーを消耗する。批判と非難は、われわれのエネルギーを浪費する空しい仕方である。なぜなら結局われわれはすべてが同じものを見ているので、多かれ少なかれ同じ理想に近づきつつあるということ、そしてわれわれのあいだの差異は大部分、表現の差異にすぎないということがだんだんわかってくるからである。

罪の観念をとつて見よう。私はちようど今、罪についてのヴェーダーンタの観念を話したわけだ。もう一つそれと別な観念は人間は罪人つみびとだというものである。どちらも実践的には同じことだ。ただ一つは積極面を、他の一つは消極面をとっているだけだ。一つは人間に対して人間の強味を示し、他の一つは人間の弱味を示す。ヴェーダーンタは言う、弱点はあるだろう、しかし決して気にするな、われわれは成長せんと欲する。病は人間が生れるや否や発見された。誰でも自分の病を知っている。われわれの病が何であるかを誰かに言っけさせてもらう必要はない。しかし、二六時中われわれは病気にしていると考えることはわれわれを治癒しないであろう。薬が必要である。われわれは外界の何かを忘れるかもしれない。外部の世間に向って偽善者になろうと試みるかもしれない。しかしわれわれの心の奥底で、み

んな自分の弱味を知っている。しかし、とヴェーダーンタは言う、弱味を思い出さされてもあまり役にはたたない。強さを与えよ。強さは二六時中弱きについて考えることによって生じはしない。弱きに対する治療法は弱さを案じつづけることではなく、強さについて考えることである。人々に対して、すでに彼らの内部に宿っている強さについて教えよ。彼らは罪人だと言っけかせるかわりに、ヴェーダーンタは反対の立場をとって、こう言っけかせる。「あなたがたは純粹で完全だ。そしてあなたがたが罪と呼ぶところのものは、あなたがたには属していない。」

罪とは自己顕現の甚だ低い段階である。高い段階においてあなた自身を顕現せよ。それこそ記憶すべき唯一のことである。われわれのすべてがそれをする事ができる。

決して「否」と言うな。決して「私はできない」と言うな。あなたがたは無限なのだから。あなたがたの性質に比較すれば、時間と空間すら無に等しいのだ。あなたがたは何でもすることができ。あらゆることができる。あなたは全能である。

これらが倫理学の原理である。しかしわれわれは今もつと低いところへおりてきて、細かい点を明らかにしよう。われわれはどうすればこのヴェーダーンタの原理がわれわれの毎日の生活、市民生活、地方生活、国民生活や各国民の国内政治などに移し入れられるかを見よう。なぜなら、もしある宗教が人間がどこにしようと、どんな立場にしようと、その助けになることができないとすれば、あまり有用ではない。それはただ選ばれた少数者のための理論たるにとどまるだろう。宗教は、人類を助けるには、それが奴隷に陥つていようと自由であろうと、墮落のどん底まで落ちていようと、純潔の最高峰に立つていようと、どんな状態にあつても、それを助ける用意をし、また助けることができなければならない。あらゆるところで平等にその援助にやってくる事ができなければならない。ヴェーダーンタの諸原理もしくは宗教の理想、そのほか何と呼んでもよろしいが、この偉大なる機能を実行するための能力によって完遂されるであろう。

われわれ自身に対する信仰という理想は、われわれにとって最大の助けである。われわれ自身に対する信仰がもつと広汎に教えられ、実行されていたなら、われわれの有する悪事や災厄の非常に大きい割合が消え失せていたに違いないと思う。人類の歴史を通じて、もしなんらかの動機が偉大な男子や女子の生涯において他の動機よりも有力に作用してきたとすれば、それは自分自身に対する信仰のそれである。彼らは偉大たるべきだという意識をもって生れ、偉大になった。人間をできるかぎり低く墮落せしめよ。

露骨な絶望感からして向上のカーブをとって彼自身に対する信念をもたざるを得ないような時機が来るに相違ない。しかしわれわれにとっては、そもそも最初からそれを知っておくほうがよい。われわれは自分自身に対する信仰を得るために何故そんなに苦しい経験の一切をしなければならぬか。人と人とのあいだの一切の差別は自分自身に対する信仰の有るか無いかにかかっている。われわれ自身に対する信仰はあらゆることをなすであろう。私はそれを私自身の生涯で経験した。今も経験しつつある。私は年をとるにつれて、その信仰がだんだん強くなりつつある。自分自身を信じないものは無神論者である。古い宗教は、神を信じないものは無神論者だと言った。新しい宗教は、自分自身を信じないものは無神論者だと言う。しかしそれは利己的信仰ではない。なぜなら、ヴェーダーンタはまた「一」の教説であるからだ。それは一切に対する信仰を意味する。なぜなら、あなたがたは一切であるからだ。あなたがた自身に対する愛は一切に対する愛、動物に対する愛、あらゆるものに対する愛を意味する。あなたがたは一切にして一なるものだからだ。それは世界をより善くしてゆく大いなる信仰である。私はそれを確信する。「私は私自身について一切を知っている」と真理をもって言うものは最高の人間である。どんなに多くのエネルギーが、どんなに多くの威力が、どんなに多くの勢力があなたがたにかぼそい外形の背後にまだ潜んでいるかを知っているか。人間のなかにある一切のものを、どんな科学者が知っていたらう。人間が初めて地上に現れてから数百万年が経過している。しかも、その力の極小部分しかまだ顕現されてはいない。それゆえ、あなたがたは自分で弱いなどと言ってはならない。表面上の下落のかげにどんな可能性が横たわっているか、どうしてわかる。あなたがたはご自分の中にあるものについてごくわずしか知っていない。あなたがたの背後には無限の力と幸福の大海が控えているからだ。

「このアトマンは最初に聴かるべきものである。」

あなたがたがその魂であることを昼も夜も聞け。昼も夜も、それをあなたがた自身に繰り返せ。それがあなたがたの血脈のなかに滲透するまで、それが血の一滴一滴にまじりあうまでに。それがあなたがたの肉となり骨となるまでに。全身をばこの一つの理想で充滿せしめよ。「私は生れたことのない、死ぬことのない、浄福あふるる、全知全能なる、とわに光栄にはえる魂である。」そのことを昼も夜も思え。それがあなたの生命の部分となり分子となるまでにそれを思え。それを瞑想せよ。そこから働きが出てくるだろう。「心の満ちあふれたところから口が語り出す。」そして、心の満ちあふれたところから

手も働き出すのだ。行動が起るだろう。あなたがた自身をその理想もて満たせ。あなたがたの行動はすべて、そういう思想の力によつてこそ拡大され、変形され、神聖化される。もし物質が強力だとすれば、思想は全能だ。この思想をもつてあなたがたの生活に銘ずるようにせよ。あなたがた自身をば、あなたがたの至上万能、あなたがたの稜威みいず、あなたがたの光栄をもつて満たせ。いかなる迷信もあなたがたの頭のなかに入っていないかつたら、どんなによかつたらう。われわれは生れてこのかたわれわれの弱きや不徳という迷信的影響や麻痺的な観念にとりかこまれていなかったら、どんなによかつたらう。人類が最も高尚な最高の真理に達すべきより容易な道をもつていたらどんなによかつたらう。しかし人間はこれらすべてを通過しなければならなかった。あなたがたのあとより来つつあるもののためにこの道を一層困難なものにするな。

これらは往々にして恐るべき信条を教えることになる。私はこれらの観念をこわがる人々を知っている。しかし実践的であることを欲する人々にとつて、これは第一に学ぶべきことである。あなたがた自身や他人に対して「自分は弱い」などと告げてはならぬ。もしあなたがたができるなら善をなせ。しかし世の中を害してはならぬ。あなたがたの制限された観念、この自己卑下や、さては空想的な偶像に向つて祈つたり泣いたりすることが、たいてい迷信だということはあなたがたの内心で知っている。これらの祈祷が答えられたことが一度でもあれば話してもらいたい。そこに出てくる答えはすべてあなたが自身の心から来たものだ。あなたがたは幽霊などないことを知っている。しかし闇のなかに這入るや否や、ゾツとするような感触にちよつと襲われる。われわれの幼年時代にこれらすべての恐怖にみちた観念がわれわれの頭のなかに植えつけられているから、そうなる。しかし、社会や輿論に対する恐怖、友人たちの憎悪を招きはしないかという恐怖、または培養された迷信を失いはしないかという恐怖を通じて、他人にこれらの事柄を教えこむようなことはするな。すべてこれらの事柄の主人公になれ。宇宙の唯一性と自分自身に対する信仰のほかには宗教が教うべきそれ以上のことが何かあるか。過去数千年来人類の一切の働きは、この一つの目標に向けられてきた。人類は今なおそれを働きつづけている。今度はあなたがたの番だ。あなたがたは、すでにその真理を知っている。それがすべての方面から教えられてきたからだ。哲学や心理学だけでなく、唯物論的な科学さえ、それを宣言している。宇宙の唯一性という真理の承認を恐れるような科学者が今日どこにいるだろうか。誰かあえて沢山の世界について語るような人がいるか。そんなことはみんな迷信である。ただ一つの生活、一つの世界がある。そしてこの

一つの生活、一つの世界がわれわれにとって複雑多様なものとして現れつつある。この複雑多様性は一つの夢のようなものだ。あなたがたは夢を見ているとき、一つの夢が過ぎてゆくと、次の夢がやってくる。あなたがたは夢の中に生きているのではない。夢はあとからあとからやってくる。一つの光景から次の光景へとあなたがたの前に展開する。九十パーセントの不幸と十パーセントの幸福のこの世界もまさに夢と同じだ。たぶん暫くすれば、それは九十パーセントの幸福として現れるだろう。そしてわれわれはそれを天国と呼ぶだろう。しかし賢者にとっては一切万有が消滅して、この世界が神自身として現れ、彼自身の魂が神として現れる時がやってくる。それは沢山の世界があるからではない。それは沢山の生活があるからではない。すべてこの複雑多様性は、かの「一」なるものの顕現である。かの「一」なるものは多くのものとして、物質として、精神として、意識として、思想として、その他のあらゆるものとして自己を顕現しつつある。それは多くのものとして自己を顕現している、かの「一」なるものである。だから、まずわれわれのとるべき第一歩は、この真理をわれわれ自身と他の人々に対して教えることである。

世界をしてこの理想をもつて響きわたらしめよ。もろもろの迷信を消え失せしめよ。弱い人々にこれを告げよ、そして、それを告げることをあくまで頑張りつづけよ。あなたは純粹なる「一」なるものである。目醒めて立ちあがれ、お力強いものよ、この眠りはあなたにふさわしくない。目醒めて立ちあがれ、このままではあなたに似つかわしくないではないか。あなたは弱くてみじめだなどと思うな。至上方能なるものよ、目醒めて立ちあがり、あなた自身の本性を呈露せよ。あなたは自分を罪人と考えることは適當でない。そう世界に向って言え。あなたがた自身に向って言え。どんなに実践的な結果が生ずるかを見よ。電光の閃きをなしてあらゆるものが顕現し、あらゆるものが一変する姿を見よ。人類に向ってそのことを告げ、彼らに彼らの力量を示してやれ。そうすれば、われわれはどうすればそれをわれわれの日常生活に適用されるかを学ぶであろう。

われわれがヴィヴェーカ (Viveka 識別) と呼ぶところのものを使用し、われわれの生活のあらゆる要素にわたって、われわれの行動の一つ一つにおいて、何が正しく何が正しくないか、何が真実で何が虚偽かを識別する仕方を学ぶことができるには真理の標準を知らなければならぬだろう。それは純潔であり唯一性である。唯一性に寄与するものはすべて真理である。愛は真理である。憎悪は虚偽である。憎悪は多種多様に寄与するからである。人と人とを切り離すのは憎悪である。だから、それは間違っ

ていて虚偽である。それは分解する力である。それは切り離して破壊する。愛は結びつける。愛は唯一性に寄与する。あなたがたは一つになる。母親は子供と、家族は都市と、全世界は動物と一つになる。愛は存在であり、神自身であるからだ。これは表現の多い少ないはあるが、すべてかの「一」なる愛の顕現である。その差異は程度のそれにすぎない。しかし、それは徹頭徹尾かの「一」なる愛の顕現である。それゆえ、われわれのすべての行動においてそれが分散に寄与しているか唯一性に寄与しているかを判断しなければならぬ。もし分散に向っておれば、それを放棄しなければならない。しかし、唯一性に寄与するならば、それが善だと確信できる。われわれの思想についても同様である。それが分解や多様化に寄与するか、それとも唯一性に寄与して魂と魂とを結びつけて一つの影響下に置くようにするかを決定しなければならない。もし後の場合であれば、それを採用する。もしそうでなければ、それらを罪人のように放逐する。

倫理学の全観念は何か不可知なものに依存しているのではないということである。それは知られていないことを教えはしない。しかし『ウパニシャッド』の言葉でいえば、「われら知られざる神として崇める神、その神をわれ汝らに説く。」あなたがたが何かを知るのは自我を通じてである。私は椅子を見ている。しかし椅子を見るには、まず私自身を知覚し、それから椅子を知覚しなければならない。椅子が知覚されるのは、自我において自我を通じてである。あなたがたが私に知られるのも、全世界が私に知られるのも、自我において自我を通じてである。だから、この自我が知られていないと言え、それは全然無意味である。自我をとりされ、そうしたら全宇宙が消え失せる。自我において、自我を通じて一切の知識が出て来る。だから、それは一切のなかで一番よく知られたものである。それは、あなたが「私」と称しているところあなた自身である。あなたは私のこの「私」がどうしてあなたの「私」でありうるか、不審に思うかもしれない。あなたがたは、この制限された「私」がどうして制限されない無限者でありうるか不審に思うかもしれない。しかし事態はまさにそのとおりなのだ。制限されたものとは単なる仮構フィクションにすぎない。無限なるものがいわば覆い隠されているのだ。それらの小部分がいわゆる「私」として顕現しつつあるのだ。制限は決して制限されないものに加えられるはしない。それは仮構である。それゆえ、自我は、われわれのすべてに——男にも、女にも、子供にも——動物にさえも、知られている。

「彼」を知ることなしには、われわれは生きることができないし、われわれの存在を有することもできない。この万有の主人公を知ることなしには、呼吸することもできないし、一秒間生きるこ

ともできない。ヴェーダーンタの神は、あらゆるもののなかの最もよく知られたものであって、想像の産物ではない。

もしこれで実践的な神を説いていないとすればほかにどうして実践的な神を教えることができようか。私が自分の前に見るところの「彼」、あらゆる生物の中に遍在し、われわれの五官よりもっと実在的な神よりも一層実践的などこにあるか。あなたが「彼」であり、遍在する至上万能の神であり、あなたがたの魂の魂であるからだ。もし私やあなたがたはそんなものではないと言え、私はウソを言ったことになる。私は二六時中それを実現しているか否かは別として、それを知っている。「彼」は「一者」であり、一切の統一であり、一切の生命や一切の存在の実在性である。

ヴェーダーンタの倫理学のこれらの観念は細部にわたって考えぬかれる必要がある。だから、あなたがたは忍耐力をもたなければならぬ。前に申しあげたとおり、われわれは、この題目を細部にわたってとりあげ、徹底的に吟味したいと思う。どうしてこれらの観念が非常に低い理想から生じて来たか、唯一性という偉大な理想がどうして発達し、どうして普遍的な愛に形成されたかを見ようとする。そしていろいろの危険を避けるためにこれらを研究すべきである。世間は最低段階からそれを働き出す時間を見出せない。もしわれわれがあとから来る人々に対して真理を伝えることができなければ、われわれがより高い段階に立つことはなんの役にたつか。だから、全般的な働きにおいて研究するほうがよい。そして第一に、知性的な部分を明るくすることが絶対的に必要である。一番大切なことは心だから、知性的な事柄などほとんど無に等しいことを知っているけれども。「主」が見えるのは心を通じてであって知性を通じてではない。知性は、われわれのために道路を浄める道路掃除人にすぎない。二義的な労働者、警官にすぎない。しかし警官は社会の働きにとって積極的な必要物ではない。彼はただ、混乱をとめ、悪事を防ぐためである。それが知性に要求される働きのすべてである。あなたがたは知性的な書物を読むとき、それをマスターしてしまうと、「ありがたや済んでしまった」と思う。なぜなら、知性は盲目で、自分から動くことはできない。それには手もなければ足もない。動くのは感じである。電気にせよ、その他の何にせよ、それらよりも無限に早いスピードで動くのは感じである。あなたは感じがあるか——これが問題である。もしあなたに感じがあれば、主を見るであろう。あなたが今日所有している感じこそ強化され聖化されて最高の神壇にまで高められて、ついにはそれがあらゆるものを感じ、あらゆるもののなかに唯一性を感じ、神を自らのうちに、そして他のものうちに感ずるに至らしめる

ものである。知性は決してそれができない。「言葉を話す種々異なった方法、書物の本文を説明する種々異なった方法、それらは学者の享樂のためであつて、魂の救済のためではない。」

あなたがたのなかでトーマス・ア・ケンピス<sup>1</sup>を読んだ方は、あらゆるページで、どんなにこのことを力説しているかをご存知である。そして世界中のほとんどすべての聖人がこのことを力説している。知性は必要だ。これがなければ、われわれは粗野な誤謬に陥り、あらゆる種類の過失を犯すであろう。知性はそれを阻止する。しかし、それ以上何かそこに建設しようと試みはしない。それは不活発な二義的な援助である。実質的な援助は感じであり愛である。あなたは他の人々のために感ずるか。もし感ずるなら、あなたは唯一性において成長しつつあるのだ。あなたが他の人々のために感じないとすれば、あなたが最も知的な巨人であるかもしれないとしても、要するに無に等しくなるであろう。あなたはドライな知性にすぎず、いつまでもそこにとどまるであろう。そしてもしあなたに感じがあるなら、一冊の本を読むことができなくても、どんな国語を知らなくても、あなたは正しい道に立っている。「主」はあなたがたのものである。

<sup>1</sup>トーマス・ア・ケンピス (Thomas a Kempis ca. 1379-1471) ドイツの神秘主義者。ケルンに近いケンペンに生れ、一四〇七年聖アグネス山の修道僧になり、ついでその院長となり、生涯を送った。彼の信仰体験記『キリストにならぶ』(Imitatio Christi) で有名。(訳者註)

あなたがたは世界の歴史から予言者たちの力が生きていたところを知っていますか。それがどこだったか。知性においてか。彼らの誰かが哲学上の深遠な書物とか論理学の最も煩瑣緻密な推理に関する書物を書いただろうか。一人としてそんなことをしたものはない。彼らはただ少しの言葉をしゃべったにすぎない。キリストのように感じる、そうしたら、あなたはキリストになるであろう。仏陀のように感じる、そうしたら、あなたは仏陀になるであろう。生命であり強さであり活力であるものは感じである。それがなければ、知的活動を山と積んでも神に到達することはできない。知性は移動する力のない四肢のようなものだ。彼らが動いて他人に働きかけるのは、感じが這入って来て彼らに運動を与えたときに限られる。それは世界中どこにおいてもそうである。これこそあなたが常に銘記すべき事柄である。それがヴェーダーンタ道徳における最も実践的な事項の一つである。あなたがたはすべて予言者である、すべて予言者でなければならぬというのがヴェーダーンタの教えであるからだ。書物はあなたがたの行動の証拠ではない。あなたがたこそ書物の証拠である。ある書物が真理を教えるということはどうしてあなたがたは知っているのか。世界のキリストや仏陀の証拠は何であるか。あなたがたや私が彼らと同

様に感ずるといふことだ。それこそあなたがたや私が彼らの言うことの真実さを理解する所以である。われわれの有する予言者魂が彼らの予言者型の証拠である。あなたがたの神性が神自身の証拠である。もしあなたがたが予言者でないならば、神についてなんらかの真実な事柄は決して存在しなかったであろう。もしあなたがたが神でないとすれば、神など何もなかったのだ。そして将来もありはしないだろう。これこそついてゆくべき理想だとヴェーダーンタは説く。われわれの各自は予言者にならないといけないだろう。そしてあなたがたはすでに現に予言者なのだ。ただそれを知れ！ 魂にとって何か不可能なことがあると思うな。そんなことを思うのは最大の異端である。もし罪があるとするれば、これこそ唯一の罪である——自分らは弱いとか他の人々は弱いとか言うことが。

(一八九六年十一月十日、ロンドンにて講演)

私は『チハーンドーギヤ・ウパニシャッド』<sup>1</sup>から非常に古い物語をあなたがお話ししよう。それはどうしてある少年に知恵がついたかという物語である。物語の形式は甚だ粗末だが、われわれはそれが一つの原理を含んでいることを見出すだろう。

1 『チハーンドーギヤ・ウパニシャッド』(Chandogya Upanishad) 『サーマヴェーダ』(Samaveda 沙磨吠陀) を典拠とするウパニシャッド(奥義書)の一種。(訳者註)

あるいとけない少年が彼の母親に言った。「ぼくはヴェーダを勉強しようと思う。ぼくのお父さんの名と私の階級カーストを言っておくれ。」

その母親は正規の結婚をした婦人ではなかった。インドでは結婚しない婦人の子供は浮浪人とみなされている。社会に受け入れられないし、ヴェーダを学ぶ資格がない。そこで哀れな母親は言った。「わが子よ、わたしはおまえの姓を知りません。わたしは奉公していました。あちこち違った場所に奉公していました。わたしはおまえのお父さんが誰だか知りません。しかしわたしの名はジャバーラー<sup>1</sup>で、おまえの名はサティヤカーマ<sup>2</sup>といひます。

1 Jabala

2 Satyakama 愛真理を意味する。(訳者註)

その小さい子供はある賢者のところへ行って弟子にして下さいと願った。賢者は彼に訊いた。

「おまえの父の名は何というかね、そしておまえの階級カーストは何だね。」

少年は賢者に対して母親から聞いたことを繰り返した。賢者は直ちに言った。

「自分についてこんな破壊的な真実をしゃべることのできるのは婆羅門族以外にはない。おまえは婆羅門族じゃ。わしはおまえに教えてやろう。おまえは真理から目をそむけなかったな。」

そこで彼は少年を手もとにとどめて教育した。

さて今度は古代インドの特別な教育方法のあるものだ。この先生はサティヤカーマに四百頭の瘦せた弱い牛を与えて世話を言いつけ、森へ追いやった。少年はそこへ行って暫くのあいだ暮らした。先生は家畜が一千頭の頭数に増加したら帰って来いと命じた。数年後のある日、サティヤカーマは家畜のなかの一頭の牡牛が彼に話しかけるのを聞いた。「わしらは今千頭になった。あなたの先生のところへつれて帰っておくれ。わしはブラーフマン<sup>1</sup>について少々あなたに教えてやろう。」

「もつと話して下さい」とサティヤカーマは言った。

1 ブラーフマン (Brahman) 梵と訳され、万有の究極實在、後にアートマンと同一視される。(訳者註)

すると、牡牛が言った。「東は主の一部じゃ、西もそうじゃ、南もそうじゃ、北もそうじゃ。四つの主要点はブラーフマンの四つの部分じゃ。火もあなたにブラーフマンについて何か教えてくれるじゃろう。」

火はこの時代において一つの大きいなる象徴であった。学生はみんな火をこしらえて供物をささげなければならなかった。そこで次の日、サティヤカーマは導師の家グールへ向って出発した。そして夕方になると、お供物そなえの儀式を行なった。そして火のところまで礼拝した。そしてその近くで坐っていた。すると一つの声が火から来るのを聞いた。「おおサティヤカーマよ。」

「主よ、話して下さい」とサティヤカーマが言った。(あなたがたはたぶん、『旧約全書』によく似た話があつてサムエルが神秘的な声を聞くくだりを思い出されたことだろう。)

「おおサティヤカーマよ、わしはブラーフマンについて少々あなたに教えにやって来た。この大地はあ  
のブラーフマンの一部じゃ。大空と天国はそれの一部じゃ。大海はそのブラーフマンの一部じ  
ゃ。」

それから火はある鳥がまた彼にであることを教えてくれるだろうと言った。サティヤカーマは彼の旅をつづけた。そしてその翌日、夕方のお供物をすますと、一羽の白鳥が彼のところへやって来て言った。

「私はブラーフマンについてあなたにであることを教えてあげよう。あなたが礼拝しているこの火はあのブラーフマンの一部です。あのブラーフマンの一部といえば、太陽が一部分です、月が一部分です、稲妻が一部分です。マドグという鳥がそれについて、もっとあなたに話してくれるでしょう。」

次の夕方、その鳥がやって来た。そしてサティヤカーマは似たような声を聞いた。「私はブラーフマンについてあることをあなたに話してあげよう。呼吸はブラーフマンの部分です。視ることは一部分です、聞くことは一部分です、精神は一部分です。」

それから少年は先生の場所に到着した。そして恭しく先生の前に出頭した。先生はこの弟子を見るや否や気がついた。

「サティヤカーマ、汝の顔はブラーフマンの認識者のそのように輝いている。いったい誰が汝に教えてくれたのじゃ。」

「人間以外のものごぎいます」とサティヤカーマは答えた。「しかし私はあなたさまが私に教えて頂

くことをお願いいたします。お師匠さまから学んだ知識だけが最高善に導くということをおなたさまのような人々から伺っておりますので。」そのとき、その賢者は神々から授かった同じ知恵を彼に教えた。「これで何も言い残したことはない、何も言い残したことはないのじゃ。」

さて、牡牛や火や鳥が教えてくれた寓話から離れて、われわれはこれらの時代に行なわれていた思想の傾向や方向を認める。われわれがここに芽生えを認める偉大なる観念は、すべてこれらの声がわれわれ自身の内部にあるということである。われわれがこれらの真理を一層よく理解すれば、その声がわれわれ自身の心のなかにあることがわかる。そして学生は始終真理を聞かされていることを理解していた。しかし彼の説明は正確ではなかった。彼はその声が外部の世界から来るものと解釈していた。だが二六時中それは彼の内部にあったのだ。われわれが手に入れた第二の観念は、ブラーフマンの知識を実践的にするという観念である。世界は常に宗教の実践的可能性を探し求めつつある。そしてわれわれはこれらの物語においてそれが毎日次第に実践的になりつつあったということを見出す。その真理は学生たちが親しみ深いあらゆる事物を通じて示された。彼らが礼拝しつつあった火はブラーフマンであり、大地はブラーフマンの一部分であり、以下みな同様であった。

その次の物語は、このサティヤカーマの弟子であるウパコサラ・カマラーヤナ (Upakosala Kamalāyana) に属している。その男は、サティヤカーマの教えを受けに行つて暫くの間、彼のところで暮らした。さてサティヤカーマが旅行に出かけた。そして学生は大変に悄気かえった。そして先生の妻がやってきて、なぜ食事をしないのかと訊いたとき、少年は答えた。「私はあまり不仕合せなので食べられません。」

すると、彼が礼拝していた火のところからある声が聞えてきた。「その生命はブラーフマンだ、ブラーフマンはエーテルだ、そしてブラーフマンは幸福だ。ブラーフマンを知れ。」

「生命がブラーフマンだということは知っております」と少年が答えた。「しかしそれがエーテルであったり幸福であったりすることは知りません。」

すると、それはエーテルと幸福という二つの言葉は実在において一つのことを意味すること、すなわち心のなかに住んでいる知覚力あるエーテル (純粹知能) を意味することを説明した。そこで、それはブラーフマンを生命として、心のなかのエーテルとして、彼に教えた。

そのとき火は彼に教えた。「あなたが礼拝しているこの大地も食物も火も太陽もブラーフマンのもろもろの形状である。太陽のなかに見られる人物、私は彼である。このことを知って彼を瞑想するものは、

その罪は一切消え失せ、永生を受けて幸福となる。主要なる各方角、月、星、湖水に住むもの、私は彼である。この生、エーテル、天界、ならびに稲妻に住むもの、私は彼である。」

そこでもまたわれわれは実践的宗教についての同じ観念を見る。彼らが礼拝しつつある事物、火とか太陽とか月とか、その他のもの、彼らが親しくなっている声などは、それらを説明し、それらにより高い意味を与えるところの物語の主題をかたちづくっている。そしてこれがヴェーダーンタの真実の実践的な側面である。それは世界を破壊はしない。ただそれを説明する。それは個性を破壊はしない。ただ真実の個性を示すことによってそれを説明する。この世界が空なるもので実在しないということを示すのではない。しかしこう言うのだ、「この世界が何であるかを理解せよ、それがあなたを傷つけることのないように。」

サティヤカーマが礼拝しつつあった火や太陽や月や稲妻やその他の何かがみんな間違っていると例の声は告げはしなかった。しかしそれは、太陽や月や稲妻や火や大地の内部にある同じ霊が彼の中にもあるということを示した。それによってあらゆるものがいわばサティヤカーマの目のなかで変形したのだった。以前には単に儀式をとり行なうための物質的な火にすぎなかった火が新しい様子をして「主」となった。大地が変形され、生活が変形され、太陽、月、星、稲妻などあらゆるものが変形され神化された。それらの実在的な性質が知られたのだ。ヴェーダーンタの課題はあらゆるものに主を認めること、事物をばその現れるがままにはなく、その実在的な性質において見ることである。

それからもう一つの課程が『ウパニシャッド』で教えられている。「目を通して輝くものはブラーフマンである。彼は美しい一である。彼は輝く一である。彼はこれらの世界のすべてにおいて輝く。」ある註解者はこう言う。純潔な人間にさしてくる、ある特別な光は、目における光で意味されている。ある人間が純潔である場合、このような光がその人の目に輝くだろうといわれている。その光は至るところにある内なる魂に実在的に属している。遊星や星や太陽に輝いているのと同じ光である。

今度は、これら古代の『ウパニシャッド』のなかから誕生と死その他について若干の別の教説を読んでお聞かせしよう。たぶんそれはあなたがたの興味をひくと思う。シュヴェータケートウはパーンチャーラスーの王のところへ行った。王は彼に尋ねた。「人々が死ぬとどこへ行くか知っているか。彼らがどうして帰ってくるか知っているか。なぜあの世がいつばいにならないのか、知っているか。」

少年は知らないと答えた。それから彼は父親のところへ行って同じ質問をした。

父親は「わしは知らない」と言って、王のところへ行つた。王は、この知識は僧侶たちには決して知られていない。王者たちにもあるもので、それこそ、王たちが世界を支配する理由だと言つた。この人は一定期間、王のところに滞在した。王が教えてやろうと言つたからだつた。

1 「ヴェーダーンタ哲学の実践その一」冒頭を見よ。

「おおゴータマよ、あの世は火だ。太陽はその燃料だ。光線は煙だ。昼は炎だ。月は燃えかすだ、そして星は火花だ。この火のなかで神々は信仰の神酒を注ぐ。そしてこの神酒からソーマ王<sup>1</sup>が生れた。」と言つて彼は語りつづけた。「あなたはそのちつぽけな火にささげものの儀式をするには及ばない。全世界がその火である。そしてこの儀式、この礼拝は絶えず進行している。神々や天使たち、そしてあらゆるものがそれを礼拝しつづける。人間は火の最大の象徴だ、人間の身体がそれだ。」

1 ソーマ (Soma 蘇摩) ソーマという一種の植物の茎から搾つた液汁に牛乳、酪、麦粉をまぜて醸酵した酒。ひいては酒神をもう。

ここでも、われわれは理想が実践的になつているのを見る。ブラーフマンはあらゆるもののなかに見られる。すべてこれらの物語の根底にある原理は、発明された象徴は善くて役にたつかもしれないが、われわれが発明しようどんなものよりも一層善い象徴は既に存在していることである。あなたはたは神を礼拝するために一つの像を発明するのもよい。しかし一層善い像がすでに存在している。生きた人間がそれだ。あなたがたは神を礼拝するために神殿を建ててもよい。それも結構。しかし一層善い神殿、一層高い神殿がすでに存在している。人間の身体だ。

『ヴェーダ』には儀式的部門と知識的部門という二つの部分がある。時がたつにつれ、儀式が加重化されて、どうにもさばききれないほど煩雑なものになつた。そこで『ウパニシャッド』では儀式的なものがほとんど片づけられている。しかも穩健なやりかたで説明しながらである。昔、彼らはこれらの儀式や犠牲をもつていたので、後になつて哲学者たちが現れたことがわかる。無知な人々の手から象徴をもぎとるかわりに、われわれが不幸にも近代の宗教改革の際に一般に見出すような否定的態度をとるかわりに、彼らはある代用物を与えたのだつた。「ここに火の象徴がある」と彼らは言つた。「甚だ結構だし、しかしここに別の象徴がある。大地だ。なんと豪華な、大いなる象徴ではないか！ここにこの小さい神殿がある。しかし全宇宙が一つの神殿である。人間はどこでも礼拝をとり行なうことができる。人々が地上に描くさまざまの絵像がある。そしてもろもろの祭壇がある。しかし、ここには最も偉大なる祭

壇がある。生きている意識をそなえた人間の身体だ。そしてこの祭壇で礼拝することは、そこらの死んだ祭壇で礼拝するよりも遙かに崇高なことである。」

これから、ある特別の教説のことになる。私自身もそれを十分に理解してはいない。もしあなたがたがそこから何か幾分でも取り出すことができるようなら、読んでお聞かせしよう。瞑想によつて自らを浄めて知恵を得た人間が死ぬと、まず光明のところへ行く。それから光明から昼のところへ行く。昼のところから月の半分の光のところへ行く。そこから太陽が北へ来る六カ月のところへ行く。そこから年へ、年から太陽へ、太陽から月へ、月から稲妻へ行く。彼が稲妻の世界に達すると、人類でない人物に出逢う。その人物が彼をブラーフマン（条件付の）のところにつれて行く。これが神々の道である。賢者や聖者が死ぬと、この道に赴いて帰つて来ない。この月だとか年だとか、これらすべてのものが何を意味するのか、誰にもハッキリはわからない。めいめいが自分勝手の意味を与えている。ある人々はそれは一切無意味だと言う。月や太陽の世界へ行くとか、現が稲妻の世界に到達したあとで、それを助けにやつて来る人物などが何を意味するかということは、誰も知らない。月は生命が存在する場所であるという観念がインド人のあいだにはある。どうして生命がそこから出て来たかを見てみよう。知恵には達しなかったが、この世で善い働きをした人々は、死ぬと、煙のあいだを通つて夜のところへ行く。それから暗い十五日へ行き、それから太陽が南へ移つた六カ月のところへ行く。そこから彼らの祖先たちのところへ行き、そこからエーテルへ、そこから月界へ行く。そこで神々の食物になり、後になつて神々として生れ、彼らの善の働きの許すかぎりそこで暮らすのである。そして善い働きの効果が尽きてしまふと、同じ通路を通つて大地に戻つてくる。彼らはまずエーテルになり、次に空気になり、それから煙になり、次いで霧になり雲になり、それから雨粒になつて地上に降つてくる。彼らは食物のなかに這入りこんで、人類に食われる。そしておしまいに彼らの子供になる。その働きが非常に善かつたものは善い家庭に生れる。そして悪い働きをしたものは悪い誕生をし、動物の身体に生れることさえある。動物は絶えずこの大地へ来たり大地から出て行つたりしつゝある。大地がいつばいにもならねば、からつぽにもならないのは、そのためである。

われわれはこれからいくつかの観念を引き出すことができる。後になつてたぶんもっとよく理解できるだろう。またわれわれはそれが何を意味するかを少々攻究することができる。天界に行つた人々がど

うやうや帰ってくるかを取扱っている最後の部分は、恐らく最初の部分よりもハッキリしている。しかし全体の観念は、神を実現することなしに永続的な天界はないということのように思われる。さて、神を実現したことはないが、その酬いを受けたい所存でこの世で善行をなしたある人々は、死ぬと、これの場所を通過して、遂に天界に達し、われわれがここで生れるのと同じ仕方ですべての子供として、そこに生れる。そして彼らの善い働きのききめの許すかぎりのあいだ、そこで暮らすのである。名まえと形とを有する一切のものは一時的であるというヴェーダーンタの根本観念の一つがここから出てくる。この大地は一時的である。なんとすれば、それは名まえと形があるからだ。同様にもろもろの天界も一時的である。なんとすれば、そこにもまた名まえと形が残っているからだ。永遠なる天国などは言葉の上の形容矛盾であろう。なんとすれば、名まえと形を有する一切のものは時のなかで始まり、時のなかで存在し、時のなかで終るからだ。これらはヴェーダーンタの確定した教説である。そして天国などは、そんなものとして放棄されているのだ。

われわれは「サムヒター」において、天が永遠であるという観念はマホメット教徒やクリスチャンのあいだに通用しているのとだいたい同じものであることを見た。マホメット教徒は少々それ以上に具体化している。彼らはそこにいろいろな庭園があつてその下にいろいろな川が流れている場所だと言う。アラビアの沙漠では水が極めて望ましいものである。そこでマホメット教徒はいつも天国を沢山水をたえたところとして考えている。私は毎年六カ月も雨期がつづく地方に生れた、私が天国を考えるなら、まあ乾いた場所と想像したい。英国の人々もそう考えたいでしょう、サムヒターに出てくるもろもろの天界は永遠である。そして死者は美しい身体をもつて祖先たちと暮らし、その後はいつまでも合せたという。彼らはそこで、彼らの両親や子供やその他の親類と出逢う。そしてこの世と実によく似た生活様式を送るが、ただこの世より少々合せにできている。この世における幸福に対する障害物や困難は一切消え失せる。そしてただ善い部分や楽しみだけが残る。こういう事物の状態を人類がどれほど快的なものと考えとしても、真理は真理であつて快的ということは別物である。われわれが最高点に到達するまでは、真理が快的でない場合だつてある。人間の性質はすこぶる保守的である。それがあつてすることをする。そして一度それをしあげてしまうと、それから脱却するのを困難に感ずる。精神は新しい思想を受けとることを欲しない。なぜなら、それが不快をもたらすからだ。

『ウパニシャッド』では、ものすごい新機軸が打ち出されているのを見る、人々が死後、祖先たちとともに暮らすところのこれらの天界は、名まえと形をもつものは一切死ななければならないという原則からみて、永久であることはできないと宣言されている。もし形をもった天国があるとすれば、時の経過とともに消滅しなければならない。彼らは数百万年も継続するかもしれない。しかし彼らが行かねばならなくなる時は来ないわけにはゆかない。この観念は更にもう一つの観念、これらの靈魂は地上に戻って来なければならないということ、天国は彼らの善き働きの結果を享樂する場所であつて、それらの効力が切れたあとで、この地上の生活に再び戻ってくるということを伴っている。これから明瞭になる一つの事は、人類が非常に早くから因果の哲学を認識していたということである。もしあなたがたが私に向つて、これは実践的でありうるかと訊くならば、私の答えはこうだ、それはまず実践的であつた、その次に哲学的であつた。あなたがたはこれらのことがまず認識されて実現され、それから記録されたということを見ることが出来る。この世界が初期の思想家たちに話しかけた。鳥が彼らに話しかけた。獸類が彼らに話しかけた。太陽と月が彼らに話しかけた。そして、少しずつ彼らはものごとを体得実現し、自然の心ハートのなかへ這入つて行つた。思弁によつたのでもなければ論理の力によつたのでもない。近代に流行するように他人の頭脳を拾いあげて大きな本を作つたりするのもなければ、私がやっているように彼らの著述の一つをとりあげて長い講演をやるといったやりかたでもない。ただ忍耐深い探求と発見によつて、彼らはその真理を見出した。その本質的な方法は実践であつた。それは常にそうでなければならぬ。宗教は常に実践的な学問である。理論的宗教なんてものはかつて存在したことはないし、今後も存在しないだろう。まず実践である。そのあとで知識がくる。魂が帰つてくるという観念がすでにそこにある。結果を望む観念で善き働きをした人々はそれを得る。しかし結果は永久的ではない。そこそこにわれわれは因果の観念が非常に美しく提出されたのを得る。結果はただ原因に等值的に釣り合つていふという観念である。原因があると同様に結果があるだろう。原因が有限なら結果も有限でなければならぬ。もし原因が永遠なら結果も永遠であり得る。しかしすべてこれらの原因、善き働きをするとか、その他すべての事柄はただ有限なる原因である。そのかぎり無限の結果を引き出すことはできない。さて今度は問題の別の半面に移る。永遠の天国があり得ないように同じ根拠からして永遠の地獄はあり得ない。私が極悪人であつて、私の生涯を通じて一分間ごとごとに邪悪な行為をすると仮定せよ。でも、この世における私の全生涯は私の永遠の生にくらべると無に等しい。もし永遠の処罰というものがある

とすれば、有限の原因によって引き起された無限の結果があるということの意味するだろう。そんなことは有り得ない。もし私が私の全生涯をかけて善事をしたとしても、無限の天国を所有するわけにはゆかない。それは同じ誤謬を犯すことになる。しかし、真理を悟った人々、それを実現した人々にとっては第三の行程がある。これこそマヤー（まぼろし）の面纱ヴェールのなかへ入る唯一の道——真理の何であるかを体得実現する唯一の道である。『ウパニシャッド』は真理を実現するとはどういう意味であるかを示してくれる。

それは善をも悪をも承認しないで一切を自己に由来するものとして知ることを意味する。自己はあらゆるもののなかにある。それは宇宙を拒絶することを意味する。あなたの目を閉じること、天国と同様に地獄にも主を見ること、生と同様に死にも主を見ること、を意味する。これは私があなたがたにお聞かせした文章のなかの思想の線である。大地は主の象徴である。空そらは主である。われわれが塞いでいる場所は主である。あらゆるものがブラーフマンである。そしてこれは見られ、実現される。単に話されたり思惟されたりするだけではない。その論理的帰結として魂はあらゆるものが主ブラーフマンで満ちみちていると体得したとき、天国に行こうが地獄に行こうが、その他のどこへ行こうが、この地上に再生しようが、天国に生れかわろうが、一切頓着しないだろうということがわかる。これらの事柄は、その靈魂にとって何か意味をもつことをやめてしまっている。なぜなら、どこの場所も同じことであり、あらゆる場所が主の殿堂であって、あらゆる場所が神聖になっているからだ。そして主の存在はそれが天国だろうと地獄だろうと、その他のどこだろうと、それが見るところのすべてである。善も悪も存在せず、生も死も存在せず——ただ一つの無限なるブラーフマンが存在する。

ヴェーダーンタに従えば、人間がこの認識に到達したとき、自由になった。彼こそこの世界に生きるに適した唯一の人間である。そのほかの入々はそうゆかない。悪を見る人間がどうしてこの世界に生きることができようか。彼の生活は困窮のかたまりである。危険を見る人間はその生活が一つの困窮である。死を見る人間はその生活が一つの困窮である。かの真理を見た人間、あらゆるもののなかにその真理を見た人間、その人だけがこの世界に生きることができると言える。その人だけが「私はこの生活を楽しんでいる、そして私はこの生活で幸福だ」と言うことができる。そのうちに私は地獄の観念が『ヴェーダ』のどこにも見当たらないことをお話しするだろう。それはだいたい後世になってプラーナとともに現れる。

最悪の処罰は『ヴェーダ』によれば、地上に戻ってくることに、この世界へ二度の機会をもつことである。

そもその最初から、この観念が非人格的な転向をとりつつあることがわかる。罰と報酬の観念は非常に物質的である。ちょうどわれわれがすると同様に、ある人を愛し、他の人を憎むような人間的な神の観念とだけ調和するものである。罰と報酬はそんな神の存在とともに許されるものにすぎない。「サムヒター」にはそんな神がいた。そこには、恐怖の観念が入ってくるのを見出す。しかし『ウパニシャッド』までくると、恐怖の観念は消え失せる。そして非人格的な観念がそれに代っている。もちろん、この非人格的な観念を理解することは人間にとって一番難しいことだ。人間は常に人格にしがみついているからだ。大思想家であると思われる人々ですら非人格的な神という観念には嫌悪の情を起す。しかし私にとっては神のことを身体をそなえた人間として考えることほど荒唐無稽なことはないと思われる。生きている神か、それとも死んだ神か、どちらがより高い観念だろうか。誰も見たことのない、誰も知らない神か、それも知られた神か。

非人格的な神は生きている神である、原理である。人格的と非人格的との差別はこうだ。人格的なのは人間にすぎないということだ。非人格的観念は彼が天使であり人間であり動物であり、更にまたわれわれの見ることのできないあるものであるということだ。なんとなれば、非人格性は一切の人格性を包み含しており、宇宙におけるあらゆるものの総計であり、更に無限により多くのものであるからだ。「一つの火が世界に現れて、それがあかも沢山のかたちをなして自己を顕現しつつある。しかもまだまだ無限により多くである。」非人格的なものもそれと同様である。

われわれは生きている神を礼拝したい。私は自分の生涯を通じて神よりほかの何物をも見たことはない。あなたがただってそのとおりだ。この椅子を見るには、あなたはまず神を見る。それから神において神を通じて椅子を見るのだ。彼はありとあらゆるところにあって、「私だ」と言っている。あなたがたは「私だ」を感じる瞬間、存在を意識している。もしわれわれが自分自身の心のなか、生きとし生けるもののなかに、神を見ることができないとすれば、どこに神を見に行けばよいか。「汝は男である。汝は女である。汝は少女である、そして汝は少年である。汝は杖にすがってよろめいている老人である。汝は自分の強力を誇って闊歩している若人である。」汝は存在する一切である。宇宙における唯一の事実にまします不思議な生ける神である。多くの人にとって、これは面纱ヴェールにかくれてどこかに住んでいて、誰もまだ見たことのない伝統的な神とは恐ろしく矛盾したものに見えるだろう。お坊さんたちだけは、もしわれわれが彼らについて行き彼らの勧告をよく聴いて、彼らがわれわれのために決めてくれた道さ

え歩いていけば、われわれが死んだとき、神のお顔を見ることが出来るパスポートをわれわれに授けてやるという保証をしてくれる。すべて例の天国の観念などは、このような馬鹿げたお坊さまの手練手管を飾りたてたという以外、いったい何だろうか。

もちろん非人格的な観念は非常に破壊的なものである。それはお坊さんや教会や殿堂から一切の商売のもとをとりあげてしまう。インドでは今飢饉がある。しかしそこにはそれぞれ王者の富に匹敵するような莫大な真珠や宝石をたくわえた神殿がたくさんある。もしお坊さんたちが非人格的な観念を人々に教えたなら、彼らの職業はオジャンになっていただろう。それでもわれわれはお坊さんの手練手管を離れて、非利己的にそれを教えなければならない。あなたがたは神であり、私もそうだ。誰が誰に服従するのだ。誰が誰を礼拝するのだ。あなたがたは神の最高の殿堂である。私はどんな殿堂よりもお姿よりも聖書よりも、むしろあなたがたを礼拝したい。なぜある人々は彼らの思想があんなにも矛盾しているのか。彼らは小魚のようにわれわれの指のあいだからすべり落ちつつある。彼らは、われらは頭の固い実践的な人間だと言う。至極結構。しかし、ここのこのところで礼拝すること、あなたがたを礼拝することよりも、もっと実践的なことがあるのか。私はあなたがたを見、あなたがたを感じる。そして私はあなたがたが神であることを知っている。マホメット教徒は、アラアのほかに神はないと言う。ヴェーダーンタ派は言う、神でないものは一つもないと。それはあなたがたの多くを驚かすかもしれない。しかしあなたがたは、だんだんと、それを理解するだろう。生きた神があなたがたの内にいます。それでもあなたがたは教会や殿堂を建てたり、あらゆる種類の空想的なナンセンスを信じたりしている。礼拝すべき唯一の神は人間の魂であり、人間の身体の内にあります。もちろん、すべての動物もまた殿堂である。しかし人間は最高の殿堂であって殿堂のなかのタジマハル<sup>1</sup>のようなものだ。もし私があるなかで礼拝ができないとすれば、他のどの殿堂もなんの役にもたたないだろう。あらゆる人間の身体の内かに坐している神を体得実現した瞬間、私が敬虔の念をこめてあらゆる人間の前に立ってそのなかに神を見た瞬間——その瞬間こそ私は東縛から解放され、手足を縛っている一切のものが脱け落ち、そして私は自由である。

1 タジマハル (Taj Mahal) ムガール朝ジャー・ジャハーン帝の寵姫ムムターズ・マハルが一六二九年病死したとき帝が建てた墓廟。白大理石造りの清浄な大殿堂をなし、インド近世建築の代表的傑作と称せられる。(訳者註)

これは一切の礼拝のなかで最も実践的なものである。それは教理とか思弁とかとなんの関係もない。

でも、それは多くの人を恐怖させる。彼らはそれは正しくないと言う。彼らはおじいさんたちから告げられた古い理想について理論化をつづける。ある神が天上のあるところにおいて自分が神だとある人に告げたというのだ。その時代から、われわれはいろいろの理論をもっているだけだ。これは彼らに従えば実践性なのだ。そしてわれわれの観念は非実践的なのだ！ 疑いもなくヴェーダーンタ派は、各人は彼自身の通路をもたねばならぬと言っている。しかし通路は目標ゴールではない。天にまします神やすべてこれらのことを礼拝するのは悪いことではない。しかし、それらは真理へ向う段階にすぎない。真理そのものではない。彼らは善くて美しい。ある素晴らしい観念がそこにある。しかしヴェーダーンタ派は、あらゆる点で言う、「わが友よ、あなたが不可知なものとして礼拝している彼をば私は汝として礼拝する。あなたが不可知なものとして礼拝しつつ、宇宙の果てまで探し求めつつある彼は、始終あなたとともにいましたのだ。あなたは彼を通じて生きつつある。そして彼は宇宙の永遠なる証人である。」「すべてのヴェーダが礼拝するところの彼、いな永遠なる私に常住現在する彼、彼が存在して、全宇宙が存在する。彼は宇宙の光であり生命である。もし私があなたのなかにいなかったなら内あなたは太陽を見なかつただろうし、あらゆるものは暗いかたまりだつたらう。彼が輝いて、あなたは世界を見る。」

一つの質問が普通に訊かれる。そしてそれは、次のようなことである。これが途方もない難点の山につき当るといふのだ。われわれの一人一人がこう思うだろう。「私は神だ、そして私がしたり考えたりすることは何でも善でなければならぬ。神は悪をすることはできないからだ。」第一に、誤解の危険があることを承認するとしても、反対側にも同じ危険が存在しないと証明できるだろうか。彼らは彼らから隔絶した彼らが恐怖している天上の神を礼拝してきた。彼らは恐怖で顫えながら生れて来た。そして一生彼らは顫えつづけるだろう。世界はこれによつて一層よくされているだろうか。人格的な神を理解し礼拝した人々と非人格的な神を理解し礼拝してきた人々、どちらの側に世界の偉大なる働き手——巨人的な働き手、巨人的な道徳的な力が現れたか。確かに非人格的の側であった。道徳が恐怖を通じて発達せしめられると、どうしてあなたがたは期待することができるか。そんなことは決してできない。「ある人が他の人を見るところ、ある人が他の人の声を聞くとき、それはマヤー（まぼろし）である。ある人が他の人を見ないとき、ある人が他人の声を聞かないとき、あらゆるものがアートマンになっているとき、誰が誰を見るのだ。誰が誰を知覚するのだ。」それは一切彼であり同時に一切私である。魂は純粹になっている。そのとき、そしてそのときにかぎり、われわれは愛の何であるかを理解する。愛

は恐怖を通じて来ることはできない。愛の根底は自由である。われわれがほんとうに世界を愛し始めるとき、そのとき四海同胞とか人類ということの意味を理解する。それ以前には理解していないのだ。

そこで、非人格的な神の観念が世の中で途方もない悪の山に突き当るなどと言うのは正しくない。他の教説が決して悪の働きに力を貸したことがないかのように、また世界を血汐の洪水で溢れさせ、お互いに相手を寸断寸断に引裂くようなセクト主義に導くことがなかったかのように。

「私の神は最も偉大なる神である。われわれは自由なる戦いによってそれを決定しようではないか。」それが世界中にまたがる二元論の結末である。白日のひろびろとおっぴらいた光のなかへ出て来たまえ、ちっぴけな狭い通路から出て来たまえ。なぜなら、無限なる靈魂が小さい轍のなかで生きて死んだりすることに甘んじてどうして安堵することができるか。光明の宇宙のなかへ出て来たまえ。宇宙におけるあらゆるものはあなたのものだ。あなたの両腕をひろげて、それを愛をこめて抱きたまえ。もしあなたがそうするように要求されていると感ずるならば、あなたは神亭、感じているのだ。

仏陀が愛の思想を南方へ、北方へ、東方へ、西方へ、上界へ、下界へ送って、ああも豪勢で偉大で、無限であるこの愛が全宇宙を満たしたときの仏陀の教訓のなかの文章を思い出して下さい。あなたがそういう感じをもつなら、あなたは真実の人格をもっているのだ。全宇宙は一つの人格である。ちっぴけなことはうっちゃってしまえ。無限なるもののために、小事を棄てよ。無限の祝福のため些々たる享樂を棄てよ。それはすべてあなたがたのものだ。非人格的なものは人格的なものを含んでいるからだ。そこで神は人格的で同時に非人格的なのだ。そして人間は無限なるもの、非人格的人間が人格として自己を顕現しつつある。われわれは無限なるものだが、いわば小さい部分に自己を制限している。ヴェーダンタ派は、無限性はわれわれの真の性質だと言う。それは決して消えることがない。それは永久に持続するだろう。しかし、われわれは、おのれのカルマによって自分自身を制限しつつある。カルマはわれわれの頸のまわりにまといついた鎖のように、われわれをこの制限のなかに引きずり込んだ。その鎖をひきちぎって、自由になれ。法則を足の下にふみにじれ。人間の性質に法則はない。運命も宿命もない。どうして無限性に法則があり得ようか。自由がその合言葉だ。自由がその性質、その生得の権利だ。自由になれ。それからどんな人格性でもお好きなほど沢山もったらいい。そのとき、われわれは舞台上昇って乞食の役を演ずる俳優のように振舞おう。街頭を歩いてゆく本物の乞食と、それを対照してみよ。見た目には恐らく二つの場合まったく同じだ。でもなんと違うだろう！一人は自分の乞食を享樂

しているのに反して、もう一人は、それがため貧窮を苦しんでいる。そして何がこの違いをつくっているか。一人は自由であるが、もう一人は束縛されているのだ。俳優は彼の乞食ぶりが真実ではなくお芝居のために扮装していることを知っている。これに反して本物の乞食は、それがあまりに身についた状態であつて欲すると否とにかかわらず、それを耐えてゆかねばならぬと考えている。これが法則である。われわれは自分の本当の性質について無知であるかぎり乞食である。自然界におけるあらゆる勢力にコヅキまわされ、自然界におけるあらゆるものに奴隷にされている。われわれは助けを求めて世界中に泣き叫ぶ。しかし助けなど決してやつて来はしない。われわれは空想上の存在に向つて叫びたてる。が、そんなものは決してやつてきはしない。しかしまだわれわれは助けが来るかと思つている。そして泣きの涙で嘆き悲しみながらそして希望しながら一生が過ぎてしまうのだ。そして同じ芝居が次々に続いてゆく。

自由であれ。誰かから何かを望むな。もしあなたがたが自分の生活をふりかえつて見るなら、来るきづかいのない他人からの助けを得ようと常に無駄なあがきをしていることをキット発見する。すべてやつて来た助けというものは、あなたがた自身の内からであつた。あなたがたはただご自身が稼ぎ出したものの果実をもつただけだ。しかも奇妙なことに、二六時中助けを待ち望んでいた。ある金持の客間はいつもいっぱいである。しかし、もしあなたがたが気がついたなら、そこに同じ人々を見出しはしないだろう。訪問客は、これらの金持からあるものを手に入れようといつも希望している。ところが決して手に入れることはない。そこで、われわれの生涯は希望、希望、希望の中に費やされ、それは決して停止することがない。希望を棄てよ、とヴェーダーンタ派は言う。なぜあなたがたは希望しなければならぬのか。あなたがたは、あらゆるものを所有している。いや、あなたがたがあらゆるものなのだ。あなたがたは何を待ち望んでいるのか。もし、ある王様が気が狂つて自分の国の王様を探し出そうと試みて走りまわつたとすれば、彼は決して王様を見つけることはないだろう。なぜなら、彼が王様自身であるからだ。われわれが神であることを知つて、この愚者が神を探しまわるようなことはやめた方がいい。そしてわれわれが神であることを知つて、幸福になり満足することだ。すべてこれらの狂気じみた追求をやめよ。そうして舞台の上の俳優のように宇宙におけるあなたの役を演ずるのだ。

全面の光景が一変した。永遠の牢獄のかわりに、この世界は運動場になつた。競争の国にかわつて祝福の国になつた。そこには永遠の春があり花が咲きみち、蝶が飛びまわっている。これまで地獄であつ

たこの世界がそのまま天国となる。束縛されたものの目には拷問の凄惨な場所であるが、自由なものにはまったく様子を異にする。この一つの生が普遍的な生である。天界やすべてこれらの場所がこの世にある。すべての神々がここにいる。人間の原型である神々が。神々はおのが姿に似せて人間を創造したのではない。しかし人間が神々を創造したのだ。そしてここに原型がある。ここにインドラ<sup>1</sup>がある。ここにヴァルナ<sup>2</sup>がある。そして宇宙の神々のすべてがある。われわれは、おのが小さい複製を案出してきた。われわれはこれらの神々の原物である。われわれは実在の神々、礼拝さるべき唯一の神々である。これがヴェーダンタ派の見解であり、これがその実践性である。われわれは自由になつたとき、気が違つて社会をふりすてて、森や洞穴へ死にに走つてゆくには及ばない。われわれは、これまでいたところに停まるだろう。ただわれわれが事態全般を理解するだろう。同じ現象がそのままにあるだろう。しかし新しい意味をもって。われわれはまだ世界を知つてはいない。それが何であるかを見てその性質を理解するのは、ただ自由を通してである。そうすれば、このいわゆる法則または宿命もしくは運命がわれわれの性質のただ極小部分を占めていたにすぎないことがわかるだろう。それはただ一面にすぎなかった。しかし別の一面は終始 変らずそこに自由があつた。われわれはそれを知らなかつた。あたかも狩りたてられた野兎のようにおのれの顔を地面に隠すことによつて悪から身を守ろうと試みてきた理由はこれであつた。妄想のためにわれわれは自分の性質を忘れようと試みてきた。けれども、それはできなかつた。それは常にわれわれをおとずれてくるのだつた。そして神とか神々とか、外面的な自由に対するわれわれの探求はすべてわれわれの真実の性質に対する探求であつた。われわれはその声を聴きちがえた。そ それを火から、またはある神から、または太陽や月や、星から来たと思つた。しかしとうとうそれ熾 がわれわれ自身の内部から来ることを発見した。われわれ自身の内部で、この永遠の聲が永遠の自由を語りつつある。その音楽は永遠に進行しつつある。この靈魂の音楽の一部分が大地となり法則となり、この宇宙となつた。しかし、それは常にわれわれのものであつたし、いつまでもわれわれのものであるだろう。一言でいえば、ヴェーダンタの理想は人間をそれが真実にあるがまに知ることである。もしあなたがあなたの兄弟たる人間、すなわちここに顕現する神を礼拝することができなければ、どうして顕現されていない神を礼拝することができようか。これがヴェーダンタ派のメッセージである。

1 インドラ (Indra 因陀羅) 雷電の神で、『ヴェーダ』では最も雄大で人気がある神。インド国民の守護神と考えられる。

「あなたが目で見ているあなたの兄弟を愛することができなければ、あなたが見たことのない神をどうして愛することができようか」と『聖書』にあるのを思い出しはしませんか。あなたがたが人間の顔に神を見ることができないなら、どうして雲のなかに彼を見ることができようか。または鈍い死んだ物質からできている偶像や、あなたの頭脳の単なる作り話のなかに、どうして神を見ることができよう。私はあなたがたが男や女のなかに神を見始める日、その日からあなたがたを宗教的と呼ぶであろう。そしてそのとき、あなたがたは右の頬を打たれたとき、その人間に向つて左の頬を向けよということの意味を理解するだろう。あなたがたが人間を神として見るとき、あらゆるもの、虎さえも歓迎されるであろう。あなたがたのところに来るものは何でも主であり、永遠なるもの、祝福されたものである。それがわれわれに対して、いろいろと違つたかたちで父親や母親として友人として子供としてわれわれに現れる——それらはわれわれと遊びたわむれるわれわれ自身の魂である。

われわれの人間関係がこのように神聖化しうるように、われわれの神との関係も、これらの形式のどれかをとることにならう。そしてわれわれは神を、われわれの父、または母として、または友人として、または恋人として見ることができよう。神を母と呼ぶことは彼を父と呼ぶことよりも一層高い理想である。そして彼を友と呼ぶことは更に一層高いものだ。しかし最も高いのは、彼を恋人と考えることである。一切の中で最も高いのは、愛するものと愛されるものとの差別を見ないことである。あなたがたはたぶん、あの古いペルシアの物語を思い出すかもしれない。恋の男がやつて来てその愛人の扉をノックした。そしたら訊かれた。「あなたは誰。」彼は「私だよ」と答えたが、返事がなかった。二度やつて行つて叫んだ、「私がここにいる。」しかし扉はあけられなかった。三度やつて行つたら、内側から声があつて訊いた。「そこにいるのは誰。」彼は答えた。「私はあなた自身だよ、私の愛するものよ。」そうしたら扉があいた。神とわれわれ自身との関係もそのとおりだ。彼はあらゆるもののなかにいまし、彼はあらゆるものそのものだ。あらゆる男も女もピチピチした浄福にみちた生きた神である。神は不可知だと誰が言うのか。彼は探し求めなければならぬなどと誰が言うのか。われわれは神を永遠に発見していたのだ。われわれは永遠に彼の中に生きてきたのだ。あらゆるところで彼は永遠に知られ、永遠に礼拝されている。

それからもう一つの観念になる。このほかの種々の礼拝の形式は誤謬ではないということだ。儀礼や形式を通じて神を礼拝している人々はどんなに粗野にわれわれに思えても、誤っているのではない、ということ。これは銘記すべき大いなる点の一つである。それは真理から真理への旅、より低い真理からより高い真理への旅である。闇はより少ない光で、悪はより少ない善であり、不純はより少ない純潔である。われわれは他の人々を見るとき、われわれが前に踏んだ同じ道を辿っているということを知って、同情をもって愛の目をもって眺めるべきだということを、常に念頭に置かなければならない。もしあなたがたが自由であるならば、すべての人々がおそかれ早かれ自由になるだろうということを知らなければならぬ。そしてあなたがたが自由であるならば、どうして永続しないものを見ることができるか。もしあなたがたが真実に純潔であるならば、どうして不純なものを見るのだろうか。内にあるものは外にあるものだからだ。われわれ自身の内面に不純を有することなしには不純を見ることはできない。これはヴェーダーンタの実践的側面の一つである。そしてわれわれがすべてそれをわれわれの生活にとり入れるだろうことを望む。この世におけるわれわれの全生涯はこれを実践に移すことである。しかし、われわれの得た一つの偉大なる点は、われわれが不平不満をもってするかわりに、満足と安心をもって働くだろうということである。なぜなら、われわれは真理がわれわれの内にあることを知っている、われわれはそれをわれわれの生得の権利として有している。そしてわれわれはただそれを表現して手に触れうるものにならなければならない。

(一八九六年十一月十二日、ロンドンにおいて講演)

『チハンドーギヤ・ウパニシャッド』で、われわれは次のような箇所を読む。ナラダという賢者がサナトクマラという賢者<sup>1</sup>のところへ来て、いろいろの質問をしたが、その一つは、宗教は現にあるような事物の原因であるかどうかということだった。すると、サナトクマラは、いわば一步一步彼を導いて、この大地より一層高いものがある、更にそれより高いものがある、と順々に進んでアーカーシャすなわちエーテルにまで達した。エーテルは光よりも高い。なぜなら、エーテルの中に太陽や月や稲妻や星があるからだ。エーテルのなかにわれわれは住んでおり、そしてエーテルのなかでわれわれは死んでゆく。そのとき、それよりもまだ高い何かがあるかという質問が出てくる。そしてサナトクマラはプラナについて彼に告げた。このプラナはヴェーダーンタに従えば、生命の原理である。それはエーテルのように、遍在的原理である。そして身体においてその他どこにあっても一切の運動はこのプラナの働きである。それはアーカーシャより偉大である。そして、それを通じてあらゆるものが生きている。プラナは母の中にあり、父の中にあり、姉妹の中にあり、導師の中にあり、プラナは認識者である。

<sup>1</sup> ナラダ (Narada) は婆羅門、サナトクマラ (Sanatkumara) は軍神ということになっている。(訳者註)

私はもう一つの文章を読んでみよう。それにはシュヴェータケートウが真理について彼の父に尋ねたくだりがある。そして父は違ったことを教えて、次のような結論を言う。「すべてこれらの事物における微妙な原因にあたるものから、すべてこれらの事物が作られた。それは全有である。それは真理である。汝はそれである。おおシュヴェータケートウよ。」それから彼はいくつかの例を挙げる。「おおシュヴェータケートウよ、蜜蜂がいろいろ違った花から蜜を集めてくるように、そしていろいろ違った蜜がいろいろ違った木々やいろいろ違った花からとられたことを自ら知らないように、われわれのすべても同様で、あの存在に達していながら、われわれがそうなっていることを知らない。さて、あの微妙な本質のなかに、存在する一切がその自我を有している。それは本当のものである。それは自我である。そしておおシュヴェータケートウよ、汝はそれである。」

彼は、もろもろの川が大海に流れ下るといふ別の例を挙げる。

「もろもろの川が大海のなかにありながら、お互いが違った川であったことを知らないように、同様に、われわれはあの存在から出て来ながら、自分があることを知らない。おおシュヴェータケートウ

よ、汝はあれである。」

こうして彼はその教えをつづける。

さて知識について二つの原理がある。一つの原理は特殊なものを一般的なものに適用し、一般的なものを普遍的なものに適用することによって知ることである。そして第二の原理はその説明が求められるものは何でもできるかぎりそれ自身の性質から説明すべきだということである。第一原理をとらあげると、われわれは、すべてわれわれの知識が実はだんだん高くなってゆく分類から成っていることがわかる。あるものが単純に発生するとき、われわれはいわば不満である。同じものが繰り返し繰り返し発生することを示すことができるときはわれわれは満足せしめられ、それを法則と呼ぶ。一つの林檎が落ちるのを見つけると、われわれは不満にされる。しかしわれわれはすべての林檎が落ちるのを見つけると、それを引力の法則と呼んで、満足せしめられる。事實は特殊なものから一般的なものを演繹するということである。

われわれは宗教を研究したいとき、この科学的過程を適用すべきである。同じ原理がここでも通用する。一つの事実としてそれがどこにも通用する方法であったことを発見する。私があなたがたに翻訳してきたこれらの書物を読むにあたって、私が跡づけることのできる一番初期の観念は、この特殊なものから一般的なものにゆくという原理である。われわれはどんなに「明哲の士」が一つの原理のなかに没入させられたかがわかる。そして同様にしてコスモス（宇宙）の観念のなかで、古代の思想家たちがだんだん高く行っていることを発見する。——微妙な元素から彼らは一層微妙な、より包括的な元素へ進んでゆき、これらの特殊なものから一種の遍在的なエーテルに達する。それから更に一切を包括する勢力またはプラーナへ進んでゆく。そしてこれらすべてを通じて、一は他者から切り離されないという原理が貫く。プラーナという一層高い形式をなして存在するのはエーテルそのものである。もしくは、プラーナという一層高い形式が、いわば凝集してエーテルとなる。そして、そのエーテルは更により粗野になる。そしてだんだん粗野になってゆく。

人格神を一般化したことは、もう一つの肝要なことである。われわれはどうしてこの一般化が達せられたか、どうして一切の意識の総計と呼ばれたかを見た。しかし一つの難点がある——それが不完全な一般化だということ。われわれはただ自然の事実や意識の事実の一面をとりあげる。その上にわれわれは一般化をする。しかし他の一面は放っておかれる。そこで第一には、欠陥のある一般化である。更に

もう一つの不十分さがある。それは第二の原理に関係する。あらゆるものがそれ自身の性質から説明されるべきである。林檎が地に落ちるのはすべてある霊によつて引っぱられるのだと考える人々があつたかもしれない。しかしそれを説明したのが引力の法則である。そしてわれわれはそれが完全な説明でないことを知っているけれども、もう一つのよりも遙かによい。なぜなら、そのもの自身の性質から引き出されるからである。これに反してもう一つのは外面的な原因を想定するからである。これはわれわれの知識の全系列を通じて同様である。そのもの自身の性質に基づく説明は科学的な説明である。そして外部的な作為を持ちこんでくる説明は非科学的な説明である。

そこで人格神を宇宙の創造主とする説明はそういう吟味を受けなければならない。もしその神が自然の外にあって自然と交渉がなく、この自然が神の命令の結果、無から引き出されたとすれば、それは甚だ非科学的な説である。そしてこれは、あらゆる時代を通じて、あらゆる人格神論的宗教の有する弱点であつた。われわれは一般に一神教の理論と称せられるものに、この二つの欠陥を見出す。すなわち人類の性質のすべてが甚だしく拡大された人格的な神の理論であつて、彼の意志によつてこの宇宙を無から創造し、しかもそれから分離されているというのだ。これはわれわれを二つの困難に導く。

すでにわかつたように、それは十分な一般化ではないし、第二に、それは自然による自然の説明ではない。結果は原因ではなく原因は結果から完全に分離していると主張する。けれども、すべて人間の知識は結果が別の形式の原因にすぎないことを示す。近代科学上の諸発見は毎日この観念を促進しつつある。あらゆる面において採用されている最も新しい理論は進化論である。進化論の原理は結果が別の形式の原因、原因の再調整にすぎず、原因が結果の形式をとるということである。無からの創造という説は近代の科学者たちから笑われるであろう。

さて宗教はこれらの吟味に耐えうるだろうか。もし、これら二つの吟味に耐えうるような宗教理論が何かあるとすれば、それらは近代精神、ものを考える精神にも受け入れられるだろう。われわれが何か他の理論を僧侶や教会や書籍の権威に訴えて近代人に信じるよう願つても、近代人はそれを受け入れることができない。その結果は不信の醜いかたまりとなる。たとい表面上信仰を見せかけていても彼らの内心には山のような不信の念が高まる。その他のものは宗教から身を縮めてひきさがり、いわばそれを僧侶のたくらみとだけ考えて、投げ棄てるであろう。

宗教は国民的形式の一種になりさがっている。それは極めて善い社会的残存物の一つである。それは

残しておけばよい。しかし近代人の祖父たちが感じていたような真実の必要性は無くなった。近代人はそれが理性を満足させるものとは、もはや考えていない。このような人格神やこのような創造の観念、すなわち一般にあらゆる宗教において一神教として知られているものは、もはや持ちこたえることができなない。インドでは、早くから仏教徒のおかげでそんな観念は維持できなくなった。仏教徒が古代において勝利を博したのは、これが要点であった。自然は無限の力を有していること、自然はその要求をすべて働き出すことができること、これをわれわれが許すならば、自然のほかにあるものがあるなどと主張することは、まったく不必要である。こういうことを仏教徒は示してくれた。霊魂さえも不必要である。

実体と諸性質に関する論議は非常に古くからある。そしてあなたがたは往々にして、古い迷信が現在にもまだ生き残っていることを発見するであろう。あなたがたはすでに読んでご承知のとおり、もろもろの性質が実体に属するかどうか、長さ、広さ、大きさがいわゆる死物の実体に属するかどうか、もろもろの性質があつてもなくてもなお残存する実体にそんな性質が属するかどうか。これが中世において、いや、後世に至るまで論理の題目の一つであった。これに対してわが仏教徒は言う。「あなたがたは、このような実体の存在を主張する根拠を有しない。もろもろの性質こそ存在するものすべてである。あなたは、それらを越えて見ることはない。」これがちょうど、わが近代の不可知論者の多くの説くところだ。一層高い段階において理性体 (noumenon) と感性体 (phenomenon 現象) との対立のかたちをとっているのは、実はこの実体と諸性質との対立であるからだ。そこに感性的現象世界、不断の変化の宇宙がある。そして背後に変化しないあるものがある。そしてこの理性体と感性体という存在の二重性は真実だと、ある人々は主張する。他の人々は一層 優れた理由から抗議し、あなたがたは、その二つを許す権利を有しない、われわれが見たり触れたり考えたりするものは現象にすぎないからだと言う。あなたがたは現象のかなたに何かあると主張する権利を有しない。そしてこれに対する答弁はない。われわれが得る唯一の答弁は、ヴェーダーンタの一元論的理論からくる。ただ「一」が存在する。そしてその「一」が感性体 (現象) であるかそれとも理性体であるかというのがほんとうである。一方には変化するあるもの、他方にはそのなかに、それを通して、変化しないあるもの——この二つがあるというのは、ほんとうではない。変化流転して現れるものと、実在として不変なものとは、ただ一つで同じものである。われわれは身体と意識と魂とを三つのものと考えようになっている。しかし真実にはただ

一つしかない。一つがこれらすべての違ったかたちで現れつつある。一元論者の試みたよく知られた説明、あの縄が蛇に見えたという話をとってみよ。ある人々が闇の中とか、または何か他の原因で、縄を蛇と間違える。しかしそれがわかると、蛇は消え失せ、縄であることが発見される。この説明で、蛇が心のなかに存在するとき、縄は消えていた。そして縄が存在するとき、蛇はいなくなったということがわかる。われわれはまわりに感性体（現象）を見るとき、感性体だけを見るとき、理性体は消え失せている。しかし理性体すなわち不変なものを見るとき、当然の帰結として感性体は消え失せている。さてここで、われわれは實在論者と観念論者の説くところを一層よく理解する。實在論者は現象だけを見、観念論者は理性体に注目する。観念論者すなわちほんとうに認識の力に達し、それによって一切の変化の観念から脱却することができたような、真実に純粋な観念論者にとっては、変化流転する宇宙は消え失せている。彼はそれがすべて妄想であってそこに変化はないと言う権利を有する。實在論者は同じときに变化的なものを見つめる。彼にとっては不変なものが消え失せている。そしてこれがすべて實在的だという権利を有する。

このヴェーダーンタ哲学の産物は何であるか。人格神の観念は十分でないということだ。われわれはより高いものへ、非人格的な観念へ行きつかなければならない。それがわれわれのとりうる唯一の論理的な進路である。人格的な観念がそれで破壊されるのではないし、また人格的な神が存在しないという証拠を提供するというでもない。ただわれわれは人格的なものを説明するために非人格的なものに行かなければならない。なぜなら非人格的なものは人格的なものよりも遙かに高い一般化であるからだ。非人格的なものだけが無限でありうる。人格的なものは制限されている。かようにしてわれわれは人格的なものを保存するのであって、それを破壊するのではない。もしわれわれが非人格的な神の観念に到達したならば、人格神は破壊されてしまうだろう。もしわれわれが非人格的な人間の観念に到達したならば、人格的な人間は失われるだろう。こういった疑惑がしばしばわれわれを襲ってくる。しかしヴェーダーンタの観念は個人の破壊ではなく、その真実の保存である。われわれは個人を他の方法で証明することはできない。ただ普遍的なものに関連させることによって、この個人が真実には普遍的なものであると証明することによって、個人を証明することができる。もしわれわれが、個人をもって宇宙のあらゆる他のものとは分離したものと考えるなら、そんなものは一分間と続くことはできない。そんなものは決して存在していなかった。

次に、あらゆるものを説明するには、そのものの性質に基づかなければならないという第二の原理を適用することによって、更に一層大胆な観念、一層理解の困難な観念に導かれる。それは要するに、次の一点に帰着する。非人格的な存在、われわれの最高の一般化は、われわれ自身の中にあり、われわれがそれだということである。

「おおシユヴェータケートゥよ、汝はそれである。」

あなたは非人格的な存在である。あなたがひろく宇宙にわたってくまなく探し求めつつあった神は、あなた自身である。それは人格的な意味におけるあなた自身ではなく、非人格的な意味におけるあなた自身である。今われわれにわかったことは、人間は顕現されたものとして人格化されている。しかしその実在性は非人格的なものである。人格的なものを理解するには、非人格的なものに関連せしめなければならぬ。特殊なものは一般的なものに関連せしめなければならぬ。その非人格的なものは真理であり、人間の自我である。

これと関連した種々の問題がある。それに対して、私はさきに進むに従って解答を試みるであろう。多くの困難が起ってくるであろう。しかしまず一元論の説くところをハッキリ理解しようではないか。顕現された存在として、われわれはバラバラに分離しているように見える。われわれの実在は一つである。われわれが自分自身をあの「一」なるものから分離していると考えなければ、それだけわれわれにとってより善いのだ。われわれが自分自身をあの全一なるものから分離していると考えるほど、それだけわれわれはみじめなものになる。この一元論的な原理からして、われわれは倫理学の根底をつかむ。これ以外のどこからも倫理学など手に入れることはできないと私は敢えて言いたい。倫理学の最古の観念はある特別の生物または生物群の意思であったということを知っている。しかし今なおその説を無雑作に採用しようとする人は少ない。それは部分的な一般化にすぎないからであろう。ヒンズー族は『ヴェーダ』がこうこう言っているから、われわれはこれとかあれとかをしなければならぬと言っている。しかしクリスチャンは『ヴェーダ』の権威に服従する気にはならない。クリスチャンは『聖書』がそう言っているから、あなたがたはこれをしなければならぬが、あれをしてはならないと言う。それはバプティズムを信じないものには束縛力を有しないだろう。しかしわれわれは、これら種々異なった根拠のすべてをとりいれるに足るほど大きい理論を有しなければならぬ。あたかも人格的な造物主を頭から信じてかかる何百万の人々がいるのと同様に、一方には、そんな観念は自分にとって十分ではないと感じ

て、一層高いあるものを求める優秀な頭脳の持主がこの世界には幾千人もいた。そして宗教がこれらの頭脳のすべてをつつみこむほど大きくない場合には、その結果、最も優秀な頭脳の持主は社会にあって常に宗教の外に立つということになった。そしてこのことは現在におけるほど、特に現在のヨーロッパにおけるほど著しく注目されたことは、いまだかつてなかった。

これらの頭脳をつつみこむには、従って、宗教が十分に広大でなければならぬ。それが主張するあらゆる事柄は理性の立場から判断されなければならない。宗教は理性の立場に従うには及ばない、と主張しなければならない理由は誰も知らない。もし人が理性の立場をとらないならば、真なる判断というものはありません。宗教の場合でも勿論のことだ。ある宗教が非常に恐ろしいことを定めるかもしれない。例えば、モハメットの宗教はモハメット教徒が彼らの宗教に属しないものをすべて殺すことを許している。それはハッキリ『コーラン』に述べられている。「異教徒がモハメット教に帰依しないなら、彼らを殺せ。」彼らは火に焼かれるか剣で斬られなければならない。今われわれがモハメット教徒に向って、それは間違っていると告げたなら、彼は当然こう訊くだろう。「あなたがたはどうしてそれがわかる。どうしてそれが善くないということを知っているのか。私の書物にはそれが善いことだと書いてある。」もしあなたがたが自分の書物のほうが古いと言うなら、仏教徒がやって来て、「私の書物のほうがもっとずっと古い」と言うだろう。そうするとヒンズー教徒がやって来て、私の書物は、なかでも一番古い、と言うであろう。だから、書物を引用することは役に立たない。われわれが比較できるための標準はどこにあるか。あなたがたは「山上の垂訓」を見よ、と言うだろう。そしてモハメット教徒たちは『コーラン』の倫理学を見よ、と答えるだろう。両者の中で、どちらが一層よいかについて誰が裁決者になるのか、とモハメット教徒は言うだろう。『新約全書』も、『コーラン』も彼らのあいだの裁決者になることはできない。そこにある独立した権威がなければならない。それは何かの書物であることはできない。ただ普遍的なあるものがそれであり得る。そして理性よりもっと普遍的なものが何かあるか。理性は十分に強力なものではないと言われてきた。それはいつもわれわれを助けて「真理」を得させるとは限らない。しばしばそれは過失を犯す。だから、その結論として、われわれが教会の権威を信じなければならぬということになる。これはあるローマン・カソリックの信者が私に言ったことだ。しかし私はその論理に納得がゆかなかつた。それどころか、私はこう言わなければならない。もし理性がそんなに弱いものなら、僧侶たちの身体はもっと弱いものだろう。私は彼らの判断を受け入れる気は

ない。私は自分の理性に従うだろう。なぜなら、理性にどんな弱味があるにしても、それによって真理に達するある機会があるからだ。これに反して、その他の手段では、このような希望が全然ないからである。

それゆえ、われわれは理性に従うべきであり、理性に従ってなんらの種類の信仰にも達しない人々に対しても同情すべきである。なぜなら、人類は誰かの権威に基づいて二億の神々を盲信するよりも理性に従って無信論者になるほうが一層よいからである。われわれの要求するものは進歩であり発展であり実現である。いかなる理論もいまだかつて人々をより高くしたことはない。書物の山を積んでも、われわれをより純潔になるように助けることはできない。唯一の力は実現のなかにあり、それはわれわれ自身の中に存し、思惟することから現れて来る。人々をして思惟せしめよ。一塊の土は決して思惟しない。しかし、それはあくまで土のかたまりのままである。人間の光栄は彼が思惟するものだということ。

思惟するのが人間の性質であって、その点で動物と違っている。私は理性を信じ、理性に従う。私は権威の害悪をいやというほど見てきたものだ。なぜなら、私は権威の極端にまで達している地方で生れたからだ。

ヒンズー教徒は、創造は『ヴェーダ』から出て来たと信じている。どうしてあなたがたは牛がいることを知りますか。牛という言葉が『ヴェーダ』のなかにあるからです。どうしてあなたがたは外部に人間がいることを知りますか。人間という言葉が『ヴェーダ』のなかにあるからです。もし、その言葉がそこになかったならへ外部の人間などいなかっただしょう。これが彼らの論法だ。至上無限の権威だ！そして私がそれを学んだとき、そのことは学ばなかった。しかし若干の最も有力な精神の持主たちは、そのことをとりあげていたし、そのまわりに素晴らしい論理的理論を展開していた。彼らは理論的に推し究めて、そこに——哲学の全体系が聳えたった。そして数千人の最も輝かしい知性が数千年の年月のあいだ、この理論の完成に捧げられた。権威の力は、こんなものであった。そしてそれのもつ危険も大きいのだ。それは人間性の成長を妨げている。そしてわれわれは成長を必要とすることを忘れてはならない。すべての相対的な真理においてすら、真理それ自、身よりも、われわれは訓練を必要とする。それがわれわれの生活である。

一元論的理論は、われわれの考えうるすべての宗教理論のなかで最も合理的であるという長所を有している。あらゆる他の理論、偏頗で小さくて人格的であるような神の概念はすべて合理的でない。しか

も一元論は、こういう偏頗な神の概念をば多勢の人々に必要なものとして抱擁するという偉大さを有している。ある人々は、この人格的説明は非合理的だと言う。しかし、それは慰める働きがある。彼らは慰める宗教を要求する。そしてわれわれはそれが彼らにとって必要であることを理解する。真理の明るい光は、この生において極めて少数の人々しかこれに耐えることができない。これを立て通すものは更に少ない。だから、この安易な宗教の存在が必要になる。それは多くの魂を助けて、より善き魂に向上させる。その円周が非常に制限された小さい精神、それを築きあげるには小さいものを必要とする精神は、決して思想のなかに高く<sup>。</sup>冲ることを敢えてしない。彼らの概念は、たといそれがちつぽけな神々や象徴のそれであつても、非常に善良で彼らにとって役にたつ。しかし、あなたがたは非人格的なものを理解しなければならぬ。なぜなら、ただこれのなかで、これを通じてのみ、これらの他のものが説明できるからである。例えば人格神の観念をとりあげてみよ。非人格的なものを理解し信仰する人——例えば、ジョン・スチュワート・ミル——は、人格神は不可能で、証明ができないと言うかもしれない。私はその人とともに、人格神を論証することはできないということを許す。しかし彼は非人格的なものについて人間の知性の到達しうる最高の解釈である。絶対的なもののいろいろ違つた解釈でなくて、宇宙はその他の何であろうか。それはわれわれの前にある一冊の本のようなものだ。みんながめいめい、それを読むために彼の知性をもってきた。各人が自分のためにそれを読まなければならない。すべての人間の知性に共通なあるものがある。だから、ある種の事物は人類の知性にとって同一であるように見える。あなたがたと私が一脚の椅子を見るといふことは、われわれの精神の両方に共通なあるものがあるということを示す。別の感覚をもつた生物がやってきたと仮定せよ。彼はその椅子を全然見ないであろう。しかし類似した構造の生物はすべて同じものを見るであろう。かように、この宇宙はそれ自身として絶対的なもの、不変的なもの、理性体である。そして感性体（現象）は、その解釈をなしている。なぜなら、あなたがたは、すべての現象（感性体）は有限だということを見出すだろう。われわれが見たり触れたり思惟したりできるあらゆる現象は有限であつて、われわれの知識によつて制限されている。われわれが神について考えるような人格神は事実上、一つの現象である。因果関係という観念そのものがただ現象の世界にのみ存在する。この宇宙の原因としての神は、当然、制限されたものとして考えられなければならない。しかも彼は同じ非人格的な神である。われわれが見ていたこの宇宙そのものは、われわれの知性で解釈された、同じ非人格的な存在である。宇宙における實在

が何であろうとも、ことごとく非人格的な存在である。そしてその形式や概念はわれわれの知性がそれに与えたのだ。このテーブルにおける実在的なものが何であろうとも、ことごとく、そういう存在者である。そしてテーブルの形式やその他のいろいろな形式は、われわれの知性によって与えられる。

1 ジョン・スチュワート・ミル (John Stuart Mill 1806-73) 英国の哲学者で政治学者・経済学者。帰納法論理学の集大成者としても有名である。ヴィヴェーカーナンダは学生時代に研究したと思われる。『論理学体系』(A System of Logic, Ratiocinative and Inductive 1843) 『経済学原理』(Principles of Political Economy 1848) 『自由論』(On Liberty 1859) 等の大著で知られている。(訳者註)

さて、例えば運動は、現象的なものの必然的付属態であって、普遍的なものの性質とするわけにはゆかない。宇宙の内部のあらゆる小さい断片、あらゆる原子は、不断に変化と運動の状態にある。だが、全体としての宇宙は変化し得ないものである。なぜなら、運動や変化は相対的なものであるからだ。われわれはただ運動しないあるものと比較して運動するあるものを考えることができる。運動を理解するために二つのものがなければならぬ。宇宙の大塊全体を一つの単位にとれば運動することはできない。何に対してそれは運動するのだろうか。変化するということができない。何に対して変化するのだろうか。そこで全体は絶対的なものである。しかしそのなかで小さい部分はそれぞれ不断に変化流動の状態にある。それは変化し得ないものであり同時に変化し得るものである。非人格的なものにして人格的なもの、その統一である。これが宇宙について、運動について、神について有するわれわれの考え方である。そしてこれが「汝はそれである」ということの意味である。かようにして、非人格的なものが人格的なものを追放することなく、また絶対的なものが相対的なものを引きずりおろすことなく、ただわれわれの理性と心情とを十分に満足させるように、それを説明してくれるということがわかる。人格神と、宇宙に存在する一切のものとは、われわれの精神によって見られた同じ非人格的存在である。われわれがわれわれの精神やわれわれの小さい人格を脱却するだろうとき、われわれは、それと一つになるであろう。これが「汝はそれである」ということの意味である。われわれはわれわれの本当の性質、絶対的なものを知らなければならぬからである。

有限的な、顕現された人間は、自分の根源を忘れて、自分自身を全然分離したものと考える。われわれは人格化され個別化されたものとして、おのが実在性を忘れる。そして一元論の教訓は、われわれがそれらの差別を放棄することではない。だが、それらが何であるか理解することを学ばなければならぬということだ。われわれは実在性においては、かの無限なるものである。そしてわれわれの人格はそ

れぞれ、この無限なる実在が自己を顕現してゆくための多くの通路チャンネルを代表している。われわれが進化と呼ぶところの変化の全集団は、靈魂がその無限のエネルギーをいよいよますます顕現しようとするところによって惹き起したものである。われわれは無限なもの、この側面ではどこにも立ち停ることはできない。われわれの力や祝福や知恵は無限なものなかに成長してゆかないわけにはゆかない。無限なる力と存在と祝福とはわれわれのものである。そしてわれわれは、それらを獲得するには及ばない。それらはわれわれ自身のものだ。そしてわれわれは、ただそれを顕現しなければならないだけだ。

これが一元論の中心観念だが、なかなか理解しにくい観念だ。私の幼児時代から、私のまわりの人々はみんな弱さを教えてくれた。私は生れてこのかた、いつも弱い児だと言われてきた。今になって自分の強さを実現することは私にとって甚だ困難である。しかし分析と推理によって私は自分の強さの知識を得て、それを実現する。われわれがこの世界でもっているすべての知識は、いったいどこから来たのか。それはわれわれの中にあつた。どんな知識が外部にあるか。そんな知識はない。知識は物質のなかにはなかつた。それはいつでも人間のなかにあつた。誰も知識を創造したものはない。人間はそれを内心から引き出してくる。それはそこに横たわっている。数エーカーの地面をおおっている、あの巨大な榕樹ガジュマルの全体は、恐らく芥子種からしだねの八分の一ほども大きくないような小さい種子のなかにあつた。エネルギーの全量がすべてそこに貯えられていた。巨人的な知性が原形質の細胞のなかにたたみこまれて横たわっていることを、われわれは知っている。そして何故、無限のエネルギーがそうなつてはいけなからか。そのとおりだということを知っている。それは逆説のようにみえるかもしれない。だがそれは真実である。われわれの一人一人は一つの原形質の細胞から出て来た。われわれが有するすべての力は、そこにたたみこまれていたのだ。あなたがたはそれらが食物から来たと言うことはできない。なぜなら、あなたがたが食物を山のように高く積み重ねてみても、そこからどんな力が出て来るか。エネルギーがそこにあつた。疑いもなく潜在的にあつた。だが、ただそこにあつただけ。同様に無限の力が人間の魂のなかにある。人間がそれを知ろうと知るまいと、かかわりはない。その頭現はただそれを意識するという問題である。この無限大の巨人は、いわば、ゆっくりと目を醒ましつつある。自分の力を意識しかけて、身を起しかけている。そして彼の意識が成長するにつれて、彼の束縛が次第次第にほどけつつある。鉄の鎖が寸断寸断に千切れつつある。そして彼の無限の力と知恵の十分な意識をもつて、巨人が飛び起きて、真直ぐに突立つ日がキットやってくる。われわれはみんな一緒になつて、その光榮

ある完成の日の促進を助けようではないか。

(二八九六年十一月十七日、ロンドンにて講演)

われわれは普遍的なものについて更にここまで論じてきた。今朝、私は特殊なものや普遍的なものとの関係に関するヴェーダーンタの観念をあなたがたにご紹介してみよう。これまでわれわれが『ヴェーダ』の教説の二元論的な形式に初期の形式を見たように、あらゆる生物に、ハッキリ定義された特殊の限定された魂があった。個人各自に宿る特殊な魂について非常に沢山の理論があった。しかし主要な論争は古代のヴェーダーンティストたちと古代の仏教徒たちとのあいだに行なわれた。前者は個人の魂はそれ自身で完全なものと信じ、後者はかような個人の魂の存在など全面的に否定した。いつか私が申し上げたように、あなたがたがヨーロッパで実体と属性に関して行なわれた論争とどうやらよく似た論争である。一方は属性の背後には、それらの属性が属する実体としてのあるものがあると主張し、他方はもろもろの性質はそれだけで生きられるから、かような実体など不必要なものとしてその存在を否定する。魂についての一番古い理論は、もちろん「私は私である」という自己同一性の論証に基づいている。昨日の私は今日の私である。そして今日の私は、明日の私であろう。身体に発生している一切の変化にかかわらず私は私が同じ私であると信じている。これは制限された、しかも完全に充足した個人的な塊を信じている人々にとっての中心論証であったようにみえる。

一方において、古代の仏教徒たちはこんな仮定の必要を認めなかった。彼らは、われわれが知っている一切、われわれが知りうる一切は単にこれらの変化だけだという論証を提出した。変化不能で変化していない実体を想定することは単に余計である。たとい、そんな変化不能のものがあつたとしても、われわれはそれを理解することができないだろう。言葉のどんな意味でもそれを認識することができないはずである。同じ論争が今日ヨーロッパにおいて一方では宗教家や観念論者、他方では近代の実証主義者や不可知論者のあいだに行なわれているのを発見するであろう。一方はある変らないものがある（その最近の代表者はハーバート・スペンサー<sup>1</sup>）。そして変化しないあるものの瞥見をつかまえると信ずる。そして他方は近代のコムト一派や近代の不可知論者によって代表される。あなたがたのなかで、二、三年前にハーバート・スペンサーとフレデリック・ハリソン<sup>2</sup>とのあいだに行なわれた論争に興味をもつた方々は、一方は変化するものの背後にある実体があるという主張に立ち、他方はそのような仮定の必要を否認するというので、同じ古い難問であつたことに気がつかれただろう。一つの派は言う、われわれは変化しないあるものを考えることなしには変化を考えることができない、と。他の派はそれは余計

なものだという論証を提出する。われわれはただ変化しつつあるあるものを考えることができる、そして変化しないものについては、知ることもできないし、触れることも感覚することもできない」と。

- 1 ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820-1903) 英国の哲学者。進化論を哲学化した。彼の 畢生の 大著『総合哲学』は序論的な第一巻『第一原理』(First Principle 1860)に始まり、『生物学原理』(Principles of Biology 1864-67) 『心理学原理』(Principles of Psychology 1870-72) 『社会学原理』(Principles of Sociology 1876-96) 『道徳原理』(Principles of Morality 1879-93) 等によって知られた。(訳者註)
- 2 フレデリック・ハリソン (Frederick Harrison 1838-1923) 英国においてフランス人オウギュスト・コムトの実証哲学を紹介し信奉した学者。(訳者註)

インドでは、この大問題は非常に古い時代にはその解決を見なかった。なんとなれば、われわれは諸性質の背後にあって性質でないある実体を仮定することは決して実体化されなかったことを見ているからである。いや、自己同一性と記憶からの論証——私は昨日の私である、それを私が記憶するからである、それゆえ、私は継続するものである——という論証すら実体化することはできない。よく普通に持ち出される地口は単なる言葉の迷わしにすぎない。例えば、「私はする」「私は行く」「私は夢見る」「私は眠る」「私は動く」などという文章の長い系列を人がとりあげるとする。する、行く、夢見るなどはそれぞれ変っているが、引続いて残っているのはその「私」であったという主張を発見するであろう。そこで彼らは「私」は常住のあるもの、個人自体であるという結論を引き出す。しかしすべてこれらの変化は身体に属している。ちょっと見かけでは、これは非常にもっともらしく明白であるが、単なる言葉の遊戯に基づいている。その「私」と、すること、行くこと、夢見ることは黒と白に区別されるかもしれない。しかし誰も心の中でそれを区別することはできない。

私があるものを食べているとき、私は食べているとして自分を考える——私は食べることに同一になっている。私が走っているとき、私と走ることとは二つの別物ではない。かようにして、個人的同一性からの論証は、あまり有力なものには見えない。もう一つの記憶による論証も弱い。私があることの同一性が私の記憶によって代表されるならば、私が忘れてしまった多くの事柄はその同一性からは失われている。そしてわれわれは、人々がある種の条件のもとでは彼らの過去の全部を忘れてしまうことを知っている。気が狂った多くの場合、人間は自分のことをガラスでできていると考えたり動物であると思うだろう。もしその人間の存在が記憶に依存するとすれば、彼はガラスになったわけである。そうでないとすれば、われわれは自我の同一性を記憶というような薄弱な実体に依存せしめることはできない。そんなわけで、限定はされていても完全に継続する同一性としての魂はその性質から分離したものと

て確立することはできないということがわかる。われわれは一束の性質が付加された、狭められ限定された存在を確立することはできない。

他方において、古代の仏教徒たちの論証は一層有力であるように見える。われわれは一束の性質のあなたにあるものは知らないし、また知ることはできないというのだ。彼らに従えば、魂は感覚と感情と呼ばれる性質の一束からできている。そんなもののかたまりが爽と呼ばれるもので、このかたまりは絶えず変化しつつある。

アドヴァイタ派（一元論者）の靈魂説はこの二つの見解を調和させる。アドヴァイタ派の見解では、もろもろの性質から分離したものとしてみれば、実体を考えることができないのがほんとうである。われわれは変化と不変化とを同時に考えることはできない。そんなことは不可能であろう。しかし、実体であるところのそのものは性質である。実体と性質は二つのものではない。変化的なものとして現れつつあるのは不変化的なものである。宇宙の不変化的実体は、それから分離したあるものではない。理性体は現象と相違したあるものではない。その理性体そのものが現象になっているのだ。不変的であるような塊がある。そしてわれわれが感覚や知覚と呼ぶところのもの、いな、身体さえも別の見地から見られた魂そのものである。われわれは身体と魂などをもっていると考える習慣になっている。しかしほんとうを言うと、ただ一つしかないのだ。私が自分を身体として考えるとき、私はただ身体である。私が他のあるものだと言うのは、無意味である。そして私が自分を魂として考えるとき、身体は消え失せる。そして身体の知覚は残らない。身体の知覚が消え失せるのでなければ誰も自我の知覚を得ることはできない。もろもろの性質の知覚が消え失せるのでなければ、誰も実体の知覚を得ることはできない。

アドヴァイタ派の古いたとえにある繩を蛇と間違えた話はその点をもう少しよく説明するかもしれない。ある人が繩を蛇と間違えると、繩は消えていた。そしてそれが繩とわかったとき、蛇は消えて、繩だけが残った。二重の存在、三重の存在という観念は不十分な与件に基づく推理から生ずる。われわれはそんなものについて書籍で読んだり、話に聞いたりする。それがため実際に靈翼と肉体という二重の知覚を実際にもっているという妄想に陥ってしまう。しかし、そんな知覚は実際には決して存在しない。知覚は身体のそれかまたは魂のそれかどちらかである。それを証明するための論証は必要でない。あなたがたは、ご自分の精神のなかで、それを確かめることができる。

あなたが自身を魂として、肉体を脱却したあるものとして考えるように試みよ。あなたはそれがほとん

ど不可能であることを発見するであろう。そしてそれができる少数の人々は自分を魂として実現するときに当っては、身体の観念をもたないことを発見するであろう。特別の場合に、深い瞑想とか自己催眠とかヒステリーとか薬品とかによって異常の精神状態になった人々のことをあなたがたは聞いている。いや恐らく見ている。彼らの経験からして、あなたがたに認められるのは、彼らは内面的なあるものを知覚しつつあったとき、外面的なものが彼らにとって消えてしまっているということである。このことは、何でも存在するものは一つだということを示す。その一つがこれらいろいろ異なった形式で現れつつある。そしてすべてこれらいろいろの異なった形式が原因と結果の関係を発生せしめる。原因と結果との関係は、進化の一つである——一が他となるなどなどというのだ。往々にして原因はいわば消え失せる。そしてその跡に結果を残す。もし魂が肉体の原因であるならば、魂は、いわば、その時間の経過で消え失せ、肉体が残る。そして肉体が消え失せるとき、魂が残る。この理論は例の仏教徒たちの論証に該当する。それは、かの肉体と魂の二元論の仮定に対して、その二重性を否認し、実体とその諸性質とはいろいろ異なった形式で現れている同一物だということを示すことによって水平化された。

この不変なるものの観念はただ全体についてのみ打ち立てることができるが、部分については決して打ち立てることができない。部分の概念こそは変化や運動の概念から来る。あらゆる限定されたものは変化的だから、われわれが理解し知ることができる。全体は不変的でなければならぬ。変化が可能になるために比較すべきものが、そのほかに存在しないからである。変化は常にある変化しないもの、または比較的により変化の少ないあるものと関連している。

アドヴァイタ派に従えば、それゆえ、普遍的で変化することのない不滅なものとしての魂はできるときり深く証明することができる。難点は部分的なものについてであろう。古い二元論的な理論がわれわれに根強く残っていて、大手をふって通用しているのに対してどうすればよいか——限定された小さい個人的な魂に対する信仰を。

われわれは全体に関連して不死であることを見た。しかし難点は、全体の部分としてもやはり不死であることを望むということにある。われわれは無限であること、それがわれわれの真実の個体であることを見た。しかし、われわれはこれらの小さい魂がそれぞれ個体であることを欲する。われわれの毎日の経験で、これらの小さい魂が個体であることを見出す、ただしそれが絶えず成長しつつある個体であるという点を保留して。だが、その場合、それらはどうなるか。それらは同じであって、しかも同じで

ない。昨日の私は今日の私であつて、しかもそうでない。いくらか変つてゐる。さて、すべてこれらの変化の真中に変化しないあるものがあるという二元論的概念を離れて、最も近代的な概念、進化論のそれを採用することによつて、われわれは「私」が絶えず変化しつつ拡大する本体であることを発見する。

もし人間が軟体動物の進化したものということがほんとうだとすれば、軟体動物の個体は人間と同じであつて、ただそれはおおげさに拡大したものでなければならぬ。軟体動物から人間に至るまで無限に向う継続的な拡大発展があつた。それゆゑ、限定された魂は無等大の個体に向つて継続的に拡大発展する個体と称することができる。完全な個性には無限なものに到達したときにのみ到達することができる。だが、無限なるものこちら側ではそれは継続的に変化しつつ成長する人格である。アドヴァイタ派のヴェーダーンタ体系の注目すべき特徴の一つは先行する体系を調和することである。多くの場合、それは哲学を益すること大であつた。ある場合にはそれを害したこともある。わが古代の哲学者たちは、あなたがたのいわゆる進化論を知つてゐた。成長は一步一步漸層的であるというのだ。そしてこの認識が彼らをば、すべての先行する諸体系を調和するように導いた。かようにしてこれら先行する諸概念は一つも廃棄されなかつた。仏教的信仰の過失は、この継続的拡大的成長の能力も知覚も有しなかつた点であつた。この理由によつて、それまで理想に向つて進められていた歩みと自己を調和、させようという企図を決してしなかつた。それらを用有害なものとして廃棄してしまつた。

宗教におけるこの傾向は一番有害である。ある人間が新しい、より善い観念を得る。そのとき、自分が見棄ててきた諸観念をふりかへつて見る。そして直ちに、それらが誤つていて不必要だと断定してしまふ。彼の現在の立場から見れば、それらがどんなに粗野に見えようとも、彼にとつて甚だ有用であつたので、彼が現在の境地に達するために必要であつたことを思つてみないのだ。われわれは誰でも、まづ粗野な観念で暮らし、それから利益を得てから一層高い標準に達するという類似の仕方成長しなければならぬのだ。それゆゑ、アドヴァイタ派は一番古い理論と友好的である。それに先行した二元論や諸体系はアドヴァイタ派に採用されている。ただそれをヒイキにするという仕方ではない。それらがみな同じ真理の真実の顕現であつて、ことごとくアドヴァイタ派が到達したと同じ結論に導くという確信をもつてである。

すべてこれまで人類が通過しなければならなかつた種々異なつた段階は、呪いをもつてでなく、祝福をもつて、保存さるべきである。それゆゑ、すべてこれらの二元論的体系は決して排斥されたり投げ出

されたりされはしなかった。ヴェーダーンタ哲学のなかに、そっくり守られてきた。個人の限定された、しかもそれ自身で完全な魂という二元論的概念がヴェーダーンタのなかにその場所を見つけている。

二元論に従えば、人間は死んで他の世界へ行く、などという。そしてこれらの観念はヴェーダーンタのなかに原形のまま守られている。なぜなら、アドヴァイタ体系における成長の承認によつてこれらの理論はただ真理の部分的な見方を代表するということを許して、それぞれ固有の場所が与えられるからである。

二元論の立場から、この宇宙はただ物質または勢力の創造とみなされうる。ただ一定の意思の遊びとみなされうる。そしてその意思がまたただ宇宙から分離したものとみなされうる。そこで、このような立場から、人間は自分が身体と魂との二元的性質からできていることを見なければならぬ。そしてこの魂は限定されているけれども、個体的にそれ自身完全である。かような人間の不死や来世に関する諸観念は必ずその魂の観念と調和するであろう。これらの様相はヴェーダーンタのなかに保存されてきた。だから、よく知られた二元論の諸観念のいくつかをあなたがたに紹介する必要がある。この理論に従えば、われわれは、もちろん、一つの身体をもっている。そしてこの身体の背後に彼らが細身と呼ぶところのものがある。この細身もまた物質からできている。ただ非常に微妙繊細な物質なのだ。それはすべてのわれわれのカルマ、すべてのわれわれの活動や印象をいれる容器であつて、それらすべては目に見えるかたちに跳り出ようと待ちかまえている。われわれ が考えるあらゆる思想、われわれがなすあらゆる行動は一定の時間の後、微細なものとなり、いわば種子の形式をとつて潜勢的なかたちで細身のなかに住む。時がたつと、再び芽を出してその結果をつける。これらの結果が人間の生活を条件づける。かようにして人間は彼自身の生活をつくりあげる。人間は彼自身のためにする事柄を除いてはなんら他の法則には束縛されない。われわれの思想、われわれの言葉や行為は、善かれ悪しかれ、われわれのまわりに投げかける網の糸である。一度われわれが一定の力を動かすと、その全部の結果をとらなければならぬ。これがカルマの法則である。微妙な身体の背後にはジヴァ (Jiva) すなわち人間の個体的な魂が住んでいる。この個体的な魂の形状や大きさについてはいろいろの議論がある。ある人々に従えば、原子のように非常に小さい。他の人々に従えば、それほど小さくはない。また別の人々に従えば、それは非常に大きい、などなどである。このジヴァは、あの宇宙の実体の一部分であつて、やはり永遠である。始まりもなく存在しつづけており、終りもなく存在しつづけるだろう。それは純潔をその本性とす

るすがたを顕現するために、これらの形式の一切を経過しつつある。思想についても同様である。そのジヴァを拡大し、その本性を顕現するように助ける活動や思想はすべて善である。最も粗野な二元論者から最も進歩した非二元論者に至るまでインドで一般に共通して支持される理論は、魂の可能性や力のすべてがそれ自身のなかにあつて、外部の源泉から来るものではないということである。それらは潜在的な形式で魂のうちにある。生涯の働き全体は単にこれらの潜在的な力を顕現することに向けられている。

彼らはまた生れかわりの理論をもっている。この身体が崩壊したあとでジヴァは別の身体をもつであろう。それが崩壊してしまうと、また別の身体をもつという具合に、この世界か、またはある外の世界で続いてゆく。しかし、この世界は、われわれの目的にとってすべての世界のなかで最善の世界と思惟されるので、優先的地位が与えられている。外の世界は不幸というものが非常に少ない世界と考えられ、しかし、まさにその理由によって、そこでは、より高い物事を考える機会も少ないと彼らは論証する。この世界は若干の幸福と沢山の不幸をかかえていて、ジヴァは時々、いわば目を覚まされ、自己を解放することを考えつく。しかも、ちょうどこの世界の大金持の人々がより高い物事に考え及ぶ機会が一番少ないように、同様に天国におけるジヴァは進歩の機会をもつことが少ない。なぜなら、その条件が金持の場合と同じで、ただ一層強度であるからだ。それは非常に微妙繊細な身体を有していて、病氣といるものを知らず食ったり飲んだりする必要というものがなく、すべての欲望が満足せしめられる。ジヴァはそこで暮らし、享樂また享樂の生活を送り、自分のほんとうの性質を忘れてしまう。そこにはまだある一層高い世界が存在する。一切の享樂にかかわらず、それ以上の進化が可能であるような世界が存在する。ある二元論者たちはもろもろの魂が永久に神とともに暮らすであろう最高の天国を最後の目標と考えている。彼らは美しい身体を有する。病氣も死もその他どんな災患も知らない。彼らの欲望は何でも満足せしめられる。彼らのあるものは時たまこの地上に戻つて来て、別の身体をとつて、人類に神への道を教えるであろう。そしてこの世界の偉大なる教師たちは、この種々の人々であった。彼らはすでに自由であった。そして最高層で神とともに暮らしつつあった。しかし苦しんでいる人類に対する同情と愛があまり大きいので、人間に天上への道を教えるために再び降下して生れかわつたのだという。

もちろん、われわれはこれが最後の目標でも理想でもあり得ないというアドヴァイタの主張を知つて

いる。身体がないことが理想でなければならない。理想は有限であることはできない。無限なるものに届かないようなものは何でも理想であることはできないし、無限なる身体などというものは有り得ない。そんなものは不可能であろう。身体は限定から生じたものだからである。無限なる思想というものも有り得ない。思想は限定から生じたものだからである。われわれは身体を超越しなければならないし、思想をも超越しなければならないと、アドヴァイタは言う。そしてアドヴァイタに従えば、この自由は獲得さるべきものではなく、すでに最初からわれわれのものなのだということを、われわれは見ている。ただわれわれはそれを忘れて、それを否認しているのだ。完成は獲得さるべきものではなく、すでにわれわれの中にある。不死と浄福は獲得さるべきものではなく、われわれはすでにこれを所有している。それらはしよつちゅう、われわれのものであったのだ。

もしあなたがたが敢えて、自由だ、と宣言するならば、この瞬間にあなたがたは自由である。もしあなたがたが束縛されていると言うなら、束縛されたままにいるだろう。これこそアドヴァイタが大胆に宣言するところである。私はあなたがたに二元論者の観念をお話した。あなたがたは、どちらでも好きな方をとることができる。

ヴェーダーンタの最高の理想は理解することが極めて困難である。人々はそれに関して常に論争している。そして最大の困難は、彼らがある観念を把握すると、他の観念を拒否し攻撃するということである。あなたがたは自分に適したものをとりあげよ。そして他人には他人の必要とするものをとりあげさせよ。もしあなたがたがこの小さい個性にしがみつきたい、この限定された人間の身の上にしがみつきたいと望むなら、そこにとどまって、すべてのこれらの欲望をもちつづけ、それに満足して好い気になつてしまえ。もしあなたがたの人生経験がこれまで非常に善良で立派であつたなら、好きなだけ長くそれを維持したまえ、あなたがたはそうすることができる。あなたがたはあなたがた自身の運命のつくり手であるからだ。何もものもあなたの人間性を放棄するように強制することはできないからだ。あなたがたはお好きなだけ長く人間であるだろう。誰もあなたを妨げることはできない。もしあなたがたが天使になりたいなら、天使になれるだろう。それが法則である。しかし天使になりたくないような人々だつてあるだろう。あなたがたはなんの権利があつてそれを恐ろしい想念だと思ふのか。あなたがたは百ポンドなくするのが恐いかもしれない。しかしこの世で持っているすべての金をなくしても瞬きもしないような人々だつてあるだろう。そんな人間はこれまでもいたし、今だつている。なぜ、あなたがた

は強いてあなたがたの標準に従って彼らを判断するのか。あなたがたはあなたがたの限定されたものにしがみつく。そしてこれらの小さい世俗的な観念があなたがたの最高の理想であるかもしれない。あなたがたは彼らに歓迎され、あなたがたの望みどおりになるだろう。しかし、真理を認め、これらの限定されたものごとに安堵することのできない人々、これらのものごとを卒業してしまつてその外に出てゆこうと欲する人々だつてあるだろう。彼らにとつて、この世界は、そのすべての享樂を含めてどろんこぬかるみにすぎないのだ。なぜ、あなたがたは、あなたがたの観念にまで彼らを縛りつけることを欲するのか。あなたがたはこういう傾向を直ちに離れなければならない。各人に一つの場所を認めたまえ。

私は以前に、南洋の群島の颱風に捉えられたある船の物語を読んだことがある。『イラストレーテッド・ロンドン・ニューズ』にその絵があつた。暴風雨のなかを進む一隻の英国船のほかは、すべての船が難破していた。その絵は、溺れようとする人々が沈みかけた船の甲板に立ち、暴風雨を突いて進む人々を激励しつつある光景を示していた。そのように勇敢で寛大であれ。あなたがたのいるところへ他の人々を引きずりおろすな。もう一つの馬鹿な意見は、もしわれわれが小さい個性を失えば、道徳もなくなる、人間性への希望もなくなるという意見である。あたかも、あらゆる人が始終人類のため死んでゆきつつあつたかのような話だ！ 何たることだ！ もしあらゆる国に、人類に対して善をすることを本当に欲する男と女が二百人もあつたなら、千年未来幸福時代<sup>2</sup>が五日間でやってくるだろう。いったい人類のためにどんなにわれわれが進んで死につつあると知っているのか。これらはすべて大言壮語だ。それ以外の何ものでもない。世界の歴史は、自分の小さい個性を決して想つたことのない人々が人類の最大の恩人であつたということ、男や女が自分のことを思えば思うほど、他人のためにつくすことがそれだけでできなくなるということを示す。一つは非利己心であり、他は利己心である。小さい享樂にしがみついて、こういう事物の状態の継続や繰り返しを望むことは、全くの利己心である。それは真理に対する欲望などから起るものではない。その発生は他のものに対する親切においてではなく、人心にひそむ全然の利己心においてであり、「私はあらゆるものを持ちたい。他人のことなどかまっちゃいられない」という観念においてである。私の見るところは、このとおりである。自分たちの百の生命を投げうって一匹の小さい動物に利益を与えることができるならば、喜んでそうしたのであろうところの古代の偉大な予言者や賢者のあるもののような人々に私はこの世界でもっと多く逢いたいものだ。道徳について話す、他人に善をする事について話すなんて！ 現在の愚かしい話だ！

1 英国軍艦カリオペ (H.M.S. Calliope) とサモア (Samoa) における米国軍艦。(原著編纂者註)

2 千年未来幸福時代 未来に完全円満な幸福の実現する時代。『生きる秘訣』(日本教文社刊) 一三九ページ註

参照。(訳者註)

私は喬答摩・仏陀ゴータマ ブッダのような道德家に逢いたいものだ。仏陀は人格神や人格的靈魂を信じなかったし問題にできなかった。完全な不可知論者であった。しかも誰のためでも自分の生命を投げ出す覚悟があった。生涯すべてのもののために働き、ただすべてのものことしか考えなかった。実に彼の伝記作者が彼の誕生のことを書いて仏陪は大衆の利益のために大衆に対する祝福として生れたと言っている。彼は自分自身の救済のための瞑想をしに森林に行きはしなかった。彼はこの世が燃えていると感じ、逃げ路を見つけなければならぬと思った。「なぜ、この世にはこんなに多くの不幸があるのか。」これが彼の全生涯を支配した唯一の問題であった。あなたがたは、われわれが仏陀ほど道德的だと思ふか。

一人の人間は利己的になればなるほど、それだけ不道德である。そして人種についても同様である。自己に縛られた人種は世界中で最も残酷であり、最も兇悪である。アラビアの予言者が創設した宗教ほど、この二元論に執着した宗教はまだない。あれほど血を流した宗教、あれほど他人に残酷であった宗教は、ほかになかった。『コーラン』には、その教えを信じない人間は殺すべきだという教説がある。そんな人間を殺すのは一種の慈悲なのだ。美しい天女たちやあらゆる種類の官能の享樂がある天国へ昇る一番確實な道は、これらの不信者を殺すことである。かような信仰の結果として起る流血事件を思え！

キリストの宗教には残酷性は少なかった。キリストの純粹な宗教とヴェーダーンタのそれとの間の差異は極めて僅小である。あなたがたは、そこに唯一性ユニクスの觀念を発見する。しかしキリストも人々につかまえられる手に触れ得るあるものを与えるために、そして最高の理想に彼らを導くために、彼らに二元論的觀念を説教した。「天にましますわれらの父」を説教した同じ予言者が「私と私の父は一つである」とも説教した。キリストの宗教にはただ祝福と愛があった。粗野な風潮が忍びこむや否や、アラビアの予言者の宗教と大差のないあるものに墮落した。それは実に粗野であった。——小さい自己のための闘争、この「私」への執着。それはこの生涯だけでなく、死後の継続に対する願望においてもだ。これを彼らは非利己心と宣言し、これを道德の根底と宣言する。いやはや、これが道德の根底であるなどは！ 実に奇妙なことに、もっとよく知っているはずの男や女すら、もし小さい自我が消えたら一切の道德が破壊されると思っている。そして小さい自我が破壊されてこそ道德が成立できるという觀念に対しては吃驚する。すべての安寧、すべての道德的善の合言葉は「われ」ではなく「汝」である。天国があるか地獄があるかと

誰が思いわずらうのだ。靈魂があるかないかと誰が思いわずらうのだ。不変なものがあるかないかと誰が思いわずらうのだ。ここに世界がある。それは不幸に満ちている。仏陀がやったように、そこへ出て行って、それを軽減するように努力せよ。然らざれば、その企てに死ねよ。あなたがた自身を忘れよ。あなたがたが人格神論者だろうと無神論者だろうと、あなたがたが不可知論者だろうとヴェーダーンティストだろうと、クリスチャンだろうと、モハメット教徒だろうと、これは学ぶべき第一の課題である。すべてのものにとって明自な唯一の課題は、小さい自己の破壊であり、真実の自己の確立である。

二つの勢力が平行線をなして並んで働いてきた。一つは「私」と言う。もう一つは「私でない」と言う。その顕現は人間にあってだけでなく、禽獣のなかにもある。禽獣のなかだけでなく、最も小さい蚯蚓のなかにもある。人間の暖かい血のなかに牙をつきさす雌虎でも、彼女の子供を守るためには自分の生命を棄てるだろう。同胞人間の生命をとることをなんとも思わぬ最も墮落した人間でも、彼の餓えかけている妻や子供を救うためには、たぶん何のためらいもなく、自己を犠牲にするであろう。かように生物界には、この二つの力が相並んで働きつつある。あなたがたがその一つを見出すところには、もう一つをも見出す。一つは獲得であり、もう一つは放棄である。一つは取り、一つは与える。最低のものから最高のものまで全宇宙はこの二つの力の運動場である。それはなんらの論証をも必要としない。それは誰にとっても明白である。

いかなる派閥といえども、この宇宙の業績や進化の全体をばこれら二つの勢力の一方——競争と戦闘——だけに基づけるなんの権利があるか。この宇宙の働きの全体をば情欲と闘争、競争と戦闘に基づけるなんの権利があるか。それらが存在していることは、われわれも否定しない。しかし、もう一つの力の働きを否認する権利が誰にあるか。愛、この「私でないもの」、この放棄が宇宙における唯一の積極的な力であることを誰か否定することができるか。ほかの一つは愛の力の誤った使用にすぎない。愛の力が競争をもたらす。競争のほんとうの発生は愛の中にある。悪のほんとうの発生は非利己心の中にある。悪の創造者は善である。そしてその目的はやはり善である。それはただ善の力の方向を誤ったものである。他人を殺す人間はたぶん、自分の子供に対する愛によって、そうするように動かされたのだろう。彼の愛はその小さい赤ん坊に限定されているのだ。宇宙における他の何百万の人類を除外するようになっていくのだ。しかも、限定されていても限定されていなくても、それは同じ愛である。

かようにして全宇宙の推進力は、どんな仕方でも顕現されるにしても、例の一つの不思議なもの、非利己

心、放棄、愛である。存在における唯一の生きた力、真実の力である。それゆえ、ヴェーダーンティストはその唯一性<sup>ワンネス</sup>を主張する。われわれは宇宙の二つの原因を認めることができないから、この説明を固執する。もしわれわれが限定によって同じ美しい素晴らしい愛が悪または不徳であるように見えると単純に主張するならば、全宇宙が愛という唯一の力で説明されることを発見する。もしそうでないなら、宇宙の二つの勢力、一は善に他は悪、一は愛、他は憎を無条件に承認しなければならぬ。どちらがより論理的であろうか。もちろん二元勢力の理論だ。

ここで恐らく二元論に属しない事柄に移って行こうではないか。残念ながら、私はいつまでも二元論者を相手にすることはできない。私の観念は、道德及び非利己心の最高の理想が最高の形而上学的認識と手を携えて進むということ、あなたがたは倫理学及び道德を得るためにあなたがたの認識を低める必要はないということ、一方において道德と倫理学のほんとうの基礎に達するために、あなたがたは最高の哲学的並びに科学的な認識を有しなければならないということを示すにある。人間の知恵は人間の安寧幸福に背反するものではない。反対に、人生のあらゆる局面でわれわれを救ってくれるのは知恵だけである——知恵のなかに礼拝がある。われわれは、より多く知れば知るほど、それだけわれわれにとって善い。ヴェーダーンティストは言う、すべて外見上悪であるものの原因は、限定されないものを限定することである、と。小さい通路のなかに限定されて悪であると見える愛は、偶然に一方の端に出てきて神として自己を顕現する。ヴェーダーンタ派はまたこうも言っている、この外見上の悪の原因はすべてわれわれ自身の中にある、と。何か超自然的な存在を咎めるな。希望を失って意気消沈するな。誰かがやって来て助けの手をきしのべなければとても逃れることのできない場所にいるなどと思うな。そんなことはあり得ないとヴェーダーンタ派は言う。われわれは蚕のようなものだ。われわれ自身の実体から糸をこさえて繭をつむぎ出し、時の経過とともに、そのなかに閉じこめられてしまう。しかし、これはいつまでもではない。そのマユのなかで霊的な実現を發展させるだろう。そして、蛾のように自由になって飛び出して来るだろう。このカルマの網の目は、われわれが自分自身のまわりに織りめぐらしたのだ。われわれの無知のせいで、われわれが縛られているかのように感じて、助けを求めて泣きわめくのだ。しかし助けは外からは来ない。それはわれわれ自身の中から来る。宇宙におけるすべての神々に訴えて、私は 何年も泣き叫んだ。とうとう私は自分が助けられていることを発見した。しかし助けは、内から来た。そして私は自分が間違っていたことをやり直さなければならなかった。それが唯一の道である。私は自分の身のまわりにか

けていた網を切り開かなければならなかった。そしてこれをする力は内にある。私の生涯における熱望は、正しく導かれたにせよ間違つて導かれたにせよ、無駄ではなかったということ、私は善悪ともに私の過去のすべての総決算であるということ、これだけは確かである。私の生涯に沢山の間違いをしでかした。しかし、肝心な点は、それらの間違いのどれ一つとして、それがなかったら今日の私はなかっただろうと信ずる。それで、間違いをやつてきたことに十分満足している。私は決してあなたがたがお内へ帰つて思う存分、間違いをやらかせという意味ではない。そんなふうに私を誤解しないでもらいたい。しかしあなたがたがやつてきた間違いに気を腐らせるな。結局、一切はまつとうになるだろうということを知れ。それ以外ではあり得ない。なぜなら、善がわれわれの性質であり、純粹がわれわれの性質であつて、その性質は決して破壊することができないからだ。われわれの本質的な性質というものは常に同じで変らない。

われわれの理解すべき点は、こうである。われわれが間違いつか悪とか呼ぶところのものをしでかすのは、われわれが弱いからであつて、われわれが弱いのは、われわれが無知であるからだ。私はそれを間違いと呼ぶことを好む。罪という言葉は元来は甚だ善い言葉だけれども、われわれを恐れさせるような、あの臭気がついている。誰がわれわれを無知にするか。われわれ自身だ。われわれは自分の両手を目の上に当てて、暗い暗いと言つて泣いている。手をのける。そうしたら明るくなる。われわれにとって光は常に存在する。人間の魂の自家発光的な性質である。あなたがたは近代の科学者たちが言うことを聞かなかつたか。進化の原因は何か。欲望だ。動物はあることをしたいと欲する。しかし環境が好都合になつていない。そこで新しい身体を発達させる。誰がそれを発達させるのか。動物自身だ、その意思だ。あなたがたは最低段階のアミーバから発達して来た。あなたがたの意思を練磨し続けよ。そうしたらあなたがたを更により高くあげてくれるだろう。意思は全能である。もし、それが全能であるならば、なぜ私はあらゆることをすることができないのか、とあなたがたは言うかもしれない。アミーバの状態から人類に至るまでの、あなたがた自身をふりかえつて見よ。誰がその一切をつくり出したか。あなたがた自身の意思だ。それが全能であることを、あなたがたは否定できるか。あなたがたをここまで高く来るようにしたのは、あなたがたを更により高く昇つてゆくようにすることができる。あなたがたの必要とするのは、品性であり、その意思の強化である。それゆえ、もし私が、あなたがたの性質は悪である、あなたがたはある誤つた歩みをしたのだから、家に帰つて麻布をまとい灰をかぶつて一生泣いて暮らせと教えたならば、それはあなたがたの助けになりはしないだろう。だがいよいよあなたがたを弱めるだろう。そして私はあなたが

たに対して善よりも悪に向う道を指し示したことになるだろう。もしこの部屋が数千年間、闇黒にとぎされてきたとして、あなたがたが這入って来て「おお闇よ」と言って泣いたり悲しんだりし始めたとするれば、闇は消え失せるだろうか。マッチをすれ。そしたら一瞬間で明るくなる。「おお、私は悪いことをした。沢山の間違いをしでかした」と一生くよくよ思いつづけたら、あなたがたに何か役にたつだろうか。われわれにそんなことを言うてもらうために聖霊など要らない。あかりをもって来い。そしたらそんな悪は一遍に消し飛んでしまう。あなたがたの品性を築きあげよ。そしてあなたがたの真実の性質を顕現せよ。自ら光を発するもの、輝きわたるもの、永久に純潔なものを顕現せよ。あなたがたの出逢うすべてのものなかに、それを呼びませ。こいねがわくば、われわれは人間のなかで最も下劣なものなかに、その内部に真実の自己を見ることができるよう、そして彼らを軽蔑することのかわりに、「起ちあがれ、汝、光を発するものよ、起ちあがれ、汝、常に純潔なるものよ、起ちあがれ、汝、生れることも死ぬこともないものよ、全能なるもの起ちあがって汝の真実の本性を顕現せよ。汝のいまのちっぽけな顕現は汝に相応わしくないのだ」と言いることができるような境地に、われわれのすべてが達することを私の念願とする。これこそアドヴァイタ派が教える最高の祈禱である。これが、われわれのほんとうの性質を思い出させる唯一の祈りである。すなわち、それを常に無限なる、全能なる、永久に善なる、永久に慈悲深い、没我的な、そして一切の制限を脱却したものと考えて、常にわれわれに内在する神を思い出させる唯一の祈りである。そしてその性質は没我的であるから、強くて恐るるところがない。ただ利己心のみ恐怖がついてくる。自分自身のために欲望すべき何ももたない人間が誰を恐れよう。また何が彼をおどすことができよう。彼に対して死もなんの恐怖を与えよう。彼に対して悪もなんの恐怖を与えよう。そこで、われわれは、もしアドヴァイティストになれば、この瞬間から、われわれの古い自己は死んでなくなったと考えなければならぬ。古い何某氏や何某夫人、何某嬢はなくなった。それらは迷信にすぎなかった。そして、残っているのは、永久に純潔な、永久に強い、全能なる、一切を知っているもの——それだけがわれわれにとって残っていて、そのとき一切の恐怖がわれわれから消え失せる。この遍在的なるわれわれを誰が害することができるか。一切の弱さがわれわれから消え失せた。われわれの唯一の仕事は、この知恵をわれわれの同胞のなかに呼び起すことだ。われわれは彼らもまた同じ純潔な自己であることを見る。ただ彼らはそれを知っていない。われわれは彼らに教えなければならない。彼らの無限なる性質を呼びますために彼らを助けなければならない。これが世界中で絶対に必要だと私の感ずることだ。この教義は

古い。恐らく多くの山岳よりも、もっと古いだらう。一切の真理は永遠である。真理は誰の財産でもない。いかなる人種も、いかなる個人も、それに対して特別専有権の要求をすることはできない。真理は、すべての魂の性質である。それに対して誰が特別の専有権を主張することができよう。しかし、それを実践化し、単純化しなければならない。最高の真理は常に単純であって、それがため人間社会のあらゆる隙間に滲透することができ、最高の知能にも最も平凡な精神にも、男にも女にも子供にも同時に共有財産になることができる。すべてこれらの論理の討究、すべてこれらの形而上学の束、すべてのこれらの神学と儀式、それらはみな彼ら自身の時代には善かったかもしれない。しかし、われわれは事態をもっと単純化して、各人が敬虔な礼拝者となり、各人の底かの実在が礼拝の対象になるような黄金時代を来らせようではないか。

(一八九六年十一月十八日、ロンドンにて講演)

## 靈魂と自然と神

ヴェーダーンタ哲学に従えば、人間はいわば三つの実体からできている。一番外側は身体であって、目、鼻、耳、その他の感覚の道具をそなえた人間の粗野な外形である。この目は視覚の根源ではない。それは道具にすぎない。その背後に器官がある。同様に、耳も聴覚の器官ではない。それは道具であって、その背後に器官がある。または近代の生理学で中枢と呼ぶところがある。それらの器官はサンスクリットではインドリヤス (Indriyas) と呼ばれる。もし目を支配する中枢が破壊されたなら、目は見ることができない。われわれのすべての感覚についても事情は同様である。さらに器官だけでも、それに他のあるものが付加されるまでは何物をも感覚することができない。そのあるものというのは意識である。あなたがたは、ある想念に没頭していて時計が鳴っても聞えなかったようなことを、たびたび認めている。何故か。耳はそこにあつた。振動がそこに入って脳髄に伝えられた。それでも聞えなかったのだ。なぜなら意識が器官に合致していなかったからだ。外界の事物の印象が器官に伝えられる。そして、意識がそれについていれば、印象をとりあげて、いわば、それに色どりを与える。その色どりは自我性、「私」と呼ばれる。私がある仕事をしているとき、一ぴぎの蚊が私の指を食った場合をとりあげよう。私はそれを感じない。私の意識がほかの事にいつているからだ。あとになって私の意識がインドリヤスに運ばれた印象に合致すると、ある反応が生ずる。この反応によって私はその蚊を意識する。そんなわけで意識が器官に合致しているだけでは、まだ十分ではない。意思という形式で反応が生じなければならない。この反応を起す能力すなわち知恵または知性という能力はブディ (Buddhi) と呼ばれる。まず、外面の道具、次いで器官がなければならない。その次に意識が器官に合致しなければならない。それから知性の反応が生じなければならない。そしてこれらの事柄がすべて完全であるとき、直ちに「私と外界の対象」という観念がひらめく。そしてそこに知覚、概念、知識がある。道具にすぎない外面的器官は身体にある。その背後に一層微妙な内面的器官がある。それから意識があり、それから知的能力があり、それから自我性が働いて「私」と言う。——私は見る、私は聞く、などなどと言う。全過程は一定の勢力によって運ばれてゆく。あなたがたはそれを生命力と呼んでもよい。サンスクリットではプラーナ (Prana) と呼ばれる。外面的な道具をそなえた人間の粗野な部分、この身体は、粗身、サンスクリットでストウラ・シャリーラ (Sthula Sharira) と呼ばれる。その背後に諸器官から始まって意識、知性、自我性という系列が来る。これら並びに生命力が、一つの複合体をつくり、それがスクシュマ・シャリーラ (Sukshma Sharira)、細身と呼ばれる。これらの

勢力は非常に微細な要素から構成されていて、この身体にどんな傷害を与えても、これらの勢力を破壊することはできない。この身体にどんな衝撃を与えても、これらは生き残る。われわれの見る粗身は粗野な材料で構成され、それがため常に新陳代謝して継続的に変化しつつある。しかし内面的器官、意識、知性ならびに自我性は最も微細な材料で構成され、その微妙繊細であるため未来永劫にわたって持続するであろう。それらは何物も抵抗できないほど微妙であって、どんな障害物でも通過することができる。粗身は非知性的であり、細身は微妙な物質で構成されているが非知性的である。一部分は意識、他の部分は知性、第三の部分は自我性と呼ばれているけれども、われわれは一見して、そのうちのどれも「知るもの」ではあり得ないことがわかる。そのうちのどれも認識者や証人ではあり得ない。そのものために行動がなされる当人、その行動の目撃者である当人であることはできない。意識におけるこれらの運動または認識作用や自我性の能力は、ある別の相手のためでなければならぬ。これらの微妙な物質からできているものは自ら発光することはできない。これらの明るきは自分自身のなかにあることはできない。例えば、このこのテーブルが顕現しているのは何か物質的なものによっているのではない。それゆえ、これらすべての背後に、実在的な顕現させるもの、真実の目撃者、真実の享樂者であるようなあるものがなければならぬ。そして彼はサンスクリットでアートマン (Atman) すなわち人間の魂、人間の実在的自我と呼ばれる。真実にものごとを見るのは彼である、外而的な道具や器官は印象をつかまえて意識に運び、意識は知性に運ぶ。知性はそれを鏡に写すように反射する。そして、その背後に、それを見とめて命令や指示を与える魂が控えている。彼はこれらの道具一切の支配者であり、一家の主人公であり、身体の玉座に坐せる王である。自我性の能力も、認識能力も、思索能力も器官や道具も身体も、これらすべてが彼の指揮に従する。これらすべてを顕現しつつあるのは彼である。これが人間のアートマンである。同じわけで、われわれは宇宙の小部分にあることが全宇宙にもなければならぬということを見ることができぬ。斉一性が宇宙の法則だとすれば、宇宙の各部分は全体と同じ計画で建設されているに違いない。そこでわれわれが当然考えるこの宇宙と呼んでいる粗野な物質的形式の背後に、われわれが思想と呼ぶところの一層微妙繊細な質料からできている宇宙がなければならず、そのまた背後に、この思想をすべて可能ならしめ、指揮を執るところの、この宇宙の王であるような一つの翼がなければならぬということである。各自の精神と身体の背後にある魂はプラティヤガートマン (Pratyagāman) 個人的自我と呼ばれる。そして宇宙の背後にあつてその案内者であり支配者であり統治者であるような魂は神である。

次に考察すべきことは、これらすべてがどこから来たかという点である。来たという意味は何か。もしそれがあつたものを無から引き出すことができるという意味なら、それは不可能である。この創造、この顕現のすべてを零ゼロから引き出すことはできない。何ものも原因なしに産出され得ない。そして結果は原因の再現されたものにすぎない。ここにコップがある。われわれがそれを打ち砕いてコナゴナにする。そして化学薬品によつてほとんど消滅させると仮定せよ。それは零になつてしまふだろうか。確かにそんなことはない。かたちはこわれるだろう。だが、かたちを作つている分子は、そこにあるだろう。われわれの感覚を越えてゆくだろう。しかしそれらは残つていたのであつて、それらの材料から別のコップが作られることもまったく可能なことである。もしこのことが一つの場合に真実であれば、あらゆる場合に真実であるだろう。あるものを無から作り出すことはできない。あるものが無に帰するようになることもできない。それは次第次第に微妙繊細になつてゆくかもしれないし、また次第次第に粗野で大柄になつてゆくかもしれない。雨の粒は水蒸気のかたちで大洋から引き出され、空气中に蒸発して山岳へ赴き、そこで再び水に変化する。そして何百マイルも流れ下つて母なる大洋へ戻つてゆく。種子が木を作り出す。木は種子を残して死んでゆく。種子は再び別の木となつて生長し、それがまた種子に終り、そうやって続いてゆく。鳥を見よ。いかにそれが卵からかえつて美しい鳥になつて、その一生を送り、未来の鳥になる胚種を蔵した、ただいくつかの卵を残して死んでゆくかを見よ。動物についても同様であり、人間についても同様である。あらゆるものは、いわば一定の種子、一定の萌芽、一定の微妙な形式から始まり、発達するに従つて、だんだん粗大になつてゆく。それから再びもとの微妙な形式に戻つてゆき、沈潜する。全宇宙は、こういう仕方で行進している。この全宇宙は解体して一層微妙繊細なものになり、最後に、いわば全く消滅してしまふ。しかし極微な物質として残る。われわれは近代の科学や天文学によつて、この地球が冷却しつつあることを知っている。それは時の経過につれて非常に寒くなるだろう。それからコナゴナに砕けて、もう一度エーテルになるまで、だんだん微細になつてゆくだろう。けれども、微粒子はすべて残つて別の地球を建設すべき材料をかたちづくるであろう。それが再び消滅するであろう。そして更に別のそれが出て来るであろう。同様にこの宇宙もその原因に戻つて行くであろう。そしてまたその質料が一緒に集まつて形状をとるだろう。ちょうど一度低まつていつて再び高まつていく形状をとる浪のようなものである。原因に戻つてゆく作用と再び出て来て形状をとる作用はサンスクリットではシャンコチャ (Shankocha) とヴィカーシャ (Vikasha) と呼ばれている。これは収縮と膨脹という意味である。全宇宙は、いわば収縮して、

それから膨脹する。近代科学でもっと広く受け入れられている言葉をつかえば、それらは退化したり進化したります。あなたがたは進化について、すべての形式が低いものから成長し、ゆるゆると成長してゆくという話より、これは非常に真実である。だが、あらゆる進化は退化を前提している。

われわれは、宇宙に散布されているエネルギーの総量は始終同じであること、物質は不滅であることを知っている。どんな手段を弄しても、あなたがたは物質の一微粒子をも取り去ることはできない。あなたがたは一フットポンドのエネルギーを取り去ることも、つけ加えることもできない。総量は常に同じである。ただ顕現が変わるだけで、退化したり進化したりしている。そこで、この循環は過去の循環の退化から出てきた進化である。そしてこの循環は再び退化し、だんだん微細になってゆき、そこから次の循環が来るであろう。全宇宙はこの流儀で進行しつつある。こんなわけで、あるものが無からは作り出されないという意味で、創造というものがないということ、われわれは発見する。もっとよい言葉を用いれば、そこには顕現があり、神は宇宙を顕現させているものである。宇宙は、いわば彼から吐き出されたものであり再び彼のなかに沈んでゆく。そしてまた彼がそれを投げ出す。最も美しい譬喩が『ヴェーダ』のなかで与えられている。

「かの永遠なる一者はこの宇宙を吐き出し、そしてそれを吸い込む。」

ちょうど、われわれが小さい塵の一片を吹き出してそれをまた吸い込むことができるようなものだ。それは至極結構だ。だが、しかし次のような問いが出るかもしれない。いったい最初の循環の際、それはどうだったか。その答えはこうだ。最初の循環という意味は何か。そこに最初の循環などというものはなかった。もしあなたがたが時間に一つの始まりを与えることができるならば、時間の全概念は破壊されるであろう。どこに時間が始まったかという限界について考えることを試みよ。あなたがたは、その限界を越えて時間を考えなければならぬ。空間がどこに始まるかを思うように試みよ。あなたがたは、それを越えて空間について考えなければならぬ。時間と空間とは無限である。それゆえ、始めもなければ終りもない。これは神が宇宙を五分間で創造して、それから眠り込んだ、それ以来、まだ眠りつづけているという話よりもましな観念である。半面において、この観念はわれわれに永遠の創造主としての神を与えるであろう。ここに起き伏しする波浪の系列がある。そして神はこの永遠の過程を指導しつつある。宇宙に始まりもなければ終りもないように神もまたそのとおりである。われわれは、それが必然的にそうでなければならぬことを見る。なぜなら、もしわれわれが、粗大なかたちでも微細なかたちでも創造がな

い時があったと言えば、そのときは神がなかったことになる。神はサークシ (Sakshi) すなわち宇宙の証人としてわれわれに知られているからである。宇宙が存在しなかったときは、彼も存在しなかった。一つ概念はと 他の概念に付随する。原因の観念をわれわれは結果の観念から得る。そしてもし結果がなければ、原因もないであろう。宇宙が永遠であるように神が永遠であるという結論が当然出てくる。魂も永遠でなければならぬ。何故？ 第一に、われわれには魂が物質でないということがわかる。それは粗身でもないし、またわれわれが意識とか思想とか呼んでいる細身でもない。それは生理的な身体でもなければ、キリスト教でいう霊的身体でもない。変化に従うものは粗身、霊的身体である。粗身はほとんど一分ごとに変化に従って、死んでゆく。しかし霊的身体は長い時期を通じて持ちこたえ、最後にそれも没落するとき、自由になる。人間が自由になるとき、霊的身体が分散する。粗身は人間が死ぬたびに崩壊する。なんらかの微粒子からできたものでない魂は破壊不能である。破壊とは何を意味するか。破壊とは、何かのものを構成している質料の分解である。もしこのコップがコナゴナに破壊されるならば、質料は分解するであろう。それがコップの破壊であるだろう。微粒子への分解がわれわれの破壊という意味である。微粒子で構成されていないものは 破壊することもできず、分解することもできないという結論が当然出てくる。魂は何かの質料で構成されたものではない。それは分割し得ない統一である。だからそれは破壊し得ないものである。同じ理由から、それにはなんの始まりもないものでなければならない。従って魂には始まりも終りもない。

われわれは三つの本体をもっている。ここに無限ではあるが変化流転する自然がある。自然の全体は始まりと終りはないが、そのなかに複雑多様な変化がある。それは数千年間、海に向かって流れてゆく川のようなものだ。それは常に同じ川である。しかし一分一分ごとに変わりつつある。水の微粒子は常住その位置を変えつつある。そうすれば、そこに神、不変なるもの、支配者がある。そしてそこに永遠であるが支配者の下に立つ神として不変なる魂がある。一つは主人であり、他は従僕である。そして第三者が自然である。

神は宇宙の建設、持続ならびに解体の原因であって、原因は結果を引き出すために現在しなければならぬ。それだけでなく、原因は結果となるのだ。コップは製作者によって用いられた一定の材料と一定の力から作り出される。コップのなかには材料プラス力がある。用いられた力が粘着力になっている。もしその力が抜けてしまえば、コップはコナゴナに砕けるであろう。材料も疑いなくコップのなかにある。た

だ彼らの形式が変えられている。原因が結果になっている。あなたがたがある結果を見るところにはどこでも、常にそれがある原因に分析することができる。その原因は結果として自己を顕現しているのだ。そこで、もし神が宇宙の原因であり宇宙が神の結果であるとすれば、神が宇宙になっているということになる。もしもろもろの魂が結果であって神が原因であるとすれば、神がもろもろの魂になっているのだ。それゆえ、各自の魂は神の一部分である。「火のかたまりから無数の火花が飛び散るように、かの永遠なる一者から一切のこの魂の宇宙が出て来た。」

われわれは永遠なる神があること、そして永遠なる自然があることを見た。そして、またそこに数限りない永遠なる魂がある。これが宗教における第一段階である。それは二元論と呼ばれる。人間は自分自身と神とが永遠に分離しているとして見、神はひとり神だけで分離した本体であり、人間は人間だけで分離した本体であり、自然は自然だけで分離した本体であるような段階である。これは主体と客体とがあらゆるものにおいて互いに対立していると主張する二元論である。人間は自然を見ると、彼は主体であり、自然は客体である。彼は主体と客体とのあいだに二元論を見る。彼が神を見ると、神を客体として見、自分を主体として見る。両者は徹頭徹尾分離している。これは神と人とのあいだの二元論である。これは一般に宗教の第一見解である。

それから私が今まであなたがたに示してきたもう一つの見解が来る。もし神が宇宙の原因であり、宇宙が結果であるならば、神自身が宇宙と魂になったのでなければならぬ、そして人間は神を全体とする微粒子にすぎないということを見出し始めている。われわれは小さい存在で、火のかたまりから飛び散る火花にすぎない。全宇宙は神自身の顕現である。これが第二段階である。サンスクリットでは、ヴィシシュタードヴァイタ (Vishishtadvaita 修正派二元論) と呼ばれる。ちょうど、私がこの身体を有し、この身体が魂をつつんでいて、魂がこの身体のなかにこの身体を通じてあるのと同様に、この無限の魂と自然を含んだ全宇宙は、いわば神の身体をかたちづくっている。退化の時期が来ると、宇宙が次第次第に微細になってゆくが、神の身体はそのまま残る。粗大な顕現のときがくると、やはり宇宙は神の身体としてとどまる。あたかも人間の魂が人間の身体や意識の魂であるように、神はわれわれの魂のその魂である。あなたがたはみんな、どの宗教でも「われわれの魂の魂」という表現を聞いている。それがその意味するところである。彼はいわば、もろもろの魂のなかに住み、それらを導き、それらすべての支配者である。第一の見解すなわち二元論のそれでは、われわれ各自は、神および自然から永遠に分離した個人である。第二の

見解では、われわれは個人ではあるが、神から分離してはいない。われわれは一つのかたまりのなかで漂っている小さい微粒子であるようなもので、そのかたまりが神である。われわれは別々の個人だが神のなかで一つである。われわれはすべて彼のなかにある。われわれは彼のすべての部分であって、従って一つである。けれども人間と人間、人間と神とのあいだには厳密な個別性があり、分離していて、しかも分離していないのである。

そこから、もつと微妙な質問が出てくる。その質問はこうだ。無限性は部分をもつことができるか。無限性の部分とは何を意味するか。もしあなたがたはその推論をよく徹底すれば、それが不可能なことを発見するだろう。無限性は分割することができない。それは、常に無限のままにとどまる。もしそれを分割することができるとすれば、各部分が無限であるだろう。そして二つの無限はあり得ない。かりに二つの無限があると仮定せよ。その一つは他を制限するであろう。そして二つとも有限なものになろう。無限はただ一つでしかあり得ず、分割はされない。こうして無限なるものは一つであって多くはないということ、一つの無限なる魂が幾千幾万の鏡に自己を反映して、かくも多くの別々の魂として現れているという結論に到達する。われわれが神と呼ぶところのものは、宇宙の背景である同じ無限なる魂である。同じ無限なる魂がまたわれわれが人間の魂と呼ぶところの人間意識の背景でもある。

## スワミ・ヴィヴェーカーナンダ小伝

東京ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会

V・S・ロー

スワミ・ヴィヴェーカーナンダの生涯と業績を熟知している人々にとって、一月十二日は生誕記念日である。ナレーンドラナート・ダッタ (Narendranath Datta) といい、後にスワミ・ヴィヴェーカーナンダ (Swami Vivekananda) として世界的に有名になった男の児が初めて日の目を見たのが、一八六三年のこの日であったからだ。

彼は、カルカッタの北方の地区シムラで、ある貴族の家族として極めて富裕な境遇のもとで生れた。彼の父はカルカッタ高等裁判所所属の弁護士であった。彼の本名は前に述べたとおりナレーンドラナート・ダッタであったが、世間では、ただスワミ・ヴィヴェーカーナンダとして知られている。これは修道僧の生活に入ってからの名まえである。

「ヴィヴェーカーナンダ」とは「識別者」を意味する。ここでこの名まえの由来を述べることは不当ではあるまい。それは彼の友人であり弟子であったケトリのマハーラージャ (Maharaja of Khetri) がこの高僧に贈ったもので、彼が世界宗教会議に列席するためアメリカへ向って出発する直前のことであった。そして、この名まえをラージャが考えついたのは、スワミの有する識別の能力であった。フランスの文学者ロマン・ローランはその古典的な伝記作品『ヴィヴェーカーナンダの生涯と世界的福音』のなかで、「ナレーン (ナレーンドラナートの略称) はそれを採用した。恐らく臨時のつもりだったらしいが、その後これを変更することができなくなった。たとい変更したくても、できなかったのだ。二、三カ月のうちにインドでもアメリカでも非常な名声を博するに至ったからである。」

ナレーンは天分の豊かな少年であった。そして小中学校から大学にかけて特別に頭脳明晰な学生として認められた。もともと、少年期のごく最初から、彼の勉強は直接の学習課程よりもむしろ範囲外の題目に余計向けられていたことを述べなければならない。彼が学んだスコットランド教会所属大学の学長、ウィリアム・W・ヘイスティ教授 (Prof. William W. Hastie) は彼についてこう言った。「ナレーンドラナートは実に天才だ。私は世界を広く旅行した。しかしドイツの大学で、哲学科の学生のあいだにも、彼ほどの才能や可能性のある若者に出逢ったことはない。生涯に必ず名声を博するに違いない。」

彼は入学試験を終了する前に (高校卒業に相当する)、すでに英文学およびベンガル文学の大部分の

標準著作をマスターしていた。そして非常に多くの歴史の書物を読んでいた。「彼の大学生活の最初の二年間に西洋論理学の名著をすべて完全に把握するところまでになり、第三、第四の学年では西洋哲学ならびにヨーロッパの種々の民族の古代および近代の歴史をマスターすることに没頭した。」

ナレーンはバチエラー・オブ・アーツ（文学士）の試験に通過した。そしてバチエラー・オブ・ロー（法学士）の学位を得る準備をしていた。しかしナレーンの心境に恐ろしい変化が生じつつあった。そして彼は「神への愛から生れる実在に対する願望を伴わないなら、一切の学問は無用だということを次第次第に悟り始めた。」彼はすでに、バチエラー・オブ・ローの学位ではなくて、偉大なる出家入道への準備をなしつつあった。彼より以前数世紀間もかの光明に照らされたものがやって来たように。そしてこれが強化されて彼の生涯の転機になったのは、彼が将来の導師スリ・ラーマクリシュナ・パラマハムサ（Sri Ramakrishna Paramahansa）に逢ったときだ。それはカルカッタの北方四マイルばかり、ガンジス河の東岸にあるダクシネスワル寺院（Dakshineswar Temple）においてであった。

彼は当時生きていた沢山の宗教界の名僧知識たちのところへ行つて訊いたと同じ質問をひっさげて彼のところへ行った。

「あなたは神を見たことがありますか。」

しかし誰もこれまで、神を見たと言いきる信念の力と勇氣をもったものはいなかった。この短兵急な質問に対してラーマクリシュナの単純な答えはこうだった。

「はい、私はここであなたを見ているのとまったく同じに神を見ます、ただもつとずっと強い感じですね。」彼は更に語をつづけた。「神は実見することができます。私があなたと逢つて話しているように、誰でも彼に逢つて話をすることができます。しかし、誰がそうしようと気にかけますか。人々は妻や子供のため、財産のために涙を滝のように流します。しかし、誰が神のためにそうしますか。もし人がしんから神を求めて泣いたなら、彼はキツト姿を現わします。」

ナレーンは即座に感動した。しかし彼はラーマクリシュナを受けいれなかった。ラーマクリシュナの言葉と生活に引きつけられたけれども、彼の理性は参らなかつた。ナレーンは反抗した。そして彼の感情が彼を征服するのを許しなくなかつた。彼はラーマクリシュナを身近くから看守り、その言葉を検査した。何事によらず証拠なしには採用しなくなかつた。彼はときおりラーマクリシュナを狂人と呼んで、その神に対する単純な信仰と信頼を嘲笑しさえした。

とにかく、このすべてが一変してナレーンがこの人のほんとうの価値を認め始めるときが来た。そして彼が参ったときには中途半端はやらなかった。彼はラーマグリシュナを導師として受け入れたのだった。

ラーマクリシュナが一八八六年他界した後、家庭や親戚や世俗的な一切のものをあとにして修道僧の生活に入ったナレーンは、五年間（最初は一人か二人かの同派の修道僧と一緒に、後の二年は孤独で）手に杖と乞食鉢とをもつ行脚僧としてインドの各地を徒歩で放浪した。

ナレーンが一八九三年シカゴで開かれる宗教会議のことをはじめて耳にしたのは、このころのことだった。そして彼は彼の崇拜者や親しい弟子たちのあるものに、宗教会議に出席したいというひそかな望みをもらし、この会議が彼の成功の道を開くべく運命づけられているということをつ言した。

宗教会議は一八九三年九月シカゴで開催された。そしてそれは宗教の歴史における重大な意義のある出来事であった。世界中のあらゆる宗教の代表者たちが会議に参加するように招待され、世界のすみずみから宗教界のすべての権威者たちがそこへ集った。

会議におけるヴィヴェーカーナンダの成功は迅速であった。このときから彼は「アメリカの兄弟姉妹たちよ」という単純な開口の言葉をつかうことになった。彼は数千人の出席者をとらえてしまった。そしてそれにつづく彼の講演は、全員出席の総会においても科学的な分科会においても——彼の有名な「ヒンズイズムに関する報告」をも含めて——ただ彼の人気を高めるだけであった。新聞各紙もこれに注目を怠らなかった。『ニューヨーク・ヘラルド』紙は彼について、こう言った。「彼は疑いもなく宗教会議における最大の人物だ。彼の言を聞いたあとでは、われわれはこの（インドの）学者国民に対して宣教師を送ることがどんなに馬鹿げたことかを感じる。」

ヴィヴェーカーナンダは約二年間アメリカに滞在した。そのあいだじゅう彼は説教し、講演し、研究クラスを持ち、インタビューなどをしてアメリカ全土の大都市をまわった。インドの場合と同様に、彼のあとには一群の弟子と働き手を、その仕事を推進するために残した。ヴィヴェーカーナンダは一八九五年十一月、パリを通って英国へ旅行した。

英国でもヴィヴェーカーナンダは非常な好意をもって迎えられた。ロマン・ローランは書いている。

「新聞は彼に対する大きい礼賛を表明した。ヴィヴェーカーナンダという道德的人物は最高の宗教的巨

像のそれ——ただに彼のインドの先駆者ラム・モフン・ロイ (Ram Mohun Roy) やケシャブ (Keshab)

のそれにとどまらず、仏陀やキリストにも比較された。彼は貴族社会でも歓迎された。教会の首脳たちすら彼に対して同情を示した。」

そして彼がマーガレット・M・ノーブル嬢 (Miss Margaret M. Noble) と出逢ったのは英国においてであった。彼女は彼が英国を退去する前、ヴィヴェーカーナンダを師と仰いでインドの修道院に迎えられた最初の西洋婦人になるべく、彼とともにインドにわたった。彼女はあらゆるもの——彼女の家庭、彼女の祖国、彼女の名まえすら——を棄てて、あとでニヴェディタ (Sister Nivedita) として知られた。

一八九九年六月、ヴィヴェーカーナンダはアメリカと英国へ再度の訪問旅行をした。主として、彼が最初の訪問の際に基礎を据えた事業を固めるためであった。一九〇〇年十二月インドに帰ったが過労のため彼の健康がひどく損われていた。

ヴィヴェーカーナンダは一九〇二年七月四日 (彼の心に非常に貴重な日であったが)、三十九歳で死んだ (彼は繰り返し繰り返し自分は四十までは生きないだろうと言っていた)。

しかし彼が世を去る前にヴィヴェーカーナンダは自分の事業を強固な基礎の上に置いた。彼の死後はラーマクリシュナ教団を形成している同門の僧侶たちがこの偉大なるスワミの残した善き事業を継続させた。その結果、ラーマクリシュナ運動 (互いに異なる宗教は一つの不滅な永遠な宗教の種々の形式にすぎないということを知って、それらの異なる宗教の信者の間の友好関係の樹立に捧げられた運動) はヴィヴェーカーナンダの遺志を受けてから恐ろしく拡大し、世界の多くの部分にセンターをもつようになった。

この運動について、著名な英国の作家クリストファー・イシャーウッド (Christopher Isherwood) が次のように述べている。

「精神的真理は永遠である。しかし、次々の時期にわたる変ってゆく諸問題を解決するためには、人間生活において繰り返し表明されなければならない。ラーマクリシュナの教えはわれわれの近代的福音である。彼は二千年前の人々のためではなく、現代のわれわれのために生き、そして教えた。そしてラーマクリシュナ運動は、今このわれわれのあいだに彼の福音を宣り伝える責任をもっている。この理由だけで、この運動は一切の既存の宗教運動のなかで最も重要なものと考えなければならない。たとい他の宗教運動がどんなに大きく、どんなに影響力に富んでいても、またはどんなに尊敬すべきものであっても。」

訳者あとがき

本書はスワミ・ヴィヴェーカーナンダのヴェーダーンタ哲学に関係のある講演を集めたものである。次のテキストに拠った。

The Complete Works of Swami Vivekananda (Calcutta) Vol. I, II, IV.

詩

Angels Unawares. Peace. (Vol.IV. Sixth Ed. 1948.)

ヴェーダーンタ哲学とは何か

The Vedanta Philosophy. (Vol.I Tenth Ed. 1957.)

実在の人間と現象的の人間

The Real Man and the Apparent Man. (Vol.II. Ninth Ed. 1 1958.)

ヴェーダーンタ哲学の実践

Practical Vedanta, Part I, II, III, IV. (Vol. II.)

靈魂と自然と神

Soul, Nature, and God. (Vol. II.)

ヴィヴェーカーナンダの著作は主として講演集であるから、外形上は必ずしも組織だったものではない。また時々部分的に重複した個所が見かけられる。しかしその背後に荘嚴無比な哲学体系が秘められている。それは『ヴェーダ』の深遠な伝統と近代西欧思想との総合による独創的な靈的啓示である。

従来、日本では仏教関係を除いて本来の印度哲学については、あまり知られていない。少数の尊敬すべき専門家たちは、それぞれ各自の研究に没頭している。しかし、その多くは古典のあるものについてのテキストの訓詁や考証をはじめとし、主として言語学的関心の方面に限られている。その内容的研究の分野とは没交渉である。その宗教、その瞑想、その哲学を本質的に追求することには関心が薄いように見える。特にそれを現代に生かされた姿において眺めることは概して行なわれていない。『ヴェーダ(吠陀)』から『ブラーマナ(梵書)』を経て『ウパニシャッド(奥義書)』に至る古代の知恵を継承発展させてきたヴェーダーンタ哲学は現代に生きているのである。スワミ・ヴィヴェーカーナンダはヴェーダーンタティストとして、その血管のなかを流れる聖なる情熱の血汐をたぎらせて、言葉と言葉、文字と文字のあいだに不死の生命を注ぎこんでいる。

彼は死んでいない。

訳者しるす